

「ぢや、貴方はこれから如何する積りなんです？」

「全然解りませんね！」

「何故貴方は如何かしてそんな境涯から遁れるだけの手段を取らないのです？」

「何んな手段を取つたら可いのです？」

「何か奉職の口でも捜したら可いでせう。」

「私ばこれで官廳に秘書官を勤めて居たこともありました。だが、今と成つては私に何んな地位を與へて呉れると思ひます？ 私も眞逆一年五百留布位の些細な俸給で勤める譯にも行きませんからね。考へて見て下さい、私には女房も有れば五人の子供も有るんですよ。」

「所領の監督にでも備はれては如何です？」

「誰が私に財産を任せて呉れるんです？ 私は自分の財産ですら失したのでですよ。」

「ふむ、ですが飢餓と死に迫られたら、何か爲すには居られないでせう？ 町の誰

かを通じて奉職の口が獲られないものか、一つ義兄に倚頼んで見ませうよ。」

「いや、ブラトン・ミカイロフ君」と、クロブヨフは溜息を吐いて、熱心に相手の手を握りながら答へた。私は最う何の役にも立たない人間ですよ。私も未だそんな時分でないのにつきかり老い込んで仕舞つた。若い時道樂した罰で腰が痛めば、肩には僕麻質斯が有るんです。斯んな人間が何の役に立ちます？ 加之、従來も随分役に立たない人間のために利益の有る餘計な地位が儲けられたのですからね。此上私のために貧乏な諸階級の税金を増すのは、神様も禁じられませうよ。」

「放蕩の結果は斯んなものかな！」と、ブラトノフは一人で考へた。「これに較べりや、俺の放心の方が未だしも可いやうだね。」

同時に、二人が斯うして談話をして居る間、コスタンツォーグロは背後にチ、コフと並んで歩きながら、我を忘れる程憤怒の情に驅られて居た。

「御覽なさい」と、コスタンツォーグロは一方を指差しながら言つた。「あの男は斯



んな惨目な状態に百姓をして仕舞つたのですよ。如何です、此村には荷車一臺なければ、馬一疋居ない。牛疫なぞが流行り出したとすれば、地主たる者は自分の財産なぞ構つて居るべきではない。直様自分の所有物を賣拂つて、百姓どもに家畜を供給しなければ成らない。一日と雖も、彼等を働く道具なしで打捨つて置くべきではありませんからね。だが、斯んな風に成れば、數年間は逆も恢復しないでせう。百姓どもは怠惰漢の仕様の無い泥酔漢に成つて仕舞つて居ますからね。一年間でも彼等に仕事をさせずに打捨つて置いたら、永久に臺なしにして仕舞ふのですよ。襤褸や放浪の生活には極めて慣れ易いものですからね。で、何と云ふ土地だ！此土地を御覽なさい！」と、彼は百姓小舎の背後から直に現れて來た田野を指差しながら言つた。「これ等は悉皆水田ですよ、私は此處へ亞麻を植ゑて、そればかりでも五千留布は上げて見せますよ。又蕎麥を植ゑ附けて、それから四千留布は獲れますね。又彼處を御覽なさい、あの坂の上に以前は森林が立つて居ましたがね、今見ると何にもない。あの男は何にも

種子を蒔かなかつたのだ——そりやア解つてますよ。で、彼處の谷合を御覽なさい。私が彼處に植林したら、鴉でも頂邊迄は飛んで行かれないやうな、立派な森を拵へて見せますよ。斯んな好い土地を打捨つて置くなんて、如何云ふ考へです！若し何にも土地を耕す道具がなかつたら、自分の手を下して鋤で野菜畑を拵へても可いんですよ。細君にも、子供達にも、下男どもにも皆左様させるが可い。それで未だ獸類のやうに死ななくちや成らぬとしても、未だしも仕事の上で死ぬんですよ。其時は少くとも自分の義務を盡して死ぬんぢやありませんか。でなけりや、豚のやうに自分で自分の肉を御馳走に喰ふが可いんですよ。」斯う言ひながら、コスタンツォーグロは其處へ唾を吐いた。彼の痲痺は額を悒鬱な雲で曇らせた。

一同がなほ進んで、クローブの葉で蔽はれた懸崖の頂邊に立ちながら、川の光る曲角を見下して、最初はベトリシユチェフ將軍の住家の一部が森の端から覗いて居る遠い谷合を、それから又遠方の蒼白い霧に包まれた葉山茂山を見遣つた時、チ、コフは不



意に言ひ出した。「此處に立派な村を建設したら、此村は美の點で世界のあらゆる村に打勝つて仕舞ひませうね。」

「ぢや、貴方は美しい景色の愛好者ですわね！と、コスタンツォーグロは厳しい眼に目早く彼を見返りながら言つた。「お氣を附けなさい！ 若し貴方が眺望なぞに心を注いで居たら、麴包は一つも獲れなく成るでせうよ。美なぞは如何でも可いから、田野のことを心に懸けて被坐しやい。美は自然に生じますよ。例を擧ぐれば、此世で一番美しい町と云へば、各人が個々の便宜と趣味性に従つて建てたものが左様なんですからね。美の法則なぞに従つて建てたものはブラックの寄せ集めに過ぎないのですよ。美なぞは如何でも可い！ 實際の効果を擧げることが心に懸けて被坐しやい！」

「そんなに長く待たなくちや成らぬとすれば、眞個困りましたね。私は何も彼も早く工合好くして見たいのですよ。」

「忍耐！ 數年間はお働きなさい。植ゑ附けて、種子を蒔いて、土を耕す——一分間の休息もなしにですよ。そりやア困難だ、眞個困難だ。が、後に土地が好く成つて来た日には、恰度機械が獨りで廻るやうに、自然に貴方を助けるやうに成りますよ。左様だ、貴方が今度手に入れられた七十本の手の外に、七百本の眼に見えない手が貴方のために働くやうに成りますよ。何も彼も十倍にも増加して來ますよ。私は今指一本動かさない。が、何も彼も自然に廻つて行くのですわ。左様だ、自然は忍耐を愛する。これは神自ら自然のために拵へて遣つた法則ですよ。」

「貴方のお話を伺つて居ると、私はむいゝゝと力が湧き上つて來るやうな氣がしますよ。勇氣が生ずるんですわ」と、チ、コフは言つた。

「此の土地の耕し様を御覽なさい！」と、コスタンツォーグロは坂を指差して、鋭い憤怒の念を感じながら呶鳴つた。「私は最う此上此處に居る氣がしない。斯んな亂雜と荒廢とを見て居るのは、私にや死ぬより辛いのですよ。貴方も最う私が傍に居ないでもあの男と談判を遂げることは出來ませう。出來るだけ早くあの馬鹿の手から此土地を



救ひ出してお遣りなさい。あの男は只神の賜物を汚辱して居るばかりですよ。」斯う言ひながら、それでなくとも氣難しい性癖を彌が上に掻き亂された、コスタンツォーグロは、チ、コフの傍を去つて、主人に追ひ着きながら、性急に別れの辭を告げた。

「お願ひですから、コスタンチン・フォードロ井ツチ君」と、主人は驚いてまごまごしながら言つた。「貴方は唯今被入しただけぢやありませんか。それなのに、最う歸つて行くんですね！」

「此上お邪魔をして居る譯には行きませんよ。自宅に差懸つた用事が有るんですから」と、コスタンツォーグロは答へた。斯う言つて、急いで別れを告げて、自分の馬車に飛び乗つて、駈け出して行つて仕舞つた。

クロブヨフも彼が斯んなにして立去つた理由を理解して居るやうに見えた。

「コスタンチン・フォードロ井ツチ君には堪へられないのだね」と、彼は言つた。「あの人のやうな經營者にとつては、斯んな亂雑な處を見せられるのは餘り氣持の好いも

のぢやないでせうからね。ねえ貴方、バヅエル・イワノ井ツチ君、私は今年種子さへ蔭かなかつたのですよ。正直の處、耕作の道具が一つもないと云ふ事實は擧げない迄も、種子が少許もなかつたのですからね。ブラトン・ミカイロ井ツチ君、貴方の義兄さんは素張しい經營者だと云ふ評判ですね。眞個コスタンチン・フォードロ井ツチ君は——え、あの人はあの人の社會に於けるナポレオンですよ。實際、私は時々考へますね、如何してあんなに澤山の脳味噌が一人の頭の中へ這入つて居るんだらうと。切めてあの人の一小部分でも可いから、私の此の馬鹿な頭の中へ入れて置かれなかつたものでせうかね。皆さん、氣を附けて下さいよ。池の中へ落ちこまないやうに、氣を附けて橋を渡つて下さい。私は橋板を修繕するやうに此春から吩咐けて置いたのですよ。私が一番悔恨の念を禁じ得ないのは、あの憐れな百姓どもですね。彼奴等には如何しても模範を示して遣る必要が有る。それは私も十分に知つて居ますが、私が又何んな模範なんです？ 一體私は如何したら可いでせうね？ 私は自分ながら正確で嚴重で有る



ことが出来ぬ。自分からしてだ、いがないのに、如何して彼奴等の中に秩序を教へ込むことが出来ますか。何卒貴方が彼奴等を教へて遣つて下さい、バヴェル・イワノヰツチさん！ 私はずつと前から彼奴等を解放して遣らうと考へないこともなかつたのですがね、解放した處で、何人の利益にも成らないと思ふから止め／＼して居たのですよ。先づ第一番に自分達の生活を整理することを彼奴等に習得させるのが必要なんです。それは私にも解つて居る。が、それには嚴格で眞直な人物が彼等と一緒に住んで、自分自身の模範と不斷の精勵とに依つて、彼等の上に影響を及ぼすやうにするのが必要なんです。私は自分自身の例からして、露西亞人と云ふものは誰か前へ突出して呉れるものがなくちや遣つて行かれない人間だと云ふことを熟々感じましたよ。それがなけりや、露西亞人は皆座睡りながら滅亡して行くんですね。」

「露西亞人がそんなにして座睡りながら滅亡して行くと云ふのは」と、ブラトノフが言つた。「誰か眼を開いて下層階級の人民を見張つて居るのでなけりや、彼奴等が皆

醉拂ひや碌でなしに成つて仕舞ふと云ふのは、眞個不思議な譯ですね。」

「そりやア文明の缺乏から起るんでせう」と、チ、コフが傍から言つた。

「何が原因だか薩張判りませんよ」と、クロブヨフは續けて言つた。「確かに我々は開化した人間でせう。私は大學の講義にも出席したことが有る。が、大學に居たと云つて、貴方方の御覽に入れるやうなものが何處に有りますか。さア、私が何を習得て來ましたか？ 大學では日常の生活を立て、行く術を教へて呉れないばかりでなく、何が新しく洒落れて居る、何が生活上便利だと、出来るだけ澤山の金子を浪費させるやうに、私を教へ込むことに全力を盡して居るんですよ。で、彼奴等は金子を浪費する上に必要な事柄を出来るだけ澤山私に教へ込んで仕舞ひました。何故私は斯んな馬鹿な方法で教育されたのでせう？ 左様だ、先づ私の仲間を見て御覽なさい。二人や三人は成程大學の教育から利益も享けたでせう。これも恐らくは其奴等が元來伶俐に生れたからなんです。ですが、他の者は只自分達の健康を害ひ、衣囊から金子



を誘き出されるやうなことばかり一生懸命に習得て居たのですよ。畢竟私どもは始終文明の中から一番悪いものばかり撰んで習得て来たのですね。私どもは只皮相を掴んで、實質を逸して居る。いや、バヴェル・イワノヰチさん、私どもは未だ生活する術も理解して居ない。が、如何云ふ理由だと云ふことは、あゝ！ 私には何とも言はれませんね。」

「屹度何か理由があるんでせう」と、チ、コフが傍から言つた。

憐れなクロブヨフは幾度も深い溜息を洩らした。そして、次の様に續けて言つた。

私には時として露西亞人と云ふものは失はれた人間のやうに思はれますね。露西亞人は何でも爲たいと思ふ、それで居て何にも爲すことが出来ない。始終自分も明日の朝からは新しい生活を始めようと考へて居るんですね。が、其結果何一つ爲出来さな。其の同じ晩に喰ひ過ぎをして、眼ばかりぱち／＼させる外に何にも出来ない、舌さへ動かすことが出来なく成るんですね。只坐つたまゝ、鼻のやうにちろ／＼人の顔

を眺めて居るんですよ。實際、私どもは皆其通りなんですな。」

「左様だ」と、チ、コフは笑ひながら言つた。「そんな事も間々有るものですよ。」

「最一此方向に曲らうぢやありませんか」と、クロブヨフが言つた。「では、これから百姓どもの田畑を見て下さい。」

歸り途の光景も同じ様なものであつた。だらしない亂雑が到る所に見えて居た。有らゆるものが打捨らかしてあつた。一人汚ない着物を着た女が何やら腹を立てながら、小さな女の兒を死ぬ程殴り据ゑて居た。そして、四方八方からさま／＼な悪魔を招び寄せては罵つて居た。最少し行くと、二人の百姓がストイック的に冷淡な眼で或る酔拂ひの女の憤怒を眺めて居た。一人は脊中を抓いて居るし、一人は欠伸をして居た。欠伸は到る所の人家の上にさへ見られた、屋根が皆口を開いて居るのだ。ブラトノフは又ブラトノフで、それを眺めながら欠伸をして居た。「斯んな百姓どもが俺の未來の財産なんだな」と、チ、コフは考へた。「到る所穴又穴、補布又綴布だ。」で、



實際或る小舎の頂邊には屋根の代りに門が建つて居た。崩れて行く壁には、主人の小舎から持つて来た突支棒が支つてあつた。想ふに、トリシキンの上衣を繕ふ遣り方が此處の家政の經營に浸潤して居るらしい。百姓どもは手頸や上衣の尻尾から切取つて来て、臂の穴を繕ふのだ。(註曰、有名なクリロフのお伽噺から取つて来た話である。)

「貴方の所領は餘り羨ましいやうな状態には在りませんね」と、一同主人の家へ這入つた時、チ、コフが言ひ出した。

家の中では、一同又貧困と過去の奢侈の記念なる、びか／＼するやくざな物との混淆に眼を敬てた。シエキスピアの像が墨汁壺の上に載つて居た。卓子の上には、可愛らしい象牙の香搔き道具が載せてあつた。二人の客は最新流行の衣裳を着て居る此家の女主人に迎接された。此女は町のことや其處で興行される芝居のことはかり話して居た。四人の子供も綺麗に品好く着飾らせてあつた。お負けに、彼等は一人の保母さ

へ有つて居た。が、それは彼等を見る者に一層裏悲しいやうな思ひをさせた。彼等は皆瘦せて病人らしいやうな顔をして居たからである。寧ろ縞の下袴や單純な外衣を着て居たら、一人で自由に庭を駆け廻ることを許されて居たら、そして、何の點から見ても強壯な村の頑童どもと少しも違つて居なかつたら、其方が何の位好かつたかも知れない。女主人の許へは、直に又二人の女の客が遣つて来た——好く饒舌る空手の客である——最後に婦人連は自分達の部屋へ引退つて、子供達も其後から駆けで行つた。そして、大人連だけ後に残された。

「で、此所領に對して貴方は幾許位御入用だと仰有るのですか」と、チ、コフが訊いた。「明けすけに申上げて置きますがね、最初からぎり／＼一杯廉い値段を言つて下さらなきや困りますよ。此所領は私が考へて来たよりすつと好くない状態に成つて居ますからね。」

「いや最う、好くない段ですかい、パウエル・イワノギツチさん」と、クロブヨフは答



へた。「で、そればかりぢや有りませんよ。私は斯う云ふことも貴方に隠さうとは思はない、戸籍簿に登録されて居る百人の農奴の中只五十人が生きて居るばかりですよ。こりやア私どもの間で流行つた虎列刺のお蔭です。他にも未だ通行券も持たないで逃げ出した奴が大分有りますよ。で、其奴等も死人の中に數へて置かなきや成りますまいね。若し抵當に取つた方で強く出られたら、此所領は悉皆裁判所の手に渡つて仕舞ひますよ。ですから、私も三萬留布以上は頂かうと思つて居ませんよ。」

チ、コフは考へて懸引を遣り出した。

「何ですつて！ 三萬留布！ 斯んな所領に對して、三萬留布ですつて！ さア、二萬五千留布以上は逆も出せませぬね。」

プラトノフは友達の言葉が恥かしいやうな氣がした。「まアそれだけで買つてお遣んなさい。バヅエル・イワノギツチ君」と、彼は言つた。「それだけの値なら、何時でも此所領を賣れますよ。若し貴方が三萬留布お出しなさらなけりや、私は兄と相談して、共

同にこれを買つて仕舞ひますよ。」

「宜しい、それぢや買受けます」と、チ、コフは吃驚しながら言つた。「宜しいとも。ですが、値段の一半だけは一年間猶豫して頂くと云ふ條件にしたいものですね。」

「いや、バヅエル・イワノギツチさん、そんな事考へて見る迄もない、出来ませぬよ。半分だけ此場で私に下さい、後の半分は二週間お待ち申しますよ。銀行もあの高利貸の蛭どもを免れることが出来さへすりや、それだけの金額は私に貸して呉れるでせうからね。」

「成程？ ふむ、ふむ」と、チ、コフが言つた。「ですが、私は此處に一萬留布しきや有つて居ませぬよ。」此點に於て、彼は嘘を吐いたのだ。コスタンツォーグロから借りた金子を入れない迄も、悉皆で二萬留布は有つて居た。が、一時にそれだけの金子と別れるのが彼には苦しいのである。

「いや、そりやア逆も、バヅエル・イワノギツチさん！ 私も一萬五千留布だけは絶對



に入用なのですからね、えゝ！」

「では、如何しても五千留布だけ足りないのですね。私も即座にそれだけの金子を調達する法が附かないのですよ。」

「私が明日五千留布だけは貸して上げますよ」と、ブラトノフが言った。

「本當に貸して下さいますか」と、チ、コフが叫んだ。そして、心の中では「ふじ、此奴が其金子を俺に貸して呉れるとは、眞個旨いものだ」と考へて居た。彼等はそれから賣買の契約が出来上つたものとして手を拍つた。チ、コフは馬車の中から衣裳函を持つて來させて、其中から一萬留布の金子を取出しながら、それを手附金としてクロブヨフに手渡しした。彼は又次の日残りの五千留布を持つて來ると約束した。即ち彼は約束したのだ。が、彼は二三日置いてから三千留布か、乃至其邊の見當で持つて來て遣る積りで居た。實際又出来ることなら、それ以上に引張つて遣らうと覺悟して居た。バヴエル・イワノギッチは特に自分の手から幾許でも金子を手離すことが所嫌

なのだ。如何しても手離さなくちや成らぬ場合にも、金子を出すことは今日より明日にして置く方が好いやうに彼には思はれた。即ち彼は我々人間が總て遣るやうに遣つて居たのだ。我々は皆債主に延ばさせて置く方が便利だと考へて居る。債主が來たら暫く玄關で甲羅を研がせて置くが可い。彼奴だつて其位待たれないことはあるまい！彼奴に取つて時間が貴重であらうとなからうと、其爲に彼奴の商賣が失敗しようとして、そんな事我々の知つたことではない。明日來るが可い、ねえお前、俺は今日お前なぞに繋つて居る暇がないのだよ。

「此後貴方は何處でお住居に成る積りですか？」と、ブラトノフは改まつてクロブヨフに訊いた。「未だ他に村をお有ちですか。」

「いや、そんな物は一つも有りませんよ。私は町へ行く積りです。町には小さな家を持つて居ますからね。何處で住んでも同じことですよ。加之、子供のためにも有りませんから、何れにしても町へ移る必要には迫られて居たのです。子供達も神の方則に遵



つて、音楽や舞踏の教師にも附けなくちや成りませんからね。勿論、田舎に居ちやそんな教師は容易に得られないでせう。」

「麴包一缺片ない癖に、子供に舞踏を習はせなくちや成らない！」と、チ、コフは考へた。

「こりやア奇妙だ」と、プラトノフも考へた。

「ですが、私どもも如何にかして此契約を潤さなくちや成りませんね」と、クロブヨフが言つた。「おい、こらッ、クリウシカー！ 三鞭を一瓶持つて来い、好い奴だからね。」

「麴包一片もないのに、三鞭は有るんだな」と、チ、コフは考へた。

プラトノフは如何考へて可いか知らなかつた。

クロブヨフは必要の際に、何時でも三鞭を用意して居た。彼は町へ使者を遣つた。―で、如何すりやア可いのだ？ ウス（ライ麥から取つた酒）は何の店でも信用貸ちや

賣らない、而も酒は飲まなくちや成らない。處で、近頃彼得斯堡から遣つて来て、新に酒舗を開いた佛蘭西人は、誰にでも信用貸で酒を持つて行かせた。クロブヨフに取つては、此男の店から代物を拂はないで三鞭を取寄せる外に如何することも出来ないのだ。

其三鞭が今や持出された。一同三杯づゝ飲んで、大分好い心持に成つた。クロブヨフは寛いで来た。愛嬌も好く成れば、社交的にも成つた。又逸話や警句を溢れるやうに吐いた。彼は其會話に於て人間や世間に對して非常に多くの知識を備へて居る實を示した。さまざまの事柄に對して能く正當な判断を下した、又仲間の地主の人物をも二三の言葉で適當に、且巧妙に描いて見せた、彼は地主どもの誤謬や缺點を明瞭に認めて居た、零落した人々の歴史も十分に心得て居た。―何が故に又如何云ふ風にして失敗したと云ふことも――彼は又地主どもの性癖を多くの獨創と技巧とを以て描寫する術も心得て居た。それがために、聞手は二人ながら談話の間にすつかり魅せられて



仕舞つて、此男のことを非常に優れた利巧な人として稱揚するやうに傾いて来た。

『貴方の才幹を有つて居ながら』と、チ、コフは言つた。『何一つ計畫も手段も立たないと云ふのは、眞個驚いた譯ですね。』

『私も計畫は有つて居ますよ』と、クロブヨフは答へた。そして、直様計畫を山のやうに並べ立て、二人を壓倒した。其又計畫が皆無茶で、法外な、人間と世間との知識から少しも導かれないうやうなものばかりだ。それがために聞手は只肩を聳かして、『成程！ 人間と世間に對する知識と、其知識を應用する技術との間には、計り知らぬ溝壑が存在して居るものだな！』と言ふ外なかつた。何の計畫も皆何れかの方面から直接十乃至二十萬留布の金額を獲得すると云ふ、其事の上にて建てられて居た。それさへ出来れば、何も彼も眞當面に成る、彼の所領も適當に處理されて行くやうに、クロブヨフには見えて居た。収入も四倍されるだらうし、有らゆる損害も修理される、自分分は又借金も拂はれるやうな身分に成るだらうと考へて居た。で、彼は次の様に結論

を下した。『ですが、貴方は私に如何爲ると仰有いますり、十乃至二十萬留布を資本として豫じめ私に貸與しようと思ふ決心の着くやうな慈善家は有りませんからね。え、一人も有りませんとも。明かに神様がそれを欲しないのですよ。』

『神様が此馬鹿に二十萬留布を恵んで下さらうとは、旨い考へだな』と、チ、コフは一人で考へた。

『處で、私には三百萬も有つて居る伯母が有るのでですよ』と、クロブヨフは續けて言つた。『其伯母は神信心な婆さんでしてね、教會や僧院へ幾許でも寄附するのですよ。ですが、近い親類を助けようなどとは却々思はないのだから困つて仕舞ひませアね。眞個、お話するだけの値打が有るやうな、舊式の伯母ですよ。金絲鳥を四百羽も飼つて居て、其他狎も居れば、居候も居る。召使と云へば、近頃ちや何處でも見られないやうな奴等が揃つて居るんですね。下男の中の一若者が六十歳以上だと云ふから驚きますよ。それでも伯母は始終「おい、こら、子供！」と喚んで居ますがね。』



お客でも伯母の氣に適らないやうな振舞をしたが最後、伯母は食卓に就いた時、其男一人除け者にして御馳走を運べと吩咐けるんだから耐りませんや。で、それが其通りにされるんですよ。眞個伯母はそんな女ですね！」

ブラトノフは聲を揚げて笑ひ出した。

「伯母さんの名は何と云つて、何處にお住居なんです？」と、チ、コフが訊いた。

「伯母は此州の町に住んで居ますよ。名前はアレキサンドラ・イワノフナ・カナサロ一ツと云ひます。」

「如何して貴方は其伯母さんに頼んで見ないのです？」と、ブラトノフは同情しながら訊いた。「伯母さんも貴方の家庭の事情を御存じに成つたら、出来るだけの補助は惜まれないだらうと、私には思はれますがね。」

「いえなに、それが惜むんですよ。伯母はまア意志の堅い方でしてね、實際燧石のやうな婆さんですよ、ブラトン・ミカイロギッチ君！ それに又私が居なくとも、伯母

に附纏つて居る奴等は山のやうに有るんですからね。一人知事に成りたいと望んで居る男が有りましてね、其男が伯母と親類だと言張るんです。そして、伯母の財産を手に入れようと企圖んで居るんですね。多分其奴は成功するでせうよ。」

「馬鹿だな！」と、チ、コフは考へた。「俺だつてそんな伯母さんが有りや、乳母が子供の世話をするやうに世話をしてみせるよ。」

「いや、談話と云ふものは乾燥な仕事ですわね！」と、クロブヨフは言つた。「おい、こらクリウシカ！ 最う一本三鞭を持つて来い。」

「いや、私は最う飲みませせんよ」と、ブラトノフが言つた

「私も飲みませせん」と、チ、コフが後から附け加へた。そして、二人ながら斷乎とした態度でそれを謝絶つた。

「宜しい、ぢや、少くとも町の私の許を訪問すると約束して下さい。七月の八日に町の役人連を招んで宴會を開く筈ですからね。」



「何ですと！」と、プラトノフは嘖鳴つた。貴方のやうなすつかり零落した事情の下に在つて、宴會を開くんですつて！」

「如何するもんですか。そりやア開かずに置かれなさいのですよ。私の義務ですからね」と、クロブヨフが答へた。「あの連中が此前私を招待して呉れたのですよ。」

プラトノフは眼を瞠つたまゝ、言句が出なかつた。今日迄彼は、露西亞の町や都會には其人の一生が絶対に解し難い謎に成つて居る一種の賢い人間が住んで居ることを知らずに居たのだ。此種の人間はすつかり零落して居るやうに見える、頭の頂邊迄負債に浸つて居る、何處にも財産なぞ有つて居ない、それで居て尙且つ彼は宴會を開くのだ。お客は皆これが最後の宴會である、主人は明日の朝監獄へ送られるだらうと云ふやうなことを言ひ合つて居る。十年過ぎる。で、其賢い人間は矢張此世に存在して居る、前よりも一層深く負債に浸つて居る。そして、矢張宴會を開いて居るのだ。お客は又、毎例のやうに、これが最後の宴會だらうと考へて、再び主人は明日の朝監獄で

會はれるだらうと信じて居る。

クロブヨフの町の家と云ふのは、又一奇觀を呈して居た。或日坊さんが法衣を着て、祈禱の儀式を行ひに遣つて來るかと思ふと、翌日は佛蘭西の俳優どもが其處で臺詞の練習を遣らうと云ふのだ。又或日何處を捜しても麪包の欠片一つないかと思ふと、次の日には俳優や畫家の贅澤な接待が有つて、各自立派な贈物を貰つて歸る。時としては又、他の者がクロブヨフの地位に在つたら頸を絞るか、短銃で自殺するだらうと思はれるやうな、極めて切迫した期間が続くこともある。が、彼は心の宗教的轉化に依つて左様云ふ状態から救はれて居た。彼に在つては極めて變挺な形に於て宗教心が遊蕩生活と入れ混つて居るのである。

左様云ふ苦しい困難な場合に、彼は何んな不幸にも超越するやうな心の訓練を経て來た聖者や苦行者の傳を讀んだものだ。左様云ふ時、彼の心は極めて優しく成つた。彼の魂は優しく成つて、彼の眼は涙に充された。彼は祈禱を上げた。で、不思議なこ



とに想ひも懸けない救助の手が始終何處からか遣つて來た。舊友の一人が彼のことを想ひ出して金子を送つて來るとか、でなければ、通り掛りの知らない貴婦人が偶然彼の話を知り、女性に特有な衝動的慈愛心から、彼に立派な贈物をするとか、又は彼が聞いたこともないやうな方面で、彼のために何等かの補助の道を講じて呉れるとかするのだ。左様云ふ時、彼は敬虔な心から天の無限の恵みを認めた、感謝の念から捧げられた祈禱の儀式を行つた。そして、再び新に遊蕩の生活を始めた。

『あの人は氣の毒なものです、實際氣の毒です』と、二人がクロブヨフの許を辭して馬車で駆け去つた時、ブラトノフはチ、コフに向つて言つた。

『あれは遊蕩兒ですよ』と、チ、コフは答へた。『彼様云ふ人間は決して同情に値しませんね。』

で、二人は間もなく彼のことを考へるのを止めて仕舞つた——ブラトノフは有らゆる事柄や人間の上に退屈な、睡たいやうな眼で眺める癖が附いて居たからである。彼

の心は苦しんで居るものを見ると共に苦しんだ。が、彼の魂の上に殘された印象は決して深いものではない。加之、彼は數分間經過した後、自分のことも全然考へないやうに、最早クロブヨフのことも考へて居なかつたのだ。チ、コフは彼の有らゆる思想が今度の買物のために眞面目に斷斷されて居たから、クロブヨフのことを考へる處ではなかつた。で、出来るだけ考へて見ても、又所好なだけ彼方此方引繰り返して見ても、何れにしても此買物は有利なものだと云ふことを認めた。彼はそれを抵當に入れることも出来るのだ。只死んだ農奴や遁げた奴ばかりを抵當に入れるやうな工夫も出来る。先づ好い所の土地を盡く刻んで賣つて置いてから、其後で矢張此所領を抵當に入れるやうな工夫も有る。又コスタントッオーグロを隣人並びに恩人として、其助言に依つて自ら利しながら、自分で此土地を耕作して、後者の手本に倣つて地主に成るやうな工夫をしても構はない。加之、彼は斯う云ふ風にして此所領を私人に賣り付けるやうな遣り方もある——勿論、それは自分で其所領の世話をするのが可厭に成つた場合



に限るのであるが——畢竟自分には死んだり遁げたりした農奴ばかりを残して置くやうな工合にするのだ。其時又利益を獲る他の案が自ら彼の心に泛んだ。彼は全然此地方を見捨て、仕舞つて、コスタントオーグロから借りた金子を返さずに置くことも出来る眞個不思議な考へだ！ チ、コフがそんな考へを抱いて居たと云ふ譯ではない、不意にそれが彼を嘲り、笑ひ、陶しながら、自然と彼の心に泛んで來たのだ。恥知らずの思想の阿魔奴！ 眞個仕様の無い奴だ！

我々の主人公は満足して居た——今や空想ではない、事實に於ける地主に、土地と附屬品と百姓とを有する地主に成ることが出來たのだ。其百姓も決して虚構のものでもないければ、想像の産物でもない、實際生きた人間である。で、だん／＼彼は前後にぐらついて、手を擦つたり、一人で點頭いたり、終ひには喇叭でも持つて居るやうに拳骨を唇へ當てがひながら、或行進曲を吹き出した。彼は又大きな聲で何か嗾でも懸けるやうな、「おい、こらブルドック」とか、「むく／＼肥つた雑ツ子奴」とか云ふ綽

名を自分自身に對して言ひ懸けるやうな、二三の言葉を發した。が、自分は一人居るのでないと云ふ事實を想ひ起して、急に口を噛みながら、如何かして時成らぬ満悦の爆發を押し止めようと骨折つた。で、プラトノフが我々の主人公のそんな物音を何か自分と言ひ懸けられたものと聞き誤つて、彼の方へ向きながら、「何ですか」と訊き返した時、彼は只「いえ、何でも有りませんよ」と答へた。

「駐れ！」と、最後にプラトノフが馭者に向つて嗷鳴つた。

チ、コフは四邊を見廻しながら、自分達がずつと前から莊麗な森の中を駈けて居たのに氣が附いた。樺の樹や白楊の樹が雪の降つた柵のやうに白く輝きながら、新に延びた木の葉の柔らかな緑色を背景にして、軽く嬌やかな姿で立ち並んで居た。鶯は互に競つて高声に囀つて居た。鬱金香は草の中に黄ろく光つて居た。我々の主人公は只今裸の田野の中に居たので、如何して斯んな美しい場所へ來て居るのか自分でも譯が解らないやうな氣がした。樹々の間から白い石造の教會が覗いて居た。又街道の端



には、一人の紳士が現れて、此方（こち）を向いて進んで来た。尖頂（せんちやう）の有る鞞皮（なめしが）の帽子（ぼうし）を被つて、手には乾いた長い杖（つえ）を持つて居た。細長い脚（あし）をした英吉利種（イギリス種）の獵犬（れいけん）が一疋（びっし）彼の前に立つて駈（か）けて来る。

「おゝ！ 阿兄（にい）さんが遣つて来た」と、ブラトノフは言つた。「駐（とま）れ、こら！」と言つて、彼は馬車（ばしや）から降りた。チ、コフも同じ様（やう）に降りた。犬（いぬ）どもは早くも互（たがひ）に身體（からだ）中（ちゆう）舐（な）り合つて居た。活潑（くわつぱつ）で、脚（あし）の長いアゾールはヤルブの鼻面（はなづら）を舐めた、それからブラトノフの手を舐めた、それからチ、コフの肩（かた）へ脚（あし）を掛けて、其耳（そのみみ）を舐めた。

兄弟（きやうだい）は互（たがひ）に相抱（あひほう）擁（よう）した。

「おゝ！ ブラトンやお前はまア私（わたし）を如何（どう）云（い）ふ目に遣（あ）はせて呉（く）れたんだい？」と、自宅（うち）の兄（あに）が言つた。兄（あに）の名（な）はヴシリイと云つた。

「如何（どう）したと言（い）ふんです？」と、ブラトンは何氣（なにげ）なく答（こた）へた。

「如何（どう）したにも、實際（じつさい）！ お前は三日（か）と云（い）ふもの音沙汰（おとさた）なかつたぢやないか。ビエ

ブックの馬丁（べつたう）がお前（まへ）の馬（うま）を自宅（うち）へ連れて来た。「旦那（だんな）は他所（だんな）と何處（どこ）かへ被往（いらつ）しやいましたよ」と、其奴（そいつ）が言（い）ふんだ。お前（まへ）も又（また）一言（ひとこと）位（ぐらゐ）何處（どこ）へ、何爲（なに）に、何（ど）の位（ぐらゐ）の間行（あひだ）つて來ると云（い）ふこと位（ぐらゐ）知らせて呉（く）れたら如何（どう）だい！ それが音沙汰（おとさた）なしだらう！ ねえおい、お前は如何（どう）して斯（こ）んな眞似（まね）をするんだい？ 此三日（か）の間（あひだ）私（わたし）が何（ど）んな事（こと）を想像（さうぞう）して居（か）たか、眞個（まっこう）遣（や）り切（き）れないね！」

「えゝ、ですが何（ど）うも仕方（しかた）が有（あ）りませぬね。私（わたし）は忘れて仕舞（しま）つたのですよ」と、ブラトンは答（こた）へた。「私（わたし）達はコンスタンチン・フォードロフの許（ところ）へ参（まゐ）りましたね。あの人は貴方（あなた）に宜（よろ）しくと云（い）ふことでした、姉（あね）さんも亦（また）貴方（あなた）に言傳（ことづて）をして居（か）ましたよ。バヴェル・イワノフ・ギッチさん、貴方（あなた）に紹介（せうかい）させて下さい、これは私の兄（あに）のヴシリイですよ。阿兄（にい）さん、これはバヴェル・イワノフ・ギッチ・チ、コフ君（くん）ですよ。二人（ふたり）は斯（こ）くの如（ごと）く互（たがひ）に紹介（せうかい）されて、握手（あくしゆ）を交（か）した。そして、二人（ふたり）とも帽子（ぼうし）を脱（と）つた。

「チ、コフと云（い）ふのは如何（どう）云（い）ふ男（おとこ）だらう？」と、兄（あに）のヴシリイは考（かん）へて居（か）た。「弟（あとうと）の



プラトンは餘り友達を撰ぶ方ぢやないからね。」彼は作法の許す範圍に於て、ちろくくとチ、コフを見遣つた。そして、我々の主人公が何處から見てもちやんとした風采の人間であることを認めた。

チ、コフも亦作法の許す範圍に於て、ちろくくと兄のワシリイを眺め遣つた。そして、後者がプラトンよりも少し身丈が低い、髪の毛は一層黒い、又顔も餘り美しい方だとは言へないが、其顔立には一層多くの生命と活動と、一層心から出た親切が籠つて居ることを認めた。兄の方が弟よりも夢みる癖の少ないことは明白であつた。が、それに對してバヴェル・イワノギッチは少しも注意を拂はなかつた。

「ワシヤ、私は此のバヴェル・イワノギッチさんと一緒に露西亞帝國を旅行して廻らうと決心しましたよ。多分私のヒポコン德里ヤもそれで癒るでせうからね。」

「如何してそんなに早く決心したもんだね？」と、兄のワシリイは少々退避ぎながら言つた。そして、彼の傍へ近寄りながら附け加へた。「で、お前が初めて會つたやう

な、何んな悪い奴かも知れない、何處の馬の骨か判らない男と一緒に出立するのかい」と、さも迂論相に、彼はちろりとチ、コフを眺め遣つた。そして、再び相手のちやんとした風采に眼を留めた。

一同右手の門を這入つて行つた。庭は舊式に出来て居た。家も亦近頃餘り見懸けないやうな、高い屋根の下に庇の有る、極めて舊式なものであつた。二本の大きな菩提樹が庭の真中に突立つて、殆ど其半分を蔭の中に蔽うて居た。其中に五六脚の木の下が並べてあつた。紫丁香花や野生の櫻の樹が家を周つて、四方の壁をすつかり花や葉で包みながら、今を盛りと咲き誇つて居た。地主の館は差交す枝の下や間から戸口や窓が覗いて居るばかりで、殆ど花の中に隠されて居た。箭の様に真直な森の樹々を透して厨房や、貯藏倉や、窖が見えて居た。

加之、鶯が樂しげに囀つて、森中が大きな聲でそれを反響して居るのが聞かれた。平和と快樂の情が、魂の中へ沁み込んで來た。有らゆる物に、人間が親睦に暮して、



總てが單純で素朴で有つた平和な時代の面影が残つて居た。兄のヴシリイはチ、コフを招いて、其處に掛けさせた。一同菩提樹の下の倚架に腰を卸した。

十七位の朱鷺色の木綿の美しい上衣を着た少年が、さまざまな果實から取つたヴス酒を詰めた幾つかの罎を持つて來た。さまざまの色をして、牛酪の様に濃いのも有れば炭酸を加へた檸檬水の様に泡立つのも有る。そして、それを旦那方の前に置いた。酒罎を卓子の上に載せた後で、少年は一本の木に凭せ掛けて置いた罎を取上げながら、野菜畑の方へ行つて仕舞つた。ブラトノフ兄弟の下男どもは、義兄のコスタツォーグロの家のそのやうに、皆作男であつた。最つと精密に言へば、家に使はれて居る下男どもが皆野菜畑へ出て鋤を取つたものである。

兄のヴシリイは、下男どもと雖も一種特別の階級ではないと主張した。で、若し必要なら、下男なぞ全然なくとも済むものだ。何んな人間でも物を運ぶ位のことには出来る、一種の人間に命じてそれを爲せる必要は少しもないと言ひ張つた。又露西亞人と

云ふものは立派な、敏捷な人間である、職衣や百姓の上衣を着て廻る限りに於て、決して懶惰者ではない。が、其男が外國風の上衣を着出すや否や、忽ちだらしないや、いざな懶惰漢に成つて仕舞ふ。最早襯衣も取替へない、全然沐浴なぞしなく成る。上衣を着たまゝ眠つて、其下に外國の虱の巢を簇せたり、又は無数の他の昆蟲を養成するに到ると云ふのだ。此點に於て、彼の言ふ處は正しいかも知れない。ブラトノフの村では、百姓どもは特に優美な風俗をして居た。女の頭飾りには金が被せてあるし、上衣の袖には土耳其製の肩掛のやうな縁が取つてあつた。

「何か飲料を召上りませんか」と、兄のヴシリイはチ、コフに向つて、酒の罎を指差しながら言つた。「此處にいろんな種類のヴス酒が有りますが、こりやア昔から私の家の自慢の酒ですよ。」

チ、コフは最初の罎から一杯注いだ。それは昔彼が波蘭土で飲んだことのあるやうな一種の蜜糖水であつた。三鞭のやうにきら／＼光つて、其中には口から鼻へ飛び出



す程澤山の瓦斯が含まれて居た。「甘露！」と、彼は言つた。それから又彼は第二の罈から一杯注いで飲んだ。其中の酒は前の物よりも一層旨味かつた。

「こりやア旨味い酒ですね、眞個旨味い物ですよ」と、チ、コフは言つた。「敢て言ひますが、私は一番美味しい果實の葡萄酒を御義兄のコンスタンチン・フォードロネフチさんのお宅で飲みました。又一番美味しいヴス酒は貴方のお宅で頂いたと言つても可いのですよ。」

「ですが、私の許には果實の葡萄酒も御座いますよ。姉がそれを造りましてね。時に貴方は何方の方角へ御旅行なさらうと云ふ思召なんですか」と、兄のヴシリイが訊いた。

「私は自分のためと言ふよりも」と、チ、コフは倚架に凭れて軽く身體を揺振りながら膝を撫で、返辭をした。「他人の用事で歩いて居るので御座いますね。ペトリシユチエフ將軍は私の極親密な友人で、私の恩人と言つても可い位で御座いますが、此人

から娘の結婚を親類中へ知らせて呉れと頼まれたのですよ。それが一つの理由です。が、私は又謂はゞ自分のためにも旅行して居るので御座いますね。何故と申しますに、健康に適して居ることは改めて言はない迄も、旅行と云ふものはそれ自身に於て一種の書物ですよ。いろんな種類の人間や世間を見て歩くのは、謂はゞ第二の教育で御座いますからね。」

兄のヴシリイは一寸考へに沈んだ。「此男は餘り修辭的に物を言ふやうだ。而も此男の言ふことには一種の眞理が有る」と、彼は考へた。少時黙つて居た後で、彼はブラトンの方へ振向いた。「ブラトンや、成程旅行はお前を活潑にして呉れるだらうと私も考へ出したよ。お前は精神的昏睡の外に、別に何でもないのでからね。お前は只睡眠に落ちたのだ。然もそれが喰ひ過ぎたからでも疲れたからでもない、只活潑な印象と感覺とが缺けて居るからなんだよ。私は全然其反對の状態で居る。私は如何かして物事を斯う鋭敏に感じなければ可い、何事に據らず日々にかかることを是程深く氣に病ま



なければ可いと思つて居るんだよ。』

『貴方は物事を氣に病むことが所好なやうに見えますよ』と、ブラトンが答へた。

『貴方はわざ／＼不安を捜し出して、自分で面倒を作つて居るんだからね。』

『一步毎に何か知らず愉快なことが待つて居るんだもの、私だつてわざ／＼そんな物を作るものかい』と、ワシリイが言つた。『お前の留守の間に、あのリエニチンが我々に對して演じた奸計を聞いたかい。あの男は我々が赤い岡の祭典を擧げることにして居る野原の一部を差押へたよ。第一に、私は幾許か金子を呉れてもあの土地を手離さうとは思はない。私の百姓どもは彼處で毎春毎にクラスナヤ・ゴルカの祭を祝つて來たんだからね。此村の有らゆる記念はあの土地と結び着いて居る。私の眼から見れば、習俗は神聖なものである。私はあの土地のためには何んな犠牲でも拂はうと覺悟してゐるんだよ。』(註曰、復活祭の後の最初の週から、クラスナヤ・ゴルカ、即ち『赤い若しくは小さな輝いた丘』の祭が始まる。此言葉は復活祭の卵の赤い色と、春の輝く

光明とに關聯したもので、『小さな丘』と云ふ名稱は、此祭が本來何處かの高い場所で行はれたから與へられたものだ。祭は復活祭の次の日曜日から六月の末迄続く。其主なる特長はコロヅオツド、即ち合唱隊の歌に伴れた圓周狀の舞踏である。それ等の場合に於ける歌手の長は手に圓い麴包の塊と赤い卵とを持つた一人の女で、二つながら太陽の象徴だと云ふことである。顔と手とを東方に向けながら、其女は合唱の歌を唄ひ出す、それから合唱隊がそれに續くのである。で、多くの場所に於ては、これに伴れて、若しくは續いて、死若しくは冬を象つた土偶が壞される。歌の多くは愛の神や、其季節を支配する守神に物を言ひ懸けたものか、でなければ、少くともそれ等の神の影響に關聯したものである。又或場所に於ては、それを新に結婚した夫婦の窓の下で唄ふ習慣がある。)

『あの男はそれを知らないのでせう、それだから、あの土地を差押へたんぢやありませんかい』と、ブラトンが言つた。『あの男は新來者で、近頃彼得斯堡から遣つて來



たばかりですよ。萬事好く説明して、あの男に解るやうにして遣らなけりや不可ませぬね。」

「あの男は知つてるんだよ。何も彼も十分に知つてるんだよ。私はあの男に使者を遣つた。それなのに、あの男は無禮な返辭をして寄越したよ。」

「貴方は自分であの男の許へ被往して、萬事を説明したら可いでせう。まあ好く御自分であの男と談合して御覽なさい。」

「いや、眞個！ あの男は餘りに尊大な態度を取つて居るんだよ。私はあんな奴の傍へ近寄らない。お前所好なら、自分で行くが可い。」

「私は自分が萬事の經營に丸切關係して居ないと云ふ事實が有るんでなければ行く積りですよ。私ぢやあの男に好い様に胡魔化されるでせうからね。」

「貴方方さへ宜しければ、私が参りませうか」と、チ、コフが言つた。

ヴシリイはちろりと我々の主人公を見返りながら、心に考へた。「此男は餘程旅行が

所好に違ひない」と。

「只其のリエニチンと云ふ男は何んな人物だかお話し下さい」と、チ、コフは續けて言つた。「それから事件の大體を。」

「そんな不愉快な役目を貴方に脊負はせては濟みませんよ。私を見る所ぢや、其男はやくざな野郎ですね。此處の小ッぼけな地主の一人ですがね、一時彼得斯堡で役人を勤めたことも有る、其處で或大官の私生兒と結婚して、何か偉い者にでも成つたやうな氣に成つて、大風に構へて威張り散すんですね。ですが、我々のやうな地方の間も全然馬鹿ばかりぢや有りませんよ。新しい流行が我々に取つて敕令でもなければ、彼得斯堡が教會でもありませんからね。」

「眞個」と、チ、コフは言つた。「で、事件の要點は如何云ふんですか。」

「其奴が或土地を要求するんですよ、ねえ貴方。で、何か他の計策を立て、來たんなら、私も素手でばつ歸しはしませんよ。ですが、あの野原だけは不可ない。處が、



其奴は喧嘩好きな野郎でしてね、私共其奴を怖がつてでも居ると思つて居るんですよ。」

「私の考へちや、一度好く其事件を談合して頂いた方が好からうと思ひますね。恐らく貴方は私に其事件をお委せに成つても、それを御後悔に成るやうなことは有りません。ベトリシユチェフ將軍も亦——」

「だが、私は貴方にそんな人間と談判させては、何だか濟まないやうな気がするんですよ。」(註曰、以下\*點迄作者の原文を缺き、後人の挿入に係る。)

「そんな事は決してお氣遣ひ下さいますな。明日の朝私は其男を訪ねて参りますよ。で、何も彼も貴方の御満足の行くやうに決定されるでせう。私はそれだけの確信があるんですよ。」

次の日チ、コフは隣人が訪ねて来たやうな風でリエニチンを訪問した。そして、自分が今度クロブヨフの所領を買つたことを告げた。リエニチンとクロブヨフとは親戚の間柄であつた。我々の主人公は直に又自分が偶然にも、例の三百萬留布も持つて居

る伯母の側に居たさに、此町の知事の地位を手に入れようと覗つて居る男の住家へ遣つて来たことを推察した。此男は始終其伯母に取る術を心得て居た。此男の言ふ處に據れば、自分は最つと高い地位を申出されたこともある。が、子供の時分からあんなに可愛がられた大切な伯母さんの側に居たさに、それを辭退したと云ふのだ。

「そりやア立派なお心懸けですよ」と、バヴェル・イワノギッチが言つた。

我々の主人公は甚くリエニチンを満足させた。此男は又我々の主人公が非常に聰明な顔附をして居ると考へた。加之、チ、コフは二人が其處で話をした人々に關して、恐らくクロブヨフ一人を除く外は、極めて恭謙で寛大な態度を示した。彼は又此地方並びに隣接せる地方の幾多の貴族連を知つて居た。そして、彼は熟練した事務家であると共に、社會に立つても多方面の縁邊を有する、富有な紳士として自分を見せ懸けた。最後に彼はリエニチンに向つて言ひ出した。

「何時かアレキサンドラ・イツノフナ・カナサログの遺産を、少なくとも其の大部



分を受嗣がれるのは、是非とも貴方でせうね。」

『そんな事はない、そりやア大間違ひですよ』と、リエニチンは答へた。『私が聞いたのちや、あの女は遺産の大部分を尼寺へ寄附すると云ふ遺書を作つた相ですよ。』

『そりやア詰らない話ですね！ 尼寺はそんな事爲すとも元から金持ですよ。ですが、何故最一つ新に書置を作るやうに其方に勧めないのです？ 私はそんな風にして貴方が遺産を奪はれるのを静乎として見ては居られませんね。私は或期間其町に滞留して、其のアレキサンドラ・イワノフナと仰有る方にも紹介される積りです。で、若し貴方さへ好けりや——貴方のためにですよ——私は尼寺などは最う十分に金持だと云ふことを其伯母さんに吹込んで見ようと思ひますよ。何故貴方も亦自分で新しい遺書を作らないのです？ 旨く形式に合せて、伯母さんが只署名すれば可いやうにして置くんですよ。』

『あゝ』と、リエニチンは言つた。『逆もあの人が署名するやうなことはなからうと

思ひますからね。』

『そりやア老人は頑固なものです、私も知つてますがね』と、我々の主人公は直様引取つた。『だが、構はないぢやありませんか、あの女も何うせ死んで行くんだとすりや、何故其財産を貴方に遺して置くやうにさせては不可ないのです？ それに只名前を書くだけぢやありませんか。私の考へではね、其方がそんなに頑固だしたら、如何して、私が誰か其方に代つて署名するやうに爲せようぢやありませんか。』

『静かに！ 静かに！ 少時！』

斯う言つて、風がさつと吹いて來でもしたやうに、又リエニチンがそんな一吹の風を恐れでもするやうに、彼は立上つて窓の日蔽を卸して、帷幄を引張り出した。そして、次の室々をすつと見渡した。それから又再び扉を閉めて、錠を卸すやうにした。それが決して間違ひではないのだ。其後、彼とチ、コフとは暫時の間親密な會話に耽つた。それが我々の所へは一語も聞えないやうな低い聲で續いて行く。到頭リエニチ



ンは帷幄を後ろへ引いて、扉の錠を外した。それから再び長椅子の上に腰掛けて、我々の主人公に手を差出した。我々の主人公は又熱心にそれを握つたものだ。\*

チ、コウが言つた。「これだけは一つ是非とも秘密にしなさいや不可ませんよ。後で飛んだ事に成る基はと云へば、罪惡それ自身よりも、世間の煩さい噂のする場合が多いのですからね。」

「そりやア其通りです、其通りです」と、リエニチンは頭をすつかり一方へ垂れながら繰返した。

「斯んなに意見が合致すると云ふのは、眞個愉快なものですわね」と、チ、コフは叫んだ。「私は目下合法でもあれば、同時に違法でもある或事件に關係して居るんですよ。一寸見れば違法のやうですがね、ちやんと法律には適つて居る。私は抵當に入れようとして動産を聚めて居るのですが、生きた農奴の二頭に對して二留布以上拂ふ氣には成れない。こりや私はかりぢやない、誰だつて左様だらうと思ひますよ。何しろ人頭

税が高いから、そんな事があつては成らぬが、大抵の地主は息吐いて仕舞ひますからね。其處で、私は只死んだり遁げたりしたさま々な農奴を手に入れようと想ひ着いたのですよ。勿論未だ戸籍簿から削除されないものでなけりや困りますかね。畢竟、それも私自ら利すると同時に、それ等の農奴に對して税金を拂ふ必要を不幸な地主どもから除いて遣ふことに依つて、基督教徒的慈善行爲を實行するためなんですわね。ですから、私どもは只其間に問題の農奴が本當に生きて居るやうな體裁で、形式上の證文を取交しさへすれば可いのですよ。」

「だが、矢張そりやア随分不思議な遣り方だ」と、リエニチンは考へた。そして、椅子を少許背後へ退いた。「左様、其取引は一種の何ですわね——」と、彼は大きな聲で言ひ出した。が、其後を續けるだけの勇氣が何うしても出なかつた。

「別に危険な事はありませんよ、堅く秘密にして置くんですからね」と、チ、コフは答へた。「如之、地位有り名望有る人々の間に——」



「併し何です、これを要するに——」

「極めて明白な取引ですよ、此事に關して一つも詭計なぞと云ふものは有りませんからね」と、チ、コフは極めて腹藏のない、率直な態度で言つた。「取引の性質が何んなものであるかと云ふことは、今申上げた通りです。何しろ分別も有れば、可成物の了解も有る年輩に達した、地位有り名望有る人々の間に行はれることなんですからね。左様云ふ人々の間に祕密に行はれるんですよ。」斯う言ひながら、彼は相手の眼を腹藏のない、明らかな表情で眺め遣つた。

リエニチンも伶俐でも有れば、有らゆる取引上の方法にも慣れて居るものゝ、此場合に於いてはすつかり面喰つて度を失つて仕舞つた。殊に或著しい手段に依つて、彼自ら自分の投げた網の中へ自分を絡ませるやうに計つた後だから左様である。

「こりやア何うも非常な事件だ！」と、彼は心の中で考へた。「まア人間の中でも優れた人間と、後で後悔しないやうに親密な間柄に成ることが出来たら遣つて見るが可

い！ 誰に取つても困難な問題が其處には有るよ。」

が、運命と事情とが格別な手段に依つてチ、コフを幸ひするやうに見えた。恰度、此の困難な問題に當つて助力を與へようとしても計つたやうに、其瞬間リエニチンの妻なる此家の若い女主人が室の中へ這入つて來た。彼女は瘦せて顔色の蒼醒めた、身丈の低い、が、衣装だけは彼得斯堡の流行を追うて居ようと云ふ女で、ちやんとした風采を具へた男が極端に所好であつた。彼女の背後から乳母が新に結婚した夫婦の愛の保證たる最初の幼孩を兩腕に抱へながら這入つて來た。チ、コフは例の小さな跳躍や、輕快な歩き方や、頭を一方へ傾ける癖などに依つて、すつかり此彼得斯堡生れの貴婦人の心を魅して仕舞つた。彼は又赤ン坊をさへ捕虜にした。

最初赤ン坊はひい／＼叫喚いたものだ。が、チ、コフは「おう、おう、好い兒や、好い兒や！」と、言ひながら、指で撥ることに依つて、又時計に着いて居る美しい肉紅玉髓瑪瑙の印形の力で、到頭赤ン坊を賺して自分の手へ抱き取つた。それから彼は



天井迄赤ン坊を差上げながら、きい／＼嬉しさうな笑ひ聲を立てさせた。これが又大層兩親を喜ばせたものだ。が、相互の満足からか、それとも他の原因からか知らないが、赤ン坊は不意に疎相をした。

『まア如何しませう』と、リエニチンの細君は聲を揚げた。『此兒はすつかり貴方の上衣を汚しましたよ。』

チ、コフは振返つた。未だ眞新しい上衣の袖がすつかり酷いことに成つて居た。『此餓鬼奴、射ち殺して遣つても飽き足りない！』と、彼は憤怒の餘り心の中で呟いた。

主人も、女主人も、乳母も皆香水を取りに駆けて行つた。そして、有らゆる方向に上衣を摩擦り出した。

『何でも有りませんよ、何でも、別に何とも成りは致しませんよ』と、チ、コフは出来るだけ顔に愉快らしい表情を帯びさせようと努めながら言つた。『斯んな可愛らしい、一生の黄金時代にある赤さんが、何んな物だつて汚すことなぞ出来ませうか。何

んな事を爲すつても反つて先方で喜んで居ますよ』と、彼は繰返した。同時に心の中では一人呟いて居た。『此餓鬼奴！ 手前のやうな奴は狼にでも喰はせて遣りたいや。あんな物が最う俺に着られるかい、本當に忌々しい奴だな！』

此の一見些末な事情が主人をしてチ、コフの取引に非常な好感を抱かせるやうに成つた。自分の赤ン坊をあれ程可愛がつて賺して呉れた客に、又着て居る上衣を臺なしにされながら、それでも可厭な顔もせず此方に敬意を拂つて居る客に、何んな物だつて無下に拒絶することが出来ようか！

『では、最一つ貴方のお言葉に甘えることを許して頂きたいものですね』と、我々の主人公は言つた。『私は貴方とブラトノフ兄弟との間に起つた事件に關して仲人に立ちたいのですよ。貴方は或土地を要求して被坐しやいませう？』

それからチ、コフはリエニチンが己の所有とした一片の土地に關して、長い辯明を試みた。そして、他の土地と交換して、それをブラトノフ兄弟に返して遣るやうに相



手を説き伏せた。此事件が一落千丈でから、チ、コフはリエニチンに別れを告げて、其報告をワシリイに齎した。加之、例の辯舌を振つて、彼は後者をも自分に對して死んだ農奴を賣るやうに説き着けた。それからプラトノフが病氣に罹つて、約の如く旅程に登ることが出来ない處から、我々の主人公は一人で出發した。其間に友人のテンチョートニコフが、曩にベトリシユチエフ將軍の許に残して置いた彼の四輪馬車を送つて呉れたのである。

州の町へ着いてから、彼はクロブヨフの所領を購買した件に就いて、さまざまの整理を果した。が、殘金一萬五千留布を正貨で支拂ふ代りに彼は自分が大した財産を有つて居ることを暗示するやうな、さまざまの證文をひけらかして見せた。自分も此證文を正貨に換へる積りだと、彼は言つた。それに就いては四箇月後支拂の書附を受取つて呉れとクロブヨフに申出した。クロブヨフも最初は此申出に異議を唱へて、自分は如何しても正貨が要るのだと言ひ張つた。が、此賣渡證書の證人として召喚され

た有らゆる人々並びに役人ども迄がバツエル・イワノギツチの味方をしたので、クロブヨフもこれでは自分の方が不道理に思はれやしまいかと心配した。で、最後に、彼は約束手形を受取つて、全部支拂を受けたと同じ様に、賣渡の證書に署名した。

同時にチ、コフはリエニチンの手を通じて、金持の伯母さんなるアレキサンドラ・イワノフナに紹介された。そして、彼はだん／＼伯母さんの氣に適るやうに持懸けて、到頭伯母さんの方でも彼に相談をしなければ何一つ出来ないやうにして仕舞つた。が、彼も未だ伯母さんを説得して新に遺書を作らせる迄には到らなかつた。加之、クロブヨフの方でも金子を受取らなければ、チ、コフの方でも例の約束手形に應ずる目的で金子を拵へるやうな意志は少しも示さない間に、三箇月の期日は過ぎて仕舞つた。其時不意に又バツエル・イワノギツチは其所領を賣拂ふ下相談をして居ると云ふやうな噂が傳はつた。で、人々は彼が何んな事を演り出すかと少からず奇異の感に打たれた。又或旅人が此町へ立寄つて、或日警務長と食事をした時、會話の序に斯んな事を相手



に告げた。あの有名なチ、コフが此町へ来て居ると云ふ話です。勿論貴方はあの男が有らゆる地主から死んだ農奴を買ひ込むために、露西亞中を旅行して居るんだと云ふことは御存じでせうね——え、誰でも容易く推察の着く目的で遣つて居るんですよ。』此言葉は有らゆる方面に繰返されて、最後に軍事知事の耳へも這入つた。恰度其時分に後者は又例の金持のアレキサンドラ・イワノフナが死んで、彼女が貴重な物品若しくは遺書を藏つて置いたと思はれる家の中の有らゆる家具家財に封印が施されたと云ふやうな話を聞き込んだ。人々は此老夫人の逝去が其事有つて後四十八時間にして漸く報道されたと云ふやうなことを言ひ合つた。加之、何んな風にして彼女が死んだと云ふことは最期の際迄彼女の傍に隨つて居て、自分自身の召使でもあるやうに、其家の下女下男を指揮した我々の主人公一人知つて居るばかりだと云ふやうなことも由ありげに密々話合された。

金持が死んだ場合には、好くそんなやうな噂が出るものである。が、軍事知事は其中に罪悪が行はれて居ようとは信じないまでも、自分の耳に這入つた噂はチ、コフを自分の前に召喚する権利を自分に與ふるものと思惟した。彼は少くともチ、コフを隠謀位遣り兼ねない男だと疑つて居た。で、相手を試して見ようと思つて、本當に露西亞人らしい遣り方で、四十八時間以内に此町を退去せよと命令した。チ、コフは最つと悪いことに成りはせぬかと心配して居たので、直に心の重荷を除かれたやうに感じた。彼はいろ／＼辯解した。有らゆる事が、そんな怖ろしい噂ですら、却て彼の都合を好くするかと思はれた程、旨い工合に辯解した。彼は憤ましげに、左様云ふ俄の出発は彼自身の事業を混乱に陥らせるばかりでなく、彼が取引上の關係を有する地位名望有る人々に取つても極めて有害なものに成るで有らうと云ふ事實に、閣下の注意を喚んだ。到頭、彼は自分が適當に振舞ひさへすれば、即ち此上人の誹謗や陰言を招くやうな振舞さへなければ、所好なだけ此町に逗留しても差支へないと云ふ權利を與へられた。



「公爵！」と、我々の主人公は即座に言ひ返した。「私は斯う云ふ話を聞きました、又それが眞理だとも考へます。即ち斯う云ふんですね、或小さな町の饒舌家どもの舌の根を止めるよりは、ドニーベルカヴォルガの河水を堰止める方が餘程容易いと。」

彼はそれから前よりも一層多くの自信を有つて此謁見の席から退出した。で、彼は數時間の間彼が嚴しい罪に問はれたものと信じて居た誹謗者の仲間に対して輕悔の念を隠さうとしなかつた。

其後間もなくクロプヨフは自分の所領に對して受くべき殘金一萬五千留布を正確に受取つた。で、彼が金持の伯母さんの華やかな葬式に際してチ、コフと並んで歩いて居る姿も人の眼を惹いた。此葬式萬端はリエニチンの手で支辨された。或日死人の家から封印が除かれた時、一通の遺書が発見された。そして、利害關係を有つて居る各當事者はそれが讀上げを聞くために、官憲の手で召集された。リエニチンは事務所の煩累のために阻まれて、晩く迄出て來なかつた。そして、遺書の朗讀が終つた時、冷

やかな威嚴を備へながら、居合はせた人々の祝辭を受けた。彼は主なる遺産相續人に任命された。續いてさまざまに小さい遺産がクロプヨフや、二人の伽の女や、貧乏な従妹の夫婦や、近隣の會堂へ殘された。貧乏な親類どもは五乃至六の金庫や、寶石の函や、六十個ばかりの金や銀の皿が紛失したと云ふ事實を擧げて、リエニチンの注意を促した。が、リエニチンはそれを聞いても、只微笑して肩を聳かすばかりで、何も言はなかつた。彼は疑ひもなく紛失した品々が何處へ行つたかと云ふことを十分に心得て居たのである。



## 第十六章 二通の遺書、市場、辯護士、並びに聖者

此世の如何なる物も皆それ自身の用を有つて居る。「物を欲しいと思ふ者は、誰でもそれを得ようとして努力する」と、諺にも有る、お婆さんのさまざまの靴を通じての遠征は旨く成就した。其結果として、幾多の品物がチ、コフの化粧函の中へ移つて行つた。一言にして云へば、賢くも計畫されたものである。チ、コフは決して泥棒の罪を犯したと云ふ譯ではない、只其場の事情を利用したのだ。我々は皆あの手段か、此手段かに於て、時々利用する——或者は帝室附屬の森を、或者は又他人の貯金を、或男は女の旅役者のために自分の子供達から物を盗むことも有らう、又或男は家具若しくは馬車を買ふために百姓どもから物を盗むことも有らう。此世に斯んなに澤山の誘惑が存在して居るからには、人間がそれを如何することが出来よう——狂人のやうな値段を取る高い料理屋だの、假面舞踏だの、チブシイの女と共にする馬車の遠乗だ

の、舞踏だのと。確かに人間が始終自己を制御して行くことは出来ない、人間は神でないからである。斯くの如くにしてチ、コフは、有らゆる安逸を望んで居る大多数の人間と同じ様に、彼自身のために事件を利用した迄だ。

チ、コフは今や此町を去るべきであつた。が、折悪しく道路が悪く成つて居た。同時に又最一つの市が此町で開かれた。極めて貴族的な市である。最初の市は馬だの、牛だの、生の産物だの、さまざまの百姓の製造品だのが多きを占めて、伯樂だの、卸商賣などの手で買はれたものだ。が、今やニチゴロッドの市で買はれた代物が、有らゆる種類の上流の品物が、此處へ持つて来て鬻がれるのだ。露西亞人の財布の侵掠者なる佛蘭西人が香油を持つて來ると、佛蘭西の女は婦人の帽子を持つて來る——コスタンツォーグロの言ふ處に従へば、有らゆる物を喰ひ盡すばかりでは満足しない、其後へ卵を産み附けて土の中へ埋めて行く埃及の蝗蟲のやうな女どもである。收穫の不作が或地主どもを田舎に止めて置いた。が、一方に於て、不作のために少



しも苦しめない役人どもが力づくで家から掃き出された。畢竟、彼等の細君が左様するのだから仕方がない。有らゆる種類の新しい要求を人類に接木する目的で近頃頒布された澤山の書物を読んでからに、彼等は有らゆる種類の新しい享樂に對して法外極まる渴望を感じるやうに成つた。或佛蘭西人は從來此州内では聞いたこともないやうな、新規な設備を開いた——快樂園と云ふので、お好み次第の晚餐を極めて安價に供給する。お負けに値段の半分は信用借で残して置いて差支ないと云ふのだ。これは各局課の長官を勧誘したばかりでなく、有らゆる書記どもをも誘惑して、何れ又請願者の手から賄路が入ることも有らうと云ふのを一つの心頼みに、一度はそれを訪問させるやうにした。互に相手の面前で馬や馬車をひけらかさうと云ふ希望が一般の心裡に湧いた。遊戯衝動からさまざまな階級の非常な競争が行はれた。天氣が悪く、雪や雨が混つて降るにも拘らず、美々しい馬車が彼方へ飛んだり此方へ駆けたりした。彼等が何處から來たと云ふことは、誰も知らない。が、彼得新堡の雜踏にもをさく

負けは取らなかつた。商賣や手代どもは手にく帽子を差上げながら、婦人連を店へ這入らせるやうに誘つた。毛皮の帽子を被つた、鬚のもちやくした商賣などは滅多に見られなかつた。誰も彼も歐羅巴人らしい風采を備へて居た。

チ、コフは錦欄の新しい波斯風の寢間着を着て、だらりと長椅子に凭れながら、猶太人出の、獨逸人らしい語調を有つて居る巡回密輸入商人と買物の談判をして居た。彼の前には極めて美しいカムブレ麻布——彼はこれで襯衣を拵へようと思つて買取つたのである——と、又極めて微妙な芳香を含んで居る極上石鹼のボール箱が二つ並べてあつた。此石鹼は彼が以前ラヂヴィルの税關に職を奉じて居た時使ひ慣れたのと同じ種類のものであつた。實際、これを使ふと吃驚する程頬邊を柔かくし、且白さを添へるだけの素質を有つて居た。鑑識家の資格に於て、彼がこれ等上流社會の人々には缺くべからざる品物を買ひ求めて居た瞬間に、どろろと馬車の近づく音が、此室の壁や窓のそれに應ずる反響と共に聞えて來た。そして、アレキセイイワノ莽



チ・リエニチン閣下が其處へ現れた。

「私は此のカムブレー麻布と、石鹼と、帽子とを閣下の判断に委したい。え、ただ昨日買ったばかりですよ」と、チ・コフは金と眞珠の珠とを縫ひ着けた帽子を頭に載せながら言つた。そして、自分が波斯皇帝にでも成つたやうに尊大な威嚴に充ちて居るやうな氣がした。

が、閣下は我々の主人公の質問には答へないで、當惑したやうな顔附をしながら、「私は貴方に差追つた用事でお話したいことが有るんですがね」と言つた。心配と不安とが彼の顔の上に明々と顯れて居た。獨逸人らしい語調の商賣は卽座に其場を追拂はれた。そして、二人は相對に成つた。

「誠に可厭なことが起つたが、貴方は御存じぢやないのですかい。あの婆さんの遺書が最一つ出て來たんですよ。え、五年前に書いて置いたものだと言ふことです。それに據ると、あの婆さんは財産の半分を或僧院へ、又後の半分を等分して、二人の

伽の女に残して置いたのですね。」

チ・コフも流石にどきりとして後へ退つた。

「ですが、其遺書は——無意味ですよ。そりやア何でも有りませぬね。第二の遺書に據つて効力を失つて居るんですよ。」

「ですが、そんな事は第二の遺書に書き表してないでせう——第一の遺書がそれに據つて無効にせられると云ふやうなことは。」

「そりやア書いてなくとも左様取られるんですよ。最初のものが後のもので無効にされるのは至當ですからね。何にしてもそりやア馬鹿な話だ。第一の遺書は全然無効ですよ。私は亡く成つた方の意志を十分に承知して居ます。私はあの方と一緒に居たのですよ。誰が又他の遺書に署名したのです? 誰が證人に立つて居るんですよ?」

「そりやア法廷で適法に立證されて居るんですよ。證人には非職判事ブルミロフと、カヴノフとが立つて居ます。」



「そりやア不好ないな」と、チ、コフは考へた。「カヴノフは正直な人だと云ふ評判だし。ブルミロフはと云ふと、此奴も祭日には教會で使徒傳を讀んだりして、神信心を装つて居る偽善者だ。だが、構はない！ 構はない！」と、彼は大きな聲で言つた。そして、直様何んな事にも對抗して行くだけの決心を固めた。「私はそれよりも好く知つて居るんです。私は亡く成つたお婆さんの臨終の際に其場に隨つて居たのですからね。其事に就いては、誰よりも私が一番好く知つて居るんですよ。私は何時でも神に誓ひを立てるだけの覺悟を有つて居ます。」

斯う云ふ彼の言葉と決心の容子とは一時リエニチンの心を安んじた。後者は非常に昂奮して、何かチ、コフの身にあの遺書に關して詐欺のやうなことが有りはせぬかと疑ひ出して居たのだ。今やそんな疑惑を起したのを自ら責めた。チ、コフが何時でも神に誓ひを立てようと云ふのは、明かに其反證を示すものである。我々もバヅエル・イワノヰッチが實際福音書に據つて誓ひを立てるだけの膽力を有つて居たか如何か知ら

ない。が、兎に角彼は左様すると口で言ふだけ大膽に成つて居たのである。

「其點に就いては、何卒安心して被坐しやい」と、彼は附け加へた。「私は此事件を一つ辯護士に相談して見る積りですよ。何んな事が有つても、貴方の身に罪の懸つて来るやうなことが有つては成らない。貴方は飽迄此事件に繋りのないやうにしてなきや不可ませんよ。私も自分の所好なだけ此町に逗留して居られるんですからね。」

チ、コフは直様下男に命じて馬車を玄關へ廻させた。そして、自分で辯護士の許へ赴いた。此辯護士が又非常な經驗を有する人物であつた。彼は十五年以前自ら法廷の審理の下に立つた。が、彼が自己の職業に従ふことを阻止することは全然不可能である。と云ふやうな工合に、旨く其處を切抜けた。誰も彼も彼が五度や六度流刑に處せられる位の罪を犯して居ることは十分に心得て居た。彼は有らゆる方面から極度に疑はれて居た。が、彼を屈服させるだけの明白な證據を擧げることが出来ない。實際、彼には怪しげな或物が着き纏つて居た。若し我々が今取扱つて居る物語が文明の光の届



かない野蠻時代に屬するものとするれば、彼のことを明ら様に魔術師と稱んで差支へないかも知れない。

辯護士は其態度の冷靜と、其寢間着の不潔とに依つて、痛くチ、コフを驚かした。實際、其寢間着は綺麗な桃花心木の家具や、硝子の蔽ひを被けた鍍金の時計や、更紗の蔽ひの下から覗いて居るシャンデリーや、其他彼を取捲きながら一々歐羅巴文明の極印を打たれて居る幾多の貨物に對して著しい對照を見せて居た。

が、辯護士の此の訝しげな容子に對しても、些の憶する處なく、チ、コフは差當つた事件の紛糾した要點を説明した。そして、堅實な助言と幫助とを與へて呉れたら、間違ひなくそれに續く謝禮の誘惑的な希望を眼の前に描いて見せた。

辯護士はそれに答ふるに、此世の物の果敢ない一時的の性質に關する暗示を以てした。そして、多くの技巧を用ひながら、天國の鶴よりも手に握つた山雀の方が自分に取つては値打があると云ふやうな意味を相手に覺らせるやうにした。

左様言はれて見れば仕方がない、山雀は此場の手金として渡される外なかつた。其時此哲學者の訝しげな冷靜は急に消失した。彼は極めて氣質の好い、對話に於いても極端に談所好で、愛嬌の有る、伶俐な點に懸けてもチ、コフ彼自身に較べて一步も譲らない男に變つて仕舞つた。

「甚だ失禮では御座いますが、長く冗々しい話は抜きとしまして、貴方は未だ後の遺書をすつかりお調べに成つて居ないやうですね。それには屹度遺言附屬書が附いて居る筈ですよ。出来るだけ速くそれを貴方の手に入れて置いて下さい。勿論、左様云ふものを個人が自宅へ持つて歸ると云ふことは禁せられて居ますが、でも何です、若し二三のお役人方に適當な手段で請願さへすれば——私は又私だけの幫助を盡しますよ。」

「いや解つた」と、チ、コフは考へた。そして、「私は實際そんな附屬書が有つたか如何かはつきり記憶えては居ませんがね——」と、恰も自分が其遺書を書いた記憶



がないやうに言つた。

「此場合貴方の爲さることで一番好いことは、それを捜して見ることですよ。加之、何んな場合でも」と、辯護士は愛嬌を含みながら續けて言つた。「貴方はすつかり安心して被坐しやらなければなりませんよ。で、縦令此事件が何んなに悪く成り相に見えなくても驚いたり騒いだりしてはなりませんね。何んな事情が降つて湧かうとも、決して絶望なさらぬが可い。癒して癒らないものは此世に有りませんよ。私を御覽なさい。私は毎も平静で居る。何んな手酷い攻撃の聲が私に對して擧げられようとも、私の冷靜は微塵も動がない。』事實として、此哲學辯護士の顔は著しく平靜な容子を保つて居た。それが又甚くチ、コフを安心させたものだ。

「勿論、そりやア極めて肝要な事柄ですがね。ですが、時として敵方の攻撃は有らゆる沈着も見ると、遁げて行くと云ふやうな、左様云ふ性質のもので有り、又左様云つたやうな境遇に立たされることも間々有るものだと云ふことは承認して置いて頂か

なくちや成りませぬね。』

「そりやア憶病の所爲ですよ」と、哲學辯護士は非常な沈着と愛嬌とを深へながら、言下に言ひ返した。「で、有らゆる取引を一々紙に書いて出すやうにして頂きたいものですね、何一つ概括的には遣らないやうに。で、事件が解結に近づいて、落着の期も熟して來たと御覽に成つたら、決して御自分を辯護したり、辯解したりせぬやうに努めて頂きたい。そして、只何か新しい争點を——此事件と全然關係がなくても構はないから——此中へ引込むやうにして頂きたいものですね。』

「そりや又何のためなんですか?」

「混雜を生せしめるためですね、それだけです。貴方は側の争點を、此事に關係のない事情を此訴訟の中へ引込まなくちやなりませんね、其結果側の人々が其中へ捲き込まれて來るんですよ。目的は只事件を複雑にするためですね、それだけで他に目的はないのですよ。で、それから誰か彼得斯堡から新に遣つて來た役人にそれを解さ



せて御覽なさい、出来るものなら其男に解させて御覽なさい！」と、聰明睿智な辯護士は非常に満足らしい容子で、恰度教師が露西亞語の文法に於ける間違ひ易い或章句を生徒に説明しながら、凝乎と其生徒の眼を見詰めるやうに、チ、コフの眼を眞直に見詰めながら繰返した。

「で、貴方の方でも人の眼に砂を投込むやうに出来た條目を出來るだけ澤山集めて置いて頂いたら可いでせうね」と、チ、コフは又或欺かれ易い章句に關する教師の説明を了解し得た生徒のやうに、満足げに此哲學者の眼を見詰めながら言つた。

「左様云ふ條目も用意して置きますよ、そりやア用意して置きますとも。ねえ、私の頭腦も多次の経験でだんく機敏に成つて來ましたからね。事件を複雑にしさへすりや、それだけ貴方の利益に成りますよ——貴方は時日を得する、役人どもは一層多くの報酬が獲られる——これを要するに、出來るだけ澤山の人間を此事件の中へ引込むことですね、其奴等が此事件に全然關係がないなぞと云ふことは、少しも心配して

遣るに及ばない。其奴等は其奴等で、自分の身の明りを立てますからね。只、新しい一件書類が山積するんですよ——左様すりやア、何が何やら解らなく成つて誰にも手が着けられなく成る。つまり我々は盲目隠れ果せることが出來るんですよ。何故私が斯んなに平靜にして居られるか解つてますか。私はそれを知つて居るからです。即ち私の事件が非常に悪く成らうとして居る際、私は誰も彼も其中へ捲き込むことが出來る——知事も、副知事も、警務長も、亦出納局長も誰も彼も捲き込むですよ。私は彼等の事情をすつかり諳んじて居る——誰が誰と喧嘩したとか、誰が誰のことを憤つて居るとか、又誰が誰に對して復讐しようと思懸けて居るとか云ふことです。で、出來るなら、彼奴等に自分の身を免れさせて御覽なさい。又他の奴を捕まへて來て、それに取代へるばかりですよ。魚を捕まへることの出來るのは、只濁つた水の中だけですからね。」

此處で哲學辯護士は再びチ、コフの顔を凝乎と眺め遣つた。そして、教師が生徒に



露西亞語の文法に於ける或間違ひ易い章句を説明する時に見せるやうな、同じ満足の色が其眼に表はれて居た。

「左様だ、此人は眞個其道の手練だよ」と、チ、コフは一人で呟いた。そして、極めて愉快な心の状態で辯護士の許を辭し去つた。

すつかり安心して、彼は馬車の彈機仕懸けの座褥の上にゆつたりと自分の身を投げ出した。それから彼は車蓋を後ろへ卸すやうにセリファンに命じた。(彼は車蓋を被けて、前被さへ扣子で留めながら、辯護士の許へ行つたのだ。)そして、或驃騎兵の退職大佐、即ちヴィシネクロモフ彼自身のやうな、鷹揚な態度を取つて、一方の足を一方の足の上へゆつたりと載せながら、會ふ人毎に、稍一方に傾いた新調の絹帽の下から愉快げに照り輝いて居る顔を見せたものだ。セリファンは市場の方角へ駆けさせるやうに命ぜられた。商賣どもは、此町の者も、又知らない土地から來て居るものも、兩方ながら店頭に立つたまま、恭々しく帽子を脱つて挨拶した。チ、コフも亦威嚴を

繕ひながら、帽子を高めて禮を返した。

多くの人々は既に彼を知つて居た。他の人々は——勿論他國の人達ではあるが——如何にも自分の身を處することを心得て居るやうな、此紳士の愛嬌の有る風采に惹附けられて、恰も相手を知つてでも居るやうに彼に挨拶した。ツフストラヴル町の市は未だ終りに成らなかつた。馬や農業上の市は既に閉された。が、上流社會の紳士貴婦人向の商品を包含する市は未だ開かれて居た。車に乗つて此町へ遣つて來た商賣どもは船に乗つてしか歸らないと覺悟して居るのだ。

「何卒お這入りなさい、旦那、お這入りなさい、旦那!」と、一人の男が呉服屋の店頭に立ちながら言つた。此男が帽子を被らないで、莫斯科仕立の獨逸風の外套を着て、片手に帽子を持つて、又片手の二本の指では綺麗に剃つた圓い顎を撫でながら立つて居る時、優美に氣取つた態度が著しく人の眼に着いた。同時に又其顔の上には細心な修練の表情が現れて居た。



チ、コフは其店へ這入つた。「反物を一つ見せて下さい、ねえ君」と、彼は言つた。愛嬌の有る例の商賈は直様店檯の中の離れるやうに成つて居る板を一枚上げた。斯うして自分の入口を造りながら、店の内側へ這入つて、商品を背後に顧客と面しながら立つた。それから帽子を脱つたまゝ、其帽子を一つ振りながら、最一度チ、コフに挨拶した。それから彼は帽子を被つて、兩手を店檯に突いたまゝ、優美に體の上部を曲げながら、次の様に言つた。「何んな反物をお目に懸けませうか？」英吉利出來をお好みですか、それとも内國製で宜しう御座いませうか。」

「内國製で宜しい」と、チ、コフは答へた。「だが、英吉利出來と云はれて居るやうな、極好いのでなりや不可ないよ。」

「何んなお色氣の處をお目に懸けませうか」と、商賈は矢張店檯に手を支へたまゝ、彼方此方身體を揺振りながら訊いた。

「オリーヴ色か、濃綠色か、さもなけりや紅莓苔子色を見せて呉れい」と、チ、コ

フは言つた。

「お請合致しますが、手前どもは皆極上の品ばかりで御座いまして、これより好い品は開けた首府でもなけりや逆も手に這入らないので御座いますよ。小僧や、二階の三十五號の反物を持つてお出で。それぢやアないよ、おい。いえ、其方の持つて來るんだよ。如何して又お前は始終そんなに生意氣な眞似をするんだい、此一文なしの乞食野郎奴？ 此方へお寄越しよ。はい、これが其反物で御座いますよ。」斯う言つて一方の端から擴げながら、商賈はそれを殆どチ、コフの鼻先へ突着けた。で、我々の主人公は其絹の光澤を手で觸つて見るばかりでなく、それを嗅いで見ることさへ出來たのである。

「此奴は好いねえ。だが、俺の言ふのはこれぢやないよ」と、チ、コフは言つた。

「俺は一ト頃税關に勤めて居たこともある。だからね、極好い品を出して呉れなくちや不可ないよ。で、最つと赤味が、つた色にして貰ひたいね、何方かと言へば紅莓苔



子のやうな色をしたのにね。』

『旦那解りました。旦那がお好みに成つて居る色は何でせう、近頃流行りかゝつて来たばかりの色でせう。未だ他にいろ／＼極上の品が揃つて居ますよ、ですが、お値段での處少々張りますが宜しう御座いますか。何しろ極上飛切と云ふ品で御座いますからね。』

それから彼は踏臺に足を掛けて棚の反物を卸さうとした。其反物はころ／＼と轉がり落ちた。彼は過去の時代に屬する技巧でそれを擴げた。それを明るみへ持つて出た時は、一瞬間自分が後の時代に屬して居ると云ふことも忘れたものらしい。彼は左様するためわざ／＼店の外へ出たものだ。そして、日光に面した時眼をしば瞬きながら、次の様に言つた。『こりやア極上等ばかり色の反物ですよ、ナワリノ製の煙色と燐の色ですよ。』

其反物は我々の主人公の氣にも適つた。其商賈の言ふ所に據れば『正札附』ではあ

るが、値段も折合はれた。それから其反物を裂く運動が兩方の手で手際よく行はれた。最後にそれが眼にも溜らぬ速さで、露西亞風に紙で包まれた。それから其包みを細い繩で捲いて、三重の結び玉でそれを縛つた。次に其繩が剪刀でちよん切られて、全體が馬車の中へ運ばれた。

『私に一つ黒い反物を見せて下さい』と、其時店の中で最一人の聲が鳴つた。

『クロブヨフの野郎が來やアがつた、畜生奴！』と、チ、コフは一人で吐いた。そして、成たけ相手を見ないやうに脊中を向けた。何となれば、例の相續に關して斯んな男と少しでも話をするのは、自分として體裁の好くないことだと考へたからである。が、クロブヨフは疾くも彼を見附け出した。

『如何したんです、バヴェル・イワノ井ッチ君？ 貴方は故と私を避けて被坐しやるやうですわね？、私は此間から眞面目に貴方と御相談したいことが有るのだが、何うしてもお目に懸ることが出來ないのでですよ。』



「私の尊敬する君よ、最も尊敬する君よ」と、チ、コフは相手を固く握り緊めながら言つた。「ねえ貴方、私も一度貴方とお談話がしたいと非常に願つて居たのですよ。處が、實際隙間がありませんのでね。」斯う言ひながら彼は一人で呟いた。「悪魔が貴様を連れて遁げて呉れやア可い！」其時不意に、彼は富有な火酒税の徴收官なるムラゾフが此店へ這入つて来るのを見た。「あゝ、アフアナシイ・ヴシリエギッチさんでしたか！」と、チ、コフは叫喚いた。「真個好い所でお目に懸りましたねえ！」

其時彼の後から續いて這入つて來たヴィシネボクロモフも、「アフアナシイ・ヴシリエギッチさん！」と繰返した。そして、例の品の好い此家の主人も、片方の腕の伸びるだけ帽子を頭から遠方へ離しながら、「貴方の最も卑しい下僕ですよ、アフアナシイ・ヴシリエギッチさん！」と叫喚いた。彼等の顔は皆罪の深い人間で富豪の前で見せるやうな、犬のやうな卑屈を表して居た。

老ムラゾフは彼等に對して一々お叩頭をしながら、真直にクロボヨフの傍へ歩み寄

つた。「御免なさい。私は遠くから貴方が此店へ這入られるのを見たものだから、一寸貴方のお邪魔をしようと思つたのですよ。お差支へがなかつたら、又貴方のお歸り途が私の邸の傍を通るのでしたら、一寸立寄つて頂きたいもので御座いますね、私は貴方と膝組で御相談したいことが有るのですよ。」

クロボヨフは答へた。「はい、畏まりました、アフアナシイ・ヴシリエギッチさん。」

「何と云ふ晴々した天氣が続くんでせうね、アフアナシイ・ヴシリエギッチさん」と、チ、コフが言つた。

「左様、真個ですね」と、ヴィシネボクロモフが口を挟んだ。「真個、斯んな事は滅多に有りませんよ。」

「左様、有難い譯ですね。真個好い天氣ですよ。だが、種子を蒔くには少許雨が欲しいものですね。」

「そりやア必要ですよ、是非必要ですよ」と、ヴィシネボクロモフは答へた。「それ



に又獵期のためにも雨は好いでせうよ。』

『左様、一ト驟雨有つても悪くないでせうね』と、チ、コフも相槌を打つた。此男は些とも雨なぞ欲しいとは思つて居ないのだ。が、如何云ふ理由か解らないが、何百萬と云ふ金子を有つて居る長者に同意するのは何時も愉快なものである。

『あの男がですわね』と、チ、コフはムラゾフが行つて仕舞つた時言ひ出した。『あの男があれで一千萬留布も有つて居るんだと思ふと、私は毎も頭腦がぐらく〜とするんですよ。逆も信じられませぬね。』

『眞個奇怪な話さ』と、グイシネボクロモフが言つた。『資本は少數者の手に有るべきものではない。これは今歐羅巴の各國に於ける論説の主題に成つて居ますよ。若し或人が金子を有つて居るとすれば、それを隣人に預けて遣るが可い。響應もすれば舞踏會も開く、慈善的な奢侈にも盛んに耽けるが可い。畢竟それは職人や労働者に食物を供給することなんですすからね。』

『私にはそりやア解らない』と、チ、コフは言つた。『一千萬留布も有つて居て、それであの男は百姓のやうな生活をして居る！ 其一千萬留布が如何されるんだか、誰も知らないのだ！ あれだけの金子が有りや、將軍か公爵以下の交際はしないやうにも使はれるんだがねえ。』

『左様です、旦那』と例の商賈が附け足した『アフアナシイ・ワシリエギツチさんはあれだけ立派な人物で被坐しやるにも拘らず、あの方には何處か未だ開けない處が澤山に有りますよ。商賈が名譽を獲たら、其人は最早商賈ではない。其人は既に謂はゞ問屋の大商人に成つて居るんですよ。左様云ふ事情の下に置かれたら、私だつて芝居の棧敷位取つて置く義務が有るやうに感ずるでせうよ。又娘だつて普通の大佐位に嫁附けようとは思ひませぬね。實際ですよ、旦那、私は將軍に嫁附けて見せますね。一大佐が私に取つて何です？ で、私の喫べる御馳走は最早料理番などに任せて置かない、食料販賣業者の手で料理させますよ。』



「うむ、そんな事を饒舌つた處で役に立たない。まあそんな話は止めて呉れ」と、ヴィシネボクロモフが言った。「人間も一千万留布持たせたら何を爲るだらう？まあ私に一千万留布渡して見るが可い、左様すりや、私が何を爲るか解るだらうからね！」

「いや、いや」と、チ、コフは考へて居た。「斯んな男に一千万留布持たせた處で何を仕出來すものか。だが、俺に其一千万留布を持たせて見るが可い。俺なら何かそれに相應するやうな喫豪い事を成就して見せるがな。」

「あゝ！俺が若しこれだけの恐ろしい経験を経て來た後で、一千万留布手に入れることが出來たら」と、クロブヨフは一人で呟いた。「経験は人に一哥の値を教へるものだ。えゝ！俺は今や昔の俺ではない。」で、一瞬間考へた後で、彼は自分自身に訊いた、「お前は實際今自分の家政を處理して行く術を知つて居るか」と。それから手を横に振りながら、彼は附け加へた。「何を馬鹿な！俺は今でも以前と同じ様にそれをばら撒いて仕舞ふに違ひない、それだけは確實だ！」で、彼はムラゾフが自分に何

を言ふことが有るかとか好奇心に燃えながら、其店を出て行つた。

「私は貴方を待つて居ましたよ、セミヨン・セミノギツチさん」と、ムラゾフはクロブヨフが自分の家へ這入つて來た時、相手に向つて言つた。「何卒私の室へ來て下さい。」彼はそれからクロブヨフを自分の私室へ伴れて行つた。其室は一年六七百留布の些細な俸給しか受けて居ない小役人のそれに較べて、決してそれ以上に居心地好く出來ては居なかつた。

「何卒打開けて話して下さい。貴方は何でせうね、近頃生活向の方も以前より少しは好く成つたでせうね？彼様して伯母さんも亡く成つたのだから、幾許か貴方の手へも這入つたのでせう？」

「如何貴方に申したら可いでせうね、アフナシイ・ワシリエギツチさん？私の生活向が好く成つたか如何か、私にも解らないのですよ。成程私は三萬留布だけ貰ふには貰つた。が、それは悉皆負債の一部を償却するために拂はなくちや成らんです



からね。で、それ以上には、私は何にも受取らないのですよ。ですが、肝要な點は此處に有るんです、何うも實際はあの遺書に載せてあつたやうではないやうですね。それに就いては何か卑劣な事が行はれたやうですよ、アフアナシイ・ヴシリエギッヂさん。私は今それを貴方にお話し致しますがね、貴方もそんな事が世の中に有るものかと屹度お驚きに成るでせうよ。あのチ、コフと云ふ男は——』

「失禮ですが、セミヨン・セミヨノギッヂさん。チ、コフのお話を承はる前に、先づ貴方自身のことを聞かせて下さいませんか。何の位有つたら、貴方の計算に従へばですね、貴方の家政をすつかり整理することが出来るでせうか。それを一つ話して下さいな。」

「私の許の家政は最う滅茶々々な状態に在るんですよ」と、クロブヨフは答へた。

「それを眞直にして、負債を償却して仕舞ひ、且極めて地味な生活でも今後続けられる様にする爲には、左様ですね、十萬留布以上でなくとも、それ位は是非必要で

御座いませうよ。」

「で、若しそれだけの金子が有つたら、貴方は今後何んな風に生活して行かれる積りですか？」

「左様ですね、私は先づ何處かに餘り金子の懸らない住家を求めて、専心子供の教育に従事する積りですよ。自分のことは最う考へても駄目ですからね。私の生涯は終つた、私は最う何の役にも立たない人間ですよ。」

「ですが、左様すりや貴方は矢張怠惰の生活を送ることに成るでせう。怠惰の生活には、人間が忙しくして居る時には夢にも知らないやうな誘惑が頭を持上げるものですからね。」

「私には出来ませんよ。私は最う駄目な人間ですからね。近頃は馬鹿にも成れば、腰も痛んで参りましたよ。」

「ですが、人間が仕事をせずに生きて居られますか。自分の務めと云ふものがな



しに、これが自分の席だと云ふ場所がなしに、人間が此世に存在して居られますか。神様のお造りに成つた有らゆる物を見て御覧なさい。有らゆる物は皆それぞれ自分の盡す務めを有つて、何かの役には立つて居ますよ。石一つでさへ無駄には造られて居ない。人間が、萬物の靈長たる人間が——役に立たずで終ると云ふやうなことが出来ることですかい。』

「ですが、私も何にも爲すに居る譯ではありませんよ。子供の教育位は、私が引請けて遣る積りです。』

「いや、セミヨン・セミヨノギッチ君、そりやア一番難かしい仕事ですよ。貴方自身教育されて居ないのに、如何して貴方に子供の教育が出来ますか。貴方もそりやア自分自身の生活を模範として子供を教育したら可いでせう。ですが、貴方の生活は人の模範に成るやうな生活ですかい。例へば、怠けて、骨牌ばかり取つて時間を潰すやうなことを子供に教へても好いのですか。いや、セミヨン・セミヨノギッチさん、貴方

の子供の世話は私にお任せなさい。貴方は子供を臺なしにして仕舞ひますよ。ね、此事を一つ眞面目に考へて御覧なさい、怠惰が貴方の身を滅したのですよ——貴方はそれから遁れなくちや成らない。貴方も此世で何一つ従事しないで、如何して生きて行かれますか、何か務めを果さなくちや成らない。日傭稼ぎの人足でも役には立つて居ますよ。人足は不味い麩包を喫つて居る。が、それでも其男が自分で儲けたのですよ。そして、其男は自分の職業に興味を有つて居るんですよ。』

「ねえ貴方、アフナシイ・ヴシリエギッチさん、私も遣つて見た、實際自分自身に打勝たうと努力はして見たのですよ。私は如何したら可いのだ？ 私は最う年も老れば、何の役にも立たなく成つた。で、私に何が出来るんです？ 官廳へ勤めに出るのですか。ですが、私も此年齢に成つて、只今世の中へ出たばかりの小僧ツ子の書記どもと一緒に卓子を並べて居られますか。加之に、私は何うしても賄賂を取ることが出来ませんからね。それがために私は自分の昇進をも妨げれば、他人の邪魔も致します



よ。又、其奴等は其奴等で最うちやんと自分達の階級を形造つて居ますからね。いや、アファナシイ・ワシリエギッチさん、私は反省もした、試みても見た、有らゆる種類の職務を日々熟考しても見た——ですが、私にはそれが一つも適當して居ませんよ。まあ私には養育院位が適して居るのでせうね。」

「養育院は一生働いて来た人間を收容する所ですよ。若い時代を放蕩に過して来た人間に對しては、蟻が蟋蟀に答へたやうな返辭をするでせうよ、彼方へ行つて、踊つて居れ！」と。又養育院の中に居る人間も矢張働いて居るんですぞ、決して骨牌をして遊んで居る譯ではない。セミヨン・セミヨノギッチさん、貴方は貴方自身をも、又家族の方々をも欺いて居るのだ。」

斯う言ひながら、ムラゾフは凝乎と相手の顔を眺め遣つた。が、可哀相にクロブヨフは返辭をすることも出来なかつた。ムラゾフは相手が氣の毒に成つた。

「まあお聞きなさい、セミヨン・セミヨノギッチさん」と、彼は再び言葉を續けた。「貴

方も教會へ這入れば祈禱をするでせう。朝の禮拜にも晩の禮拜にも缺さず出席して居られるやうだからね、そりやア私も知つて居ますよ。貴方は朝早く起きることは餘り所好でないやうだが、それでも早く起きて出懸ける——左様だ、貴方は未だ誰も起きて居ない朝の四時頃に教會へ出懸けて行くんでせう。」

「そりや又話が別ですよ、アファナシイ・ワシリエギッチさん。私は人間のためにそれを爲るんぢやないと云ふことを知つて居る、何事も此世に斯うして住へと我々人類に命せられた神様のためですからね。ですが、それが如何したと云ふんです？ 私に神様が私のやうな者にもお恵みが深いと云ふことを信じて居る。私が何んなに悪い卑劣な人間であらうとも、神様は私を宥して下さいますよ。人間が私を足で蹴飛ばす時、私の親友が私を裏切つて、而も私のためを思ふ目的から私を欺いたのだと云ふやうな顔をして居る時、神様は一人私を受け容れて下さいますよ。」

苦い悲痛の色がクロブヨフの顔に表れた。で、ムラゾフは相手が心を取直す餘裕を



與へるやうに、少時の間靜かに黙つて居た。それから言ひ出した、「何故貴方は何かの務めに従はないのです？ 人間のためでなくとも可い、又社會の満足を買ふためでなくとも可い。それ位お慈悲の深い神様のために盡すのですよ。仕事は神様の眼から見ても祈禱と同じ様に悦ばしいものである。何か一つ仕事に従事なさい。そして、人間のためでなく、神様のために働いて居るんだと思つて働くが可いんですよ。で、何です、貴方が漆灰に水を混ぜて下さるだけでも、神様のために遣つて居るんだと考へて居なさるが可い。少くとも貴方はそれからこれだけの利益が得られるんですよ——貴方には骨牌で錢を失くしたり、寄食者に御馳走したりして、一生をだらけて暮す餘裕がなく成る。え、セミヨン・セミヨノギツチ君！ 貴方はイワン・ポタプイチさんを知つて居ますか。」

「知つて居ます。そして、あの人には非常に深い尊敬を拂つて居るのです。」

「宜しい。處で、あの人も以前は盛大に遣つて居る商人でした。五十萬留布からの財産を有つて居ましてね。あの人が眼を着けたものは何でも利益に成ると云ふ位で、非常に贅澤な生計を立て、居ましたよ。息子に佛蘭西語を教へるやうにも成れば、娘は將軍に配合せる。何時友達に出會つても、それが店の中であらうが爲替の街中であらうが、直に料理屋へ引張つて行くのですよ。斯うして一度に數日間も引續き酒宴を催して居たので、到頭破産した。それから又神様があの人に災殃を送つた、息子が死んだのです。で、今は如何です？ あの人は私の許の書記に成つて居るのですよ。あの人は生れ變つたやうに成りました。生計向も自然に好く成つたのです。で、あの人は今五十萬留布を資本にして再び商業を營むことも出来るのですよ。『私は是迄書記ぢやつたから、これから書記で死にたい。今は』と、あの人は言ふのです。『私も健康で活々とした身體に成つた。が、以前は始終腹が痛くて、水腫にも罹り掛けて居たのですよ。が、最早そんな事は一切ない。』で、あの人は今や決してお茶も飲まない。あの人の嗅べる物と言つては、始終キャベツの肉汁と碾割麥のお粥ばかりですよ——



ねえ、貴方。で、あの人は他の者が決して遣らない程祈禱もすれば、他の者が迎も及ばない程貧乏人を助けもする。だから、私は財産を蕩盡した最一人の方が助けて見たいのです。』

憐れなクロブヨフは凝乎と考へ込んだ。

相手はつと彼の両手を握つた。『セミヨン・セミヨノギッチさん』と、彼は言つた。『私が何んなに貴方のことを心配して上げて居るか、好く考へて下さい！ 私は始終貴方のことばかり思つて居るのですよ。まア私の言ふことをお聴きなさい。あの僧院に誰も見たことのない隠者が一人被坐しやることは貴方も聞いてませう。あの方は非常な智慧を有つてお坐だ——ねえ貴方、私が嘗て知つて居る誰よりも多くの智慧を有つてお坐ですよ。で、あの人なら適當な助言を與へて下さるに違ひない。左様思つて、私は或日あの人に向つて語り出した、私には一人の友達がある——尤も、貴方の名を言ひはしませんでしたがね——其友達が斯う——云ふ事情から苦しんで居ると。隠者は

最初の間、私の話を熟く聴いて下さいました。が、不意に私の言葉を遮つて、『神様の仕事の方が貴方なぞの仕事よりも大切だ。澤山教會を建てなくちや成らぬが、建てる金子は一文もない、教會のために金子を齎めなくちや成らない！』と仰有るんですね。斯う言つたまふ、はたと扉を閉めてお仕舞ひなすつた。「如何云ふ意味だらう？」と私は一人で考へて見た。何うも助言を與へて下さる思召ではないらしい。左様思つて、私は僧院長の許へ参りました。すると私が、扉口を這入るや否や、僧院長は最初から斯んなことを言つて私にお訊ねに成るんですよ、教會のために齎金をして歩く業務を安んじて委せられるやうな人物を私が知らないかと。其人は紳士又は商人の階級に屬して居て、普通一般よりは高い教育がなければ成らない、又其仕事を自分の濟度と考へて居るやうな人物でなけりや不可ないと言ふのです。私は直様考へた。「あゝ、神様！ あの隠者は此仕事をセミヨン・セミヨノギッチに遣らせて見よと云ふお考へであつたのだ！ 此治療はあの男の病氣に適して居る。脇の下に帳簿を抱へて、地主か



「百姓へ、百姓から小賣商買へと歩いて廻る間には、あの人も有らゆる階級が如何して暮して居るか、又何んな人が何の缺乏に苦しんで居るかと云ふことを覚えて来るに違ひない。で、數州を遍歴して歸つて来た時には、あの人も町に住んで居る人々なぞに較べてずつと好く土地と田舎とを理解するやうに成るだらう。で、左様云ふ人が今は必要なのだ。或公爵が私に手紙を寄越して、書物なぞで讀んだ知識でなく、實際それが有るまゝに物事を心得て居る人物を手に入れるためには、何れだけ報酬を出しても構はないと言つて來ましたよ。其人の言ふ處に従へば、書物からは何にも獲られるものでない、好い加減な嘘ばかり書いてあるからだ。」

「貴方はすつかり私の頭をこんぐらからせて仕舞ひましたよ、アフナシイ・ヴシリエギッチさん」と、クロブヨフは憫れたやうにムラゾフを見詰めた。「實際、私は貴方がそれを私に言つて被坐しやるんだとは信じられない。左様云ふ目的なら、最つと活動的な、不撓の精力を有つて居る人物が必要ですよ。加之、私も如何して妻

や子供を捨て、置いて立たれますかい。」

「奥さんやお子供衆のことなら決して御心配には及びませんよ。私が自分で御家族の面倒を見ます。お子供衆には教師も附けて置きますよ。今迄のやうに貴方が御自分の爲に布施を乞はうとして、財布を持つてお廻りに成る位なら、神様のために左様なすつた方が遙かに高尚ですよ。私は貴方に粗末なキビツカ（圓形の幌馬車）を附けて上げますよ。少し揺れる位恐れて居ては成らない、反つて貴方の健康のために好い位ですよ。又旅行の費用も私から差上げて置きますよ。で、若し貴方が途中で如何しても金子の要るやうな人物にお會ひに成つたら喜んで上げて下すつても可いのですよ。左様すりや、貴方も随分善行が出来ようと云ふものです。但し其場合間違ひをなすつちや不可ない、貴方が金子をお遣りに成るにはそれだけの値打の有る人物でなければなりませんからね。斯うして旅行を續けられる間には、貴方も各種各様の人物とお懇意に成られることせう、又それ等の人が何んな工合に生活して居るかと云ふこともお知



りに成るでせう。これは人々の恐れる役人の巡回とは譯が違ひますからね。貴方の場合には、各人皆貴方が教會のために金子を集めて居るのだと知つて、平氣で自由に談話をするでせうよ。』

『私もそりやア極めて立派な計畫だとは思ひます、又喜んで其計畫に與りたいと思ひますがね、實際何うも私の力以上の仕事のやうに私には思はれるんですよ。』

『では、何が貴方の力以内に有るんです？』と、ムラゾフは言つた。『我々の力以内には何一つだつてない、何も彼も我々の力を超えて居ますよ。天の力を籍らなくては、何一つ我々に出来ることとははない。祈禱は我々の能力を集中させる。人間が胸に十字を切つて、「神よ、お助け下さい！」と言ふ。そして、漕いで行く時には、屹度對岸へ達することが出来る。人間は決して手を束ねて考へて居るべきではない、只盲目的に神に縋ることが肝心ですよ。キビツカは直様用意が出来ますよ。貴方は只僧院の長老様の許へ駈けて行つて、帳簿とあの方の祝福とを受けて呉れば可いのです。それか

ら直に旅立ちなさい。』

『私は貴方のお言葉に従ひます、神様の御命令として此事に従ひますよ。神様も何卒祝福を私にお授け下さい！』と、クロブヨフは力と生氣とが魂の中に充ちて来るやうに感じながら、心の中で考へた。彼の頭腦も現在の苦しい切ない状態から通れると云ふ希望に刺戟されたやうに見えた。光明が遠く彼方にちらちらと見え出した。

『では一つ貴方にお訊ねしたいことがありますかね』と、ムラゾフが言つた。『あのチ、コフと云ふのは何んな人物ですか？』

『チ、コフに就いては迎も信じられないやうな事柄を幾つも存じて居ますよ。あの男は斯うく云ふ整理に關係して居ましてね——え、御存じですか、アフアナシイ。ワシリエギツチさん、あの遺書は確に贋物ですよ。實際の遺書が発見されました。其遺書に據ると、伯母は總ての財産を自分が育て上げた二人の女の茶飲相手に遺して置いたのですね。』



『何と仰有います！ それぢや、其賈の遺書を誰が拵へたのです？』

『其處ですよ、又それが極めて不快な話なんです。人の噂ではチ、コフがそれを拵へて、伯母の死んだ後で其遺書に署名したと云ふことです。或女を死んだ伯母に仕立て、其女が署名したのだと云ふんです。畢竟、此事件は随分人の悪い仕事なんです。無数の訴訟が有らゆる方面から流れ込んで来ましたよ。例の死人の眞似をしたマリヤ・エレミエフナの許へは、今や求婚者が簇つて来ると云ふ有様です。現に二人の役人が其女のために喧嘩をして居ますよ。まア左様言つたやうな鹽梅です、アファナシイ・ヴシリエギツチさん。』

『左様云ふ話は些とも存じませんでしたよ。ですが、其事件には何か悪い事が包まれて居るやうですね。貴方の前だが、あのバヴェル・イワノギツチ・コフと云ふ人は私から見ても随分可厭な人物ですよ』と、ムラゾフは言つた。

『俺も亦一番近い相續人の一人として、わざ／＼訴訟を提出して置いたものさ。俺

の見る處ぢや、衆皆が奇つて簇つてしのぎを削ることだらうよ』と、クロブヨフは其家を辭して出てから、一人で考へて居た。『だが、アファナシイ・ヴシリエギツチも馬鹿ぢやないな。あの人も恐らく此任務を俺に委託する前には十分事件を考へ抜いたものだらう。俺は只それを果しさへすれば可いのだ。』

彼は既に旅行の道順迄考へ出した。其間ムラゾフは未だ繰り返して考へて居た。

『バヴェル・イワノギツチ・コフは俺にも随分可厭な人物だ。あの人があれで只あの意志の強固と不撓の精神とを善い事のために使つて呉れたらなア！』

同時に、裁判所では後から／＼訴訟が聚まつて来た。今迄聞いたこともないやうな親戚が續々現れて来た。鳶や鴉が死骸の上に群がるやうに、あのお婆さんの残して置いた莫大な遺産の上に、有らゆる人間が群がつて来た。チ、コフや詐欺の遺書に對する告發、第一の遺書の詐欺的性質に關する訴訟、泥棒やさまざまの物資の隠匿に對する攻撃、死んだ農奴の購買、並びに彼が税關に勤めて居る間密輸入した貨物に關して



チ、コフに對する攻撃——なぞが既に提出された。

何も彼も狩出された、彼の素性も一般に知れ渡つた。如何して人々が彼の素性を嗅出したか、如何して其全體を掘出したかと云ふことは誰にも解らない。が、チ、コフが自分と四方の壁とより外には誰も知る者がないと信じて居るやうな事柄に關してすら、さまざまの證據が擧げられた。今の處、これ等は總て審理上の祕密で、未だ彼の耳へは這入らなかつた。尤も、ずつと以前に受取つた辯護士からの親展書狀にも、事件が大分面倒に成りさうだとは書いてあつた。其手紙は短い文句で、『取急ぎお知らせするが、貴方の事件に就いては一騒動持上りさうだ。が、決して心配することはないから安心して被坐しやい。一番重要なことは——沈着である。今に萬事片付けて仕舞ひますよ』と認めてあつた。此手紙はすつかり彼を安堵させた。『此人は眞個天才だ！』と、チ、コフは言つた。

彼の愉快な心の状態を一層愉快にするために、恰度其時分裁縫師が彼の眺へた新調

の洋服を持つて來た。彼はナヅリノ製の煙色や燐色の新調の服を着た自分の姿を眺めて見たいと云ふ強い願望を起した。で、先づ洋袴の扣子を睨かり穿めた。何處から見ても素張しく好く似合つて、宛然繪のやうに見えた。布地は臀部と腓とに添ふやうに列られて居た。全體の形にいつくり嵌つて、それに依つて一層身體に弾力性を賦與して居た。彼が帶革を背後で引緊めた時、胃の腑の邊りは恰度太鼓のやうに見えた。彼は直様刷毛でそれを敲いて見た。そして言つた、『馬鹿だな！だが、これを要するに、俺も繪のやうな姿に成つたよ』と。又上衣は洋袴よりも一層出來が好いやうに見えた。皺一筋寄つて居ない。彼の身體の圓い部分では外側に屈曲し、又窪んだ部分もそれを型取つて、有らゆる部分が滑かに擴がつて居た。

チ、コフが脇の下で少し締め着けるやうだと言つた時、裁縫師は只微笑して居た。そして、それがために腰の周圍が反つて好く成るんだと言つた。『仕事に就いては何卒御安心下さい、御安心下さい』と、彼は得意の色を隠さうともしないで繰り返した。



「彼得斯堡を除いては、何處でも是位の仕立は出来ませんよ。」裁縫師は彼得スブルグから遣つて来たのであつた。そして、看板には「倫敦及びパリより」と銘を打つて置いた。此男は戯談が所好な譯ではない、これ等の二つの大都會の名を用ひた目的は、即座に他の有らゆる裁縫師の咽喉を扼さうと云ふのである。其結果、將來何んな裁縫師が遣つて來ても、それ等の大都會から來たとは一人も言ひ得ないで、只カル、スルーへ乃至コペンハーゲンから遣つて來たと言ひ得るばかりだからである。

チ、コフは裁縫師に對する負債を綺麗に拂つて遣つた。そして、最一度一人に成つた時、鏡の前に立つてゆつくり自分の姿を眺め出した——恰度美的官能を有する美術家のやうに、又コン・アモーレ（愛を持つて）に。總てが前よりも一層満足に見えた。頬は一層愛嬌の有るやうに、顎は一層誘惑的に見えた。白い襟は頬に其調子を頰ち、青い襦子の頸飾は襟に調子を頰ち、襯衣の前身の新流行の襷は頸飾に調子を與へて居た。更に又華やかな天鵝絨の胴衣が襯衣の前身に値打を添へて、絹のやうな光澤の有

るナヅリノ仕立の燕尾服は、其他有らゆるもの、効果を高めて居た。

彼は右を向いて見た——好い！ 又左を向いて見た——尙好い！ 彼は宮中侍従の家にでも行つたやうに、又鸚鵡のやうに佛蘭西語で饒舌り散らしたり、憤つた時にも決して露西亞の汚ない言葉なぞ使つて自らを卑しくしない、必ず佛蘭西語で相手を罵ると云つたやうな、左様いふ紳士の家へ出懸けたやうに、前へ屈んで見た。眞個優美なものだ！

頭を少許一方へ傾けながら、彼は極めて修養の高い中年の貴婦人に物を言ひ懸けてでも居るやうな態度を取つて見た。其態度は又すつかり繪のやうに見えた。美術家よ、早く刷毛を取つて、それを寫すが可い！ 餘りの嬉しさに、彼は跳躍するやうな鹽梅に一寸跳ねを實行して見た。卓子は顛へた。そして、オー・ド・コロンの香水を容れた罎が床へ落ちた。が、これも彼に不愉快な思ひをさせなかつた。

彼は只其の間の抜けた罎を「馬鹿！」と喚んだ。そして、「誰に此服裝を一番先に見



せよかな？ 一番好いのは——』と考へて居た。其時不意に玄關から長靴や刺馬輪の音に似たやうな鏗鏘の音が聞えて來た。そして、制服に身を固めて、自分一人の中に一大隊でも潛んで居るやうな顔附をして居る憲兵が一人這入つて來た。『貴方は即刻總督の面前へ出頭するやうに命せられて居ますぞ』と、彼は言つた。チ、コフはぐらぐらと眩暈がした。彼の前には頭に馬の尻尾を生やして、左の肩に十字の帯を載せ、右の肩にも十字の帯を載せた、又腰には大きな劍を提げて居る、鬚を生やした案山子が立昇つた。一方の腰にも鐵砲と、其外何だか譯の解らない物を提げて居るやうに、チ、コフには見えた。實際此人物の中には全一軍隊が含まれて居るやうに見えた。それが又素敵な軍隊だ！ 彼は何か返辭をしようと思つた。が、其案山子は手荒く彼を遮つて、『直様我輩と一緒に來るんだ』と呶鳴つた。

戸の隙間から玄關を覗いて見ると、其處には又最一人の案山子が立つて居た。それから又竊と窓の硝子越に眺め遣ると、庭には一臺の馬車が待つて居た。此上は何と仕様があらう？ チ、コフは實際ナヴリノ仕立の洋服其他の物を身に着けたまゝ、其馬車の中へ押込まれた。そして、四肢ともぶる／＼顛へながら、例の憲兵と一緒に、總督の邸へ連れて行かれた。彼等は玄關に立つて身繕ひをする暇も彼に與へなかつた。『さア這入れ！ 公爵がお待ち兼ねだ』と、職務を執つて居た役人が言つた。飛脚が各自状態を受取つて居る玄關の室を、彼は霧の中でも通るやうに夢の間に通り過ぎた。それから廣間へ這入つた。其中を通る時、彼は『斯うして人間は捕縛されたまゝ、審問もなければ形式もなく、直に西伯利亞へ送られるのだな！』と、そればかり考へて居た。彼の心臓は何んなに真心のある戀人でも逆も及ばない程猛烈に波打つた。到頭最後の扉が開いて、折靴だの、書架だの、書物だの、一杯に塞つた書齋が彼の前に顯れた。そして、公爵は憤怒其物を人化したやうにぶん／＼憤りながら、其處に立つて居た。

『俺の破壊者だ、破壊者だ！』と、チ、コフは一人で呟いた。『恰度狼が羊を裂く』



やうに、此奴が俺の咽喉を引裂くのだ。』

「俺はお前に目を懸けて、お前が如何しても監獄へ送られなければ成らぬやうな時にも、町の中で自由に残つて居られるやうに許して置いた。それなのに、お前は又人間が嘗て犯したことの無いやうな、不名譽極まる行爲で自分の身を汚した!」

公爵の唇は憤怒に顫へた。

「何んな不名譽な行爲を、何んな罪惡を私が犯したと閣下は仰有るので御座いますか」と、チ、コフは手足ともぶる／＼顫へながら聞いた。

「其女は」と、公爵は一步前へ進んで、凝乎とチ、コフの眼を見詰めながら言つた。

「お前の吩咐で、あの遺書に署名した女は捕縛されたぞ。で、お前も今に其女と對決させて遣らう。』

チ、コフの眼の前には世の中が暗く成るやうな氣がした。そして、顔色は紙のやうに眞蒼に變つた。

「閣下、私は事實の真相を申し上げますよ。私は罪を犯しました。眞個罪が有るので、すが、仰有るやうな罪が有る譯ではない。そりやア私の敵が私を裏切つたので御座いますよ。』

「誰もお前を裏切るやうな者はない。何故と云ふに、お前の中に潛んで居る奸諂は何んな無頼の徒が心で考へたよりも數層倍大きいのだからね。私はお前が一生の間に不名譽でない仕業を一つでもしたことがあらうとは信じられない。お前の有つて居る一哥でも、それは皆不名譽極まる手段に依つて、泥棒をして、管か西伯利亞を値打して居るやうな、不都合極まる取引に依つて手に入れたものだ。いや、最う斯んな事を言つて居るには及ばない。お前は直に監獄へ送られるんだぞ。其處で、惡黨や盜賊どもと一緒に、お前の事件の裁判を待つて居るが可い。で、これは未だ軽い刑罰だよ、お前はアルミヤック（長い百姓の外套）や羊の皮の上衣を着て居る連中よりもずつと悪い奴だからね。お前は又——」斯う言つて、彼はナブリノ仕立の上衣を眺め遣つた。



そして、呼鈴の鋼を掴みながら、烈しくそれを鳴らした。

「閣下」と、チ、コフは叫んだ。「お助け下さい！ 貴方も一家の父親で御座いませう。私の年を老つた母親のためにも、何卒私を宥して下さい！」

「嘘を吐けッ！」と、公爵は又腹を立てながら叫喚いた。「お前は何時かも子供や妻の名に依つて私の憐愍を求めた。そんな者全然ないぢやないか。今又母親だなどと言つて俺を瞞さうとするのか。」

「閣下、私は悪漢です、何一つ取處のない悪漢です」と、チ、コフは言つた。「私は實際嘘を吐きました。實際、妻も子供も御座いません。が、神様も照覽あれ、私は男として、市民としての義務を果たすために、始終妻を有りたいと思つて居ました。そして、今後は同胞市民や官憲の尊敬に値するやうに成りたいと思つて居ました。が、事情の輻湊は實際任意に成らぬもので御座いまして——閣下、私は自分の血を瀧いでも生計を立てなければ成らぬやうな目にも遭ひましたよ。一步毎に、私は詐欺と誘惑と

に邂逅しました——敵に、身の破滅に、誘惑に。私の一生は暴風雨のやうなものでした。又風のまにまに波間に漂つて居る小舟のやうなものでした。閣下、私は斯う云ふ人間で御座いました——」

不意に涙が彼の眼から瀧津瀬のやうに流れ出した。彼は例のナヴリノ仕立ての上衣や、天鷲絨の胴衣や、青い襦子の頸飾や、素敵に好く仕立られた洋袴やを身に着けたまゝ、公爵の足下に身を投げ伏した。そして、額を床に押し附けた。其間、彼の綺麗に分けた頭髪は別製のオー・ド・コロンの匂ひをぶんぶん放つて居た。

「此處放して彼方へ行けッ！ 此奴を向うへ連れて行くやうに兵卒を喚んで来い」と、公爵は其處へ這入つて来た役人に言つた。

「閣下！」と、チ、コフは両手で公爵の長靴に縋り着きながら叫喚いた。

「彼方へ行け、行けと言ふに！」と、公爵はチ、コフの抱擁から足を抜き出さうとして、ちたばたしながら言つた。



「閣下、私は貴方が私にお慈悲を懸けて下さる迄は一寸も此處を動きません」と、チ、コフは公爵の長靴を離すどころか、一層堅くそれを抱き緊めながら、そして、ナブリノ仕立の上衣を着たまゝ、長靴と一緒に床の上を引摺られながら言った。

「此處離せ、離せと言ふに！」と、公爵は人が足の下に踏み躪る氣にも成れないやうな、何か不快な蟲けらでも見た時に経験するやうな、何とも言はれない嫌惡の情を感じながら繰り返した。彼は烈しく身を振った。其結果チ、コフは公爵の足の打撃を鼻の上にも、唇にも、圓い頤にも感じた位であつた。二人の鬼をも拉ぐやうな憲兵が力づくで彼を引立てた、彼の兩腕を縛つて、多くの室々を通じて彼を連れて行つた。彼は眞蒼な疲れ切つた顔をして、人間が自分の前に眞暗な避け難い死を見た時、我々人間の性質には餘り好ましくないあの幽鬼を見た時、其身に感ずるやうな神經的恐怖の状態にあつた。

階段の上を開いて居る扉口で、彼はばつたりムラゾフに出會つた。不意に希望の光が彼の心に閃いた。忽ち超自然の腕力を出して、彼は二人の憲兵の手から自分の身を引離した。そして、惘れて立つて居る老人の足下に身を投出した。

「まア、バヅエル・イワノギッチ君、貴方は一體如何したのです？」と、ムラゾフは叫喚いた。

「助けて下さい！ 私は監獄へ引かれて行くんですよ——死刑の庭へ！」が、憲兵は彼を引摺んで言ひ懸けた言葉も、終ひ迄言はせないで、彼方へ連れて行つて仕舞つた。

牢舎の兵卒の長靴だの脚絆だの、臭ひで一杯に成つた、微臭い、濕つた地下室や、木地のまゝの卓子や、二脚の憐れな椅子や、鐵の格子を嵌めた窓や、裂目から煙を吹き出すばかりで、些とも熱を與へない、やゝな暖爐や——チ、コフがナブリノ仕立の新調の服を着て、未だ生活の甘さを味つたり、同時代の人々の注意を惹いたりしない間に、始めて泊つた部屋は斯んな有様であつた。彼は何の用意をする暇も與へられ



なければ、無くて適はぬ品々を持つて来る時間さへ與へられなかつた。金子を容れて置いた衣装函や、書類や、死んだ農奴に關する賣渡證書や——そんな物は皆今や官憲の手に移つた、彼は床の上に自分の身を投出した。絶望の悲哀が肉を喰ふ蟲のやうに心臓の周りにとぐろを捲いて居た。其蟲がだん／＼増加する速度で以て、何一つ保護されない心臓をむざ／＼と喰ひ始めた。最う一日、只最う一日此儘にして打捨つて置かれたら、チ、コフは最早此世に存在しなかつたに違ひない！ が、或人の凡てを救ふ手はチ、コフの事件に關しても怠けては居なかつた。一時間経つた時、牢屋の扉がさつと開かれた。そして、老ムラゾフが這入つて來た。

若し人有つて渴に苦しめられ、街路の塵埃に蔽はれた、勞れで喘ぐ旅人の乾燥いた咽喉に泉の新しい水を酌んで注いだとするも、逆も此訪問が我々の主人公を蘇らせた程には、其旅人の氣力を恢復し、精力を新にせしむことは出来なかつたらう。

『我が救世主！』と、彼は絶望の發作に於て身を投げ出して居た床の上から、不意に飛び起きながら叫喚いた。そして、ムラゾフの手を掴んで、矢鱈にそれに接吻しながら、自分の胸へ押し附けた。『あゝ、斯んな憐れな人間を訪問して下さるお志に對しては、神様が貴方に酬いて下さいませう。』

彼はわつと泣き出した。

老人は苦痛と同情の顔附で相手を見詰めて居たが、やがて言つた。『あゝバヅェル・イワノギツチさん、バヅェル・イワノギツチさん、貴方はまア如何したのです？』

『私が如何したら可いのです？ 程度に關する判断のあの呪はしい缺乏が私を打倒した、私は適當な時に止まるだけの智慧さへ有たなかつた。魔王が、あの呪はれたるものが私を欺いた、理性と人間の打算の限界を超えて私を連れて行つた。私は罪惡を犯した、罪惡を犯した！ が、彼奴等も亦如何して斯んな風に私を取扱ふのです？ 貴族を、苟も貴族を一回の審問だになく、一回の調査だになく監獄の中へ打込むなんて！ 貴族ですよ、アフアナシイ・ヴシリエギツチさん！ で、又彼奴等は如何して宿



へ歸つて、當場の事件を整理するだけの時間を私に與へないのです。今や私に屬する有らゆる物は、誰一人それを監督する者もなく打捨つてあるんですよ。私の衣装函も、アフアナシイ・ヴシリエギッチさん、私の衣装函も！ 其中には私の全財産が這入つて居るんですよ。私は額の汗と血と、数年間の労働と、節約とに依つてそれを得たのです！ 私の衣装函、アフアナシイ・ヴシリエギッチさん！ 何も彼も盗まれて仕舞ひます——持つて行かれて仕舞ひますよ。あゝ神様！

で、胸の真中に迫る苦痛を抑へる力も盡きて、彼は牢屋の厚い壁を劈いて、遠方まで鈍い音の聞えるやうな、大きな聲を擧げて啜り泣きをした。彼は襦子の頸飾を引千斷つた、又ナヴリノ仕立の上衣を引掴みながら、それを引裂いて仕舞つた。

「あゝ、バヴェル・イワノギッチさん、其財産が貴方を盲目にして居るんですねえ！それが貴方に目下の恐ろしい地位を本當に見させないのですよ。」

「私の恩人、私の救世主、私を救つて下さい！」と、憐れなバヴェル・イワノギッチは

ラゾフの足下に一身を投げ出しながら叫喚いた。「公爵は貴方を尊敬して被坐しやる、貴方のためなら何んな事でもして下さいますよ。」

「いや、バヴェル・イワノギッチさん、幾許私に左様したいと思つても、そりやア私には出来ませんよ。貴方は動かし難い法律の下に落ちたので、人間の力の下に落ちたのでは有りませんからね。」

「あの魔王の悪漢奴が、あの人間界から追放された奴が私を陥入れたのだ！」斯う言ひながら、チ、コフは壁に頭を打衝けた。そして、傷が附いて血が出る程酷く拳骨で卓子を殴り着けた。が、彼は頭にも猛烈な打撃にも、少しも苦痛を感じなかつた。

「落着いて下さい、バヴェル・イワノギッチさん。如何したら貴方が神様と和解出来るか、それをお考へなさい。人間のことは如何でも可いのですよ。貴方の憐れな靈魂を好く考へて御覽なさい。」

「ですが、何と云ふ運命でせう、アフアナシイ・ヴシリエギッチさん！ 斯んな運命



が他の人間に振懸つて来たことが有るでせうか。私は辛抱して一錢二錢と蓄めた——血の出るやうな辛抱ですよ。え、労働ですとも、労働して蓄めたのですよ。私は嘗て他人を欺かなかつた、又多くの人々の爲るやうに政府の金庫から竊盗をしたこともない。何故私が一錢二錢と蓄めたか。只餘生を安穩に暮らしたいためばかりですよ。そして、私の救ひのために、又國家に對する奉公のために如何かして得たいと心懸けて居る妻や子供に、それを残して置きたいためばかりですよ。それだから私は金子を貯蓄したいと思つたのです。成程私は道に外れたこともした。それは敢て否定しない。私は道に外れたことをした。が、私に如何することが出来るのです？ 私は只眞直な道を歩いて居ては何物も獲られない、曲つた道が一層有利であると悟つた時、道に外れたことをしたばかりです。が、私は始終汗水垂らして労働した。若し私一つでも奪つたことがあるとすれば、それは只金持から奪つたばかりですよ。なのに、あの裁判所の役人どもを見て御覽なさい、政府の金庫から何千と云ふ金子を盗むばかりでな

く、貧乏人の金子も泥棒すれば、何一つ有つて居ない人間の最後の一錢でも振ぢ取らうとして居るぢやありませんか。私はまア何と云ふ不幸な身でせう！ 私が労働の果實を刈入れようとするたびに、手でそれを觸れようとするたびに、不意に暴風雨が起るか水の下に隠れて居る暗礁に乗り上げかして、船は片々に裂けて仕舞ふんです。がね、如何云ふ理由だかそれを聞かせて下さい。私は此處に三萬留布の財産を有つて居ました。又三階建の家も有つて居ました。二度迄一つの村を買求めました。あ、アファナシイ・ヴシリエ非ッチさん、何故私ばかり斯んな酷い眼に會ふのでせう？ 私の一生は最早波間に漂ふ小舟のやうなものでせうか。天の正義は何處に有るんです？ 忍耐に對する、非類のない不屈不撓の働きに對する報酬は何處に有るんです？ 私は何も彼も失つた後で、三度新に始めました。他の人間なら疾くの昔絶望して酒でも飲み出すか、居酒屋で自分の身を滅して居るところを、私は一錢持つて新に始めたのです。私か何れだけの努力をし、何れだけの辛抱をして来たか、何卒考へて下さい！



然るに有らゆる錢が、謂はゞ私の靈魂の有らゆる力と一緒に、私から振ち取られて仕舞つた。他の人間は樂うに財産を拵へもしませう、ですが、私は非常な奮勵努力の結果、漸つと手に入れたので御座いますよ。』

心の堪へ難い苦しみに、彼は聲を揚げて泣いた。椅子の上に倒れたまゝ、片々に裂けて下つて居た上衣の裾をすつかり引千斷つて投げ出して仕舞つた。そして、以前は非常に骨を折つて大切にして居た頭髪の中へ兩手を突込みながら、心の鎮め難い苦痛を壓へようとして、反つて肉體の苦痛を喜ぶやうに、容赦なくそれを掻き撈つた。

長い間ムラゾフは是迄嘗て見たことのないやうな、此狂暴の表現を疑乎と見詰めながら、彼の前に黙つて腰掛けて居た。一寸前迄世故に長けた人物若しくは士官のやうな、すら／＼と凝滞しない態度で彼方此方駈け廻つて居た男が、今や土に汚れて、裂けた、皺くちやに成つた胴衣と、扣子の取れた洋袴とを身に着けたまゝ、自分と自分で血を出した手を差上げて、人類に免れない諸々の害意ある力を呪ひながら、狂人のやうにのた打廻つて居るのだ。

『あゝ、バヴェル・イワノギッチさん、バヴェル・イワノギッチさん！』と、ムラゾフは言つた。『若し貴方が此の同じ力と不撓の精神とを、最つと好い目的を以て、適當な方向に使用されたら、貴方は何んな立派な人物に成り得たことでせうね！ あゝ、貴方は何んなに多くの善事を成し就げたことでせう！ 善を愛する人間の一人が其善のために、貴方が一錢二錢を獲るために費された位の力を費したことなら、又貴方が金子を蓄積するために自分自身の煩勞を厭はなかつた位に勞苦を厭はないで、善のために彼自身の利己心と野心とを犠牲にすることを心得て居たら、あゝ神よ、此の我々の世界は何れ程立派に花咲いたことでせう！ バヴェル・イワノギッチさん、バヴェル・イワノギッチさん！ 情ないのは、貴方が他人に對して罪を犯したことではない、貴方自身に對して、貴方が天から與へられた精力と才能とに對して不忠實であつたことです。貴方は大人物に成れば成り得た人であつた。それなのに、貴方は貴方自身の零落



と破滅との原因で有つたのだ。』

何の位遠く迷へる罪人が正しい道から踏み出して居るにもせよ、何の位冷酷に彼の感情が成つて居るにもせよ、又何の位彼が腐敗した生活を固執して、それに縋り着いて居るにもせよ、なほ彼が臺なしにした好い性質から彼に近づいて行けば、彼の靈魂は知らず識らず眼を醒して、有らゆる纖維に於て顛へ出すものである。

『アフアナシイ・ヴシリエギッチさんと、チ、コフは言つた。そして、両手にムラゾフの手を掴んだ。』あゝ、若し貴方が只私が自由に成れるやうに、私の財産が再び手に入るやうに計つてさへ下さいましたら、私は斷じて貴方に誓ひますよ、今後は全然違つた生活の道を蹈みますと。私を助けて下さい、恩人、何卒助けて下さい！』

『私に如何することが出来ませう？ 左様するには、私は法律に反對して戦はなければ成りませんよ。假に私がそれでも遣つて見ようと決心したとしても、あの公爵は眞直な方ですよ。あの方は決して貴方を容すやうなことは有りますまい。』

『私の恩人、貴方には何んな事でも出来ますよ。法律なぞ私は怖いと思はない。私も法律に及向ふ位の手段は發見しますよ。一番困つたのは、私が監獄へ抛り込まれたと云ふことです、此處で犬のやうに死ぬだらうと云ふことです、私の財産が、私の書類が、私の衣装箱が——あゝ！ 何卒お助け下さい！』

彼は老人の足を搔抱いて、わつと涙に暮れた。

『あゝ、バヴェル・イワノギッチさん、バヴェル・イワノギッチさん！』と、老ムラゾフは頭を掉りながら言つた。『其財産は眞個貴方を盲目にしたのですね！ それがために、貴方は貴方の憐れな靈魂の聲に耳を傾けることを拒むのですよ。』

『私は自分の靈魂のことも考へますよ。只、何卒私を助けて下さい！』

『バヴェル・イワノギッチさん』と、老ムラゾフは相手に感銘を與へるやうな聲音で言つた。『貴方を助けることは私の力に及ばない。それは貴方にも解つて居る筈だが、貴方の運命を輕めるやうに、又如何かして自由の身に成れるやうに、私の力に及



ぶだけは盡力して見ませう。それに成功するか如何かは、私にも解らない。が、遣つて見ることだけは遣つて見ます。が、萬一私の期待以上に旨く行つて、それが成功した場合には、私は私の勞力に對して一つの報酬を要求しますよ、バヴェル・イワノギッチさん。富を獲ようとするやうな、そんな努力は悉皆打捨つてお仕舞ひなさい。私は眞面目に貴方に言つて置きますがね、私が假に私の全財産を失くしたとしても——而もそれは貴方のよりは多いのですぞ——私はそれに對して泣くやうなことはしない積りですよ。いや、いや、肝心なことは、他人が私から奪ふことの出来るやうな、そんな財産にあるのではない、何者も私から没收することも出来なければ、盗むことも出来ない或物に有るんですよ。貴方は既に随分長い間世間を經てお坐だ。御自分でも自分の生活を浪に揉まれる小舟に例へられた程だ。貴方は既に晩年を過すだけの十分な財産を蓄へられたのでせう。何處か穩やかな、教會に近い土地で、善良な單純な人々の中に一家をお構へなさい。又若し貴方が後に子孫を残したいと云ふ思召なら、餘り

金持でない、併し質素な生活には慣れて居る、若い善良な娘と結婚なさるも可い。そして、此の喧ましい世間や、世間の有らゆる誘惑的な出來心などは忘れて仕舞ひなさい。又世間にも貴方を忘れさせるが宜しい。世間の中に在つては、逆も休息は得られませんからね。世間が何んなものだと言ふことは貴方が御存じだ。世間に在つては、總ての人がそれ／＼敵を、誘惑者を、又裏切り者を有つて居る。』

『其通りです、其通りです、私は最う以前から靈魂の要求に従つて餘生を送りたいと、所領の支配に一身を委ねたいと、實際靜穩な生活を送りたいと、何度企てたか知れませんでした。誘惑者の魔王が、左様だ、惡魔と其仲間とが私を迷はせて、道に外れたことをさせて仕舞つたのですよ。』

何か遠いものが、何かずつと以前に彼の心の中へ落ち込んだまゝ、嚴しい、死のやうな訓戒に依つて、退屈な小兒時代の無慈悲な條件に依つて、兩親の家の荒寥たる状態に依つて、毎も變らぬ孤獨と、貧窮と、少年時代の不幸な印象とに依つて、冬の雪風



雨のために曇らされた、臃げな窓硝子を通じて裏悲しげに覗いて居た運命の悒鬱な顔容に依つて、少年時代から氣息の根を停められて居た或物が、如何かして眼覺めようと望んで居りでもしたやうに、或隠れて居た、是迄知られない感情が、今や我々の主人公の心の中にそろ／＼頭を持上げて來た。

一つの呻き聲が彼の唇から漏れて出た。そして、兩手に顔を蔽ひながら、彼は悲哀に充ちた聲で叫喚いた。「そりやア眞個です、そりやア眞個です！」

『出發點が法律に反して居る以上、貴方の人類に關する智識も經驗も役には立たない。若しこれが法律に反かない、正しい基礎を有つて居たら。あゝ、バヴェル・イワノギッチさん！ 貴方は何故自分で自分を滅したのです？ 眼をお醒しなさい！ 未だ晩くは有りませんよ、多分未だ間に合ふでせうからね。』

『いや、最う晚いですよ、最う晚い！』と、チ、コフは殆どムラゾフの胸も張裂けるやうな聲音で呻いた。「私は今に成つて、自分の行く道は斯うぢやなかつた、斯うぢ

やない——正しい道から遠く／＼離れて居たことが臃げに解つて來た、そんな氣がして來ましたよ。が、私には最う何にも出來ない。いや、私の育て方からして間違つて居た。私の父は諄々と正義を説いて、私の心にそれを浸み込ませようとした。父は又道德上の訓戒を私に寫させました。が、其間あの人は自分で隣人から一つの森を盗みました、私の眼の前です。そして、私にもそんな事であの人の手助けをするやうに強ひるのです。父は又不正な訴訟を起しました、私はそれを知つて居ます。あの人は又孤兒で、あの人の保護を受けて居た若い娘を墮落させて仕舞ひました。斯んな例が私に力強く働いた。私が正しい生活を送つて居ないと云ふことは、アフアナシイ・ヴシリエギッチさん私には解りました、ちやんと解りました。ですが、罪惡に對して今の私以上に嫌惡の情有つて居るものは、何處にも有りません。私の性質は粗硬に成つて仕舞つた。私は善に對するあの愛を有たない、慈善の行爲に對するあの美しい衝動を有たない、それは習慣に依つて形造られるものですからね。私は逆も富を獲る



ために闘はうとするだけの意志を善のためには有つて居ない。私は眞實を語つて居るのですよ。あゝ、私は如何したら可いでせう？」

老人は溜息を吐いた。

「バヴェル・イワノギツチさん、貴方は忍耐と同じ位に意志の力を有つてお坐だ」と、彼は言つた。「薬は苦い物です。が、病人は他に自分の恢復する道はないと知つて居るから、それでも飲みますよ。貴方は善に對する愛を一つも有つて被坐しやらない。それに對する愛がなくとも、力づくで善を行つて御覽なさい。貴方の場合に於ては、それに對する愛から善を行つて居る人の場合に於けるよりも、一層大きな功績として數へられることでせうよ。只數回それを行ふやうに努めて御覽なさい、左様すりや、貴方はそれに對する愛を獲ますよ。私を信じて下さい、何事も左様云ふ風にして進行するものですよ。私どもは「天國が力づくで取られる」と云ふやうなことを聞いた。力づくだけでも、私どもはそれに近づくことが出来る。で、更に力づくでそれを分捕る

必要がありますね。えゝ、バヴェル・イワノギツチさん！ 貴方は確に他の人間が有つて居ないやうな力を、鐵のやうな忍耐力を有つてお坐だ。で、貴方は征服することが出来ませんかい。左様だ、私には貴方がボガツイル（露西亞に於ける古代叙事詩の英雄）にも成れるやうに思はれますよ。今や總ての人が意志を缺いて居ますからね、意志の薄弱な人間ばかりですからね。」

明かにこれ等の言葉はチ、コフの魂の奥迄沁み込んだ。そして、其底に於ける主我的な或物に觸れた。決心、若しくはそれに似たやうな力強い感情が彼の眼に閃いた。

「アフアナシイ・ヴシリエギツチさん」と、彼は斷乎として言つた。「若し貴方が私の釋放されるやうに、そして、幾許かの財産を有つて此處を立去ることが出来るやうにして下さいましたら、私は貴方に誓つて、今後は全然違つた生活の道を取りますよ。私は何處かの村を買つて、善良な支配人に成りますよ。私は自分自身のためでなく、他人を助けるために金子を蓄める積りです。又私の力に及ぶ範圍に於て、何處迄も善行



を盡す積りです。私は私自身を忘れ、都會の有らゆる甘美なるものや宴會を忘れて仕舞ひますよ。私は單純な醒めた生活を送る覺悟ですよ。」

「神様が貴方の其決心を強めて下さいますよ！と、老人は大層喜びながら言つた。「私は公爵に願つて貴方の自由が獲られるやうに全力を盡して見ませう。成功するかしないかは神様でなけりや判らない。兎に角、貴方の運命は幾分緩められるでせう。あゝ神様、私を抱いて下さい！失禮ですが、私も貴方を抱きますよ。實際、貴方は私の心を喜ばせて下さいました！ちや、これでお別れ申します。私は直様公爵の許へ参りますよ。」

チ、コフは一人後に残された。彼の全性格は根柢から搖いで、悉く和らげられたやうに見えた。金屬の中で一番堅い他の有らゆる金屬よりも耐火性の強いプラチナですら、終ひには熔ける。爐の中の火がだん／＼増して、鑪でそれを吹き、焰の熱が耐へ難い極度に達する時は、一番頑強な金屬も蒼褪めて、液體に變ずるのだ。其様に耐

へ難い火が一時硬くされた人の性質を焼き盡す時、不幸な心の苦痛の最も頑強なるものも降参するものである。

「俺は自分ちや何の感情も有つて居ない」と、我々の主人公は獨言を言つた。「俺は何一つ感じない。が、他の人間を感じさせるために全力を盡す積りだ。俺は何の價値もない、好くない人間だ。が、他の人間を善に改宗させるために全力を振つて見る積りだ。俺は憐れな一基督教徒に過ぎない。が、斷じて罪惡を犯さないためには有らゆる努力を惜しまない積りだ。俺は働く、額に汗して働く積りだ。村へ行つたら、俺も他の奴等に好い影響を興へるためには、飽く迄正直に行動して見よう。これを要するに、何故俺は全然廢人のやうに自分を見なけりや成らないのだ？俺は所領の支配に對する才幹を有つて居る。又經濟や熟練だの、旨い智慧だの、時には不屈不撓の精神と云ふやうな好い性質も有つて居る。此處に缺けて居るのは、それを遣らうと云ふ決心ばかりだ。」



斯んな風にして、チ、コフは一人考へに沈んで居た。そして、自分の魂の半ば眼醒めた力を試験して居るやうに見えた。其状、恰も彼の天性が臍げな手探りながら、何んな地位でも、又何んな遠方の隅々でも、人間の置かれた有らゆる地位に於て、其人を周つて纏れて居る有らゆる困難と煩雜とに拘らず、何か知ら果さなければ成らぬ義務が有ると云ふことを悟つて來たものゝ如くである。そして、都會の喧噪から、又人間が勞働なぞ省みないで、怠惰の時間に工夫したそれ等の誘惑から、遙に離れた勞働の生活がはつきり彼の前に其論廓を現して來た。彼はそれがために現在の自分の不快な状態をも忘れて、再び自由の身と成つて、彼の財産の一部を取戻すことが出來たら、斯んな重い打撃に對しても天に謝しようと思つた位であつた。が、其瞬間騒がしい牢屋の扉が開いて、一人の役人が這入つて來た——サモスヴィストフと云つて、樂天主義者で、伶俐な人間で、一アルシン（二十八吋）も肩幅のある、足の大きな、仲間としては好い男で、大層な自慢家で、彼に關して友達の言ふ處に依れば、正真正

銘の獸だと云ふ男だ。戦争の際、此男は危険な密集部隊の中を通り抜けて、敵の大砲の口の下へ這ひ込むやうな使命を課せられたら、屹度驚くべき奇功を樹てたかも知れない。左様云ふのが此男に取つては一番適當した仕事である。其處にさへ居れば正直な人間に成れたかも知れない。軍隊の生活を罷めた後で、彼は出來るだけ自分をやぐざな、卑劣な人間に仕込むことに全力を注いだものだ。で、不思議なことに、此男はこれで途方もない信仰や主義を抱いて居た。仲間に對しては好く振舞つた。一人と雖も、彼等を裏切つたこともなければ、一度約束したらちやんとそれを守つたものだ。が、自分よりも上の階級の役人に對しては、敵の砲臺でも見るやうな目で彼等を見て居た。即ち何んな弱點でも、裂目でも、番兵の手薄な處でもあつたら、直ちにそれを利用して、其中へ躍り込むのが自分の任務だと考へて居るらしい。

『私は貴方の事情を悉く知つて居ますよ。何も彼も聞きましたからね』と、彼は自分の背後でびつたり扉が閉められたのを見た時、左様言つた。『決して心配すること



は有りませんよ、少しも。萬事が元々通りに成るでせうからね。誰も彼も貴方のために働き出した。我々も皆貴方のお役に立たうとして居るんですよ。悉皆で三萬留布お出しに成れば、萬事手順を着けます。」

「本當に！」と、チ、コフは叫んだ。「で、私はそれですつかり自由の身に成れるでせうかね。」

「え、すつかりですとも、貴方は御自分の損害に對して賠償を受けられる位ですよ。」

「で、貴方方のお骨折に對しては？」

「三萬留布です。我々の總てに對してそれだけですよ——我々の仲間にも、總督にも、又彼の祕書官にも。」

「ですが、私は如何したら可いでせう？ 私の貯蓄したもの、私の衣裳函、其他何も彼も封印されて監督の下に有るのですよ。」

「一時間経てば何も彼も貴方の手に戻りますよ。ちや、此取引は出来たものとして手を打ちませうか。」

チ、コフは相手に手を與へた。彼の心臓は疾く打ち出した、彼はそんな事が出来ようとは何うも信じられなかつた。

「では、暫時失禮しますよ。處で、私は親友から貴方に傳言をして呉れと頼まれて来た。一番肝心なことは——沈着である、何が有つても狼狽へぬことである。」

「ふむ！」と、チ、コフは考へた。「解つた、あの辯護士の仕業だな。」

其處でサモスヴィストフは姿を消した。チ、コフは再び一人と成つた。一時間後、彼の衣裳函や書類が何一つ取亂された痕もなく、齊然として自分の前へ持つて來られた。彼は其時でもなほ相手の言葉を信ずることが出来なかつた位だ。サモスヴィストフは指揮官のやうな振をして、我々の主人公の家に駐屯して居た番兵を怠慢だと言つて叱り着けたさうな。彼は番兵どもを檢閲した。そして、番兵を増加するために、最



つと他の兵隊を連れて来いと命令した。それから彼は衣装函ばかりでなく、何れかの點でチ、コフを罪に陥入れる患れのあるやうな、有らゆる書類を取上げて仕舞つた。で、それを一擲げにして、封印を施し、一人の兵卒に命じて、これは日常の起臥に缺くべからざる物ばかりだと云ふ托言の下にチ、コフの許へ持つて行かせた。實際、チコフは有らゆる書類と一緒に、彼の弱々しい身體を蔽ふに必要な、有らゆる着類や羽毛蒲團を受取つた。事態の此變化は言葉に盡されない程彼を喜ばせた。彼は強い希望を抱くやうに成つた。そして、再び奢侈の生活を、劇場で費された宵々を、以前から機嫌を取つて居た舞曲の娘なぞを夢みるやうに成つた。田舎と静穩な生活とは彼に取つて有らゆる魅力を失ひ懸けた、都會と其喧噪とは一層華やかでもあれば誘惑的でもあつた。あゝ、生活よ!

が、同時に裁判所や會議室では、此事件は嘗て聞いたこともないやうな比例を取つて展開した。書記どものペンは彌が上に働いた。彼等は又自分でも嗅ぎ出して来て、

自分達の盛んな能書を讀め合つて居た。例の辯護士は隠れた魔法使のやうに、全體の機械を操つて居た。彼は未だ一人も事件の真相を窺ひ知らない間に人々を悉く混亂させて仕舞つた。紛亂はいよゝ増大した。サモスヴィストフは又鐵面皮と逆も信せられないやうな大膽な行爲とに於て傑出して居た。例の捕縛に成つた女が何處に監守せられて居るかを聞き出して、直様自分で如何にも大膽な威嚴のある態度で其處へ遣つて来た。それがために番兵も手を洋袴の縫目の處へ卸して、彼に挨拶した位だ。

「お前達は此處に永く立つて居たのか」と、サモスヴィストフが訊いた。

「朝からすつとですよ、旦那。私が此處から解放されるには、未だ三時間も間隔が有るでせうよ。」

「俺はお前に遣つて貰ひたいことが有る。一つお前の代りに他の兵隊を寄越すやうに士官に話して見よう。」

「有難う御座います、旦那!」



それから家に戻つて、他人を此事件に這入り込ませたくない處から、サモスヴィストフは自分で憲兵のやうな服装をして、上髭や頬鬚をくつつ着けながら、すつかり身仕度をした。悪魔でもこれがサモスヴィストフだとはよも知るまい。彼はそれからチ、コフの住んで居た家を指して出懸けて行つた。そして、途中で出會した最初の女を捕縛しながら、それを二人の若い役人に引渡した。此役人達も又却々抜目のない男であつた。それから彼は上髭と鐵砲とを持ちながら、前の番兵の處へ遣つて來た。

『進めッ！』と、彼は言つた。『隊長がお前に代つて張番するやうに俺をお遣はしに成つたのだぞ。』

交替が行はれる間、サモスヴィストフは鐵砲を持つて立つて居た。それだけで澤山である。其間に死んだ伯母さんの身替りに立つた女は、何一つ知りもしなければ記憶えても居ない他の女に拘り替へられた。其後前者は非常に旨く隠されて仕舞つた。實際、彼女が如何成つたかと云ふことは誰も知らなかつた。

サモスヴィストフが軍人に打扮つて駈け廻つて居る間に、例の辯護士は又市民の間に奇蹟のやうな仕事をして居た。知事は檢察官が彼の身に就いて當路者へ訴へようとな準備して居ると云ふやうな風評を間接に聞き込むやうにされた。憲兵隊長は此町に個人として住んで居た或役人が彼に對する彈劾案を起草して居ると云ふやうなことを告げられた。又個人として住んで居た其役人は、更に一層不思議な最一人の役人が有つて、彼を告發しようとして居ると云ふやうなことを語られた。そして、彼等は皆如何してもあの辯護士に助言を借らずには居られないやうな地位に置かれた。其結果生じたものは悉く無意味であつた。彈劾が彈劾に續いた、何人も前に聞いたことのないやうな、又事實として、全然存在して居ないやうな事柄が將に曝露せんとして居た。さまざまな方策が此仕事に用ひられた、又此事件に關係して來た。或人は嫡出の子でないといふやうなことを言はれた、彼の生れや名前が曝露された。又或者は情婦を有つて居ると云ふやうなことを言はれた。又一方では、或人の細君に追懸けられて居



る男の名前が人の噂に上つた。

誹謗や、凌辱や、其他それに似たやうな有らゆるものが、チ、コフの事件と、死んだ農奴と混合はされ、折合はされた。其結果、それ等の事件の何れが一番無意味であるかを決定することは、何んな手段に訴へても全然不可能であるやうに見えて来た。到頭一件書類が總督の前に差出された時、憐れな公爵は如何して可いやら薩張解らなかつた。一件書類の整理を委任されて居た、極めて惻巧な物の解つた役人ですら、狼狽して、殆ど物が辨じられないやうに成つた。何んな手段に依るも此葛藤を釋す糸を掴むことは全然不可能であつた。加之、公爵は其頃一は他よりも一層面倒だと云ふやうな、他の幾多の事件に悩まされて居た。饑饉が州の一部に發生した。麩麩を分與するために、其處へ派遣された役人どもは當然取るべき手段を取らなかつた。又州内の他の部では、ラスコリニキ（十七世紀の中葉、ニコン主教は聖書を校訂して、書記の不注意から紛れ込んだ幾多の誤謬を訂正した。處が、一部の人民はなほ古い間違つた

翻譯を奉信して、此處にラスコリニキ、即ち古い信者と云ふ一派を生ずるに到つた。)の一派が騷擾を起した。或男が彼等の間に、反基督が生れた、彼は死人の魂を買ひ集めて死者に平和を與へないと云ふやうなことを言ひ振らして歩いた。それがためにラスコリニキの一派は吼り立つて、幾多の人に罪を歸した。そして、反基督を捕縛すると云ふ口實の下に、幾多の良民を斬殺した。

他の地方では、百姓どもが一揆を起して地主や地方警察の吏員に反抗した。二三の放浪者どもが彼等の間に、從來の百姓が皆地主と成つて、燕尾服を身に着け、從來の地主達は尻切絆纏を着て百姓に成る時節が來たと云ふやうな風説を立てた。で、左様成つた場合には、餘まり澤山地主が出來過ぎやしないかと云ふやうな事實には頓着しない、其地方全體が警察官に對して税金を收めることを峻拒した。いよ／＼高壓的手段を取る必要が生じて來た。憐れな公爵は想像にも及ばないやうな心の狂亂状態に陥つた。彼が火酒税の徵集官たるムラゾフに訪問されたのは、左様云ふ時であつ



た。「此處へお通し申すが可い」と、公爵は言った。其處で老人が這入つて來た。

「あのチ、コフが何んな事を仕出來したか御覽なさい」と、公爵は言った。「貴方は始終あの男の辯護をして被坐した。處で、あの男は今や卑劣極まる泥棒ですら手を出すことを恥づるやうな、可厭な取引に關係するやうに成りましたよ。」

「甚だ失禮では御座いますが、閣下、私には未だ好く此事件が解らないのですよ。」

「あの男は遺書を贗造しました、其他いゝんな事をして居ますよ。あの男は其不法行爲に對して、公衆の前に笞刑を加へるだけの値打が有りますね。」

「閣下——私はチ、コフを辯護しようと思つて、斯様なことを言ふ譯では御座いませんが、これは未だ確に十分證據立てられて居ませんよ。未だ一回の審問も行はれて居ないでせう。」

「證據が上つて居ますよ。死んだお婆さんの代りに成つた女が捕縛されました。私は特に貴方の眼の前で其女を審問して見る積りですよ。」

公爵は其時呼鈴を鳴らして、問題の女を召喚するやうに命じた。ムラゾフは黙つて控へて居た。

「實に不名譽極まる事件ですよ」と、閣下は再び言葉を續けた。「で、お恥かしいことには、此町の最高の役人連が其中に加はつて居ると云ふ話でしてね。え、民事知事もそれに關係があると云ふことですよ。あの人は彼様云ふ泥棒や悪漢どもが集つて居る所へ立寄るべきではなかつたのですかね」と、公爵はぶり／＼しながら言つた。

「でも、あの民事知事は亡く成つたお婆さんの相続人ぢや御座いませんか。あの人は此事件に關與する權利がありますよ。が、又他の人々が四方八方から干渉仕出したと云ふのも、閣下、極めて自然な話ですよ。金持のお婆さんが亡く成つた。そして、其お婆さんは、財産に關して成程と思はれるやうな、正當な處置をして置かなかつたのですからね。金子の欲しいと思ふ連中は四方から此處へ流れ込んで來ますよ——それが皆人間の本性ですな。」



「ですが、何故悪い事を爲るのです？ あの悪漢ども！」と、公爵は憤怒の情に驅られながら言つた。「私は自分の周りに一人も正直な役人を有つて居ませんよ、彼等は皆悪漢どもばかりですからね。」

「では、閣下、我々の中の何の人が善人だと言はれますかい。此町の役人連も皆一人人間ですよ。が、彼等と雖も、それ／＼人間としての價値を有つて居る。彼等の多くは非常に好く自分達の事務に通じて居ますよ。一方から言へば、有らゆる人間は皆罪惡に陥り易いものですからね。」

「まアお聴きなさい、アフアナシイ・ヴシリエギッチさん。處で——貴方は私の存じて居る唯一の正直な方ですよ——何故其の貴方が何んな悪漢でも、悪漢とさへ云へばそれ程執心に辯護されるのです？」

「閣下」と、ムラゾフは答へた。「貴方が悪漢として指名される人間が何人であるにせよ、其男は矢張人間ですよ。左様云ふ人間のする惡事の半ばは、心の粗笨や無智

から出て来るのだと云ふことを知つて居る以上、如何して其人間を辯護せずに居られませう？ 確に我々も一步毎に不正を行つて居る。惡い意志は一つも有つて居ない時ですら、一瞬間毎に同胞の不幸の源に成つて居ます。貴方も亦確に大なる不正を犯されたことが有るに相違ありませんよ。」

「何ですと！」と、公爵は思ひ懸けない方向へ會話が反れて行つたので、心の底から惘れながら叫んだ。

ムラゾフは深く思ひ廻らして居るやうに、少時黙つて控へて居た。が、やがて言ひ出した。「では、デルペンニコフの事件などは如何です、例へばですね？」

「アフアナシイ・ヴシリエギッチさん、あれは帝國の基礎と成つて居る律法に對する犯罪ですよ。自分の生れた國を裏切るのと同じ様なものですね。」

「私は決してあの人を正しいと言ふのではない。ですが、若くて心の到らないために他から裏切られた、他から迷はされた青年を罰するのは正しいことでせうかね。左



様云ふ青年を、恰度首魁の一人でもあつたやうに罰するのは正しいことでせうかね。デルベンニコフとあのヴォロンノイ・ドリヤンノイとは同じ運命に遭遇した。併し二人の罪は確に同一では有りませんでしたよ。』

『神様のために』と、公爵は見る／＼感情に動かされながら、續いて答へた。『貴方はあの事件に就いて何か御存じですか。ねえ貴方、私がデルベンニコフの刑罰の軽減に關して、直接彼得斯堡へ手紙を送つたのは、つい近頃のことですよ。』

『いえ、閣下、私はそれに關係して言つた譯ぢやありません。あの事件に關しては貴方が知つて被坐しやる以上に何一つ存じませんよ。成程、それを言ひ立てればデルベンニコフの利益に成るやうな事情が一つ存在しては居ますが、只それを利用するとは彼自身承知致しますまいよ。それに依つて他人を苦しめることに成るでせうからね。私は只貴方が或場合に餘り取急いで被坐しやりはしなかつたかと考へたばかりです。ですが、御免なさいよ、閣下。私は只私の薄弱な理解力に基づいて判斷するので

す。貴方は幾度も私の意見を率直に申述べるやうに私にお命じに成りました。私も幾多の百姓の上に立つて居る主人で御座いますから、善いのも悪いのも、いろんな性質の勞働者を澤山に有つて居ますよ。其處で、一人の百姓が悪い行ひを爲ました時にです。若し特種な事情と其男の以前の生活とを考への中へ入れなかつたら、又若し微細な點迄も冷静に糾問しなかつたら、決して其事件の真相を理解することは出来ないものです。それに反して、若し其男を兄弟が兄弟に訊ねるやうに質問したら、自分から進んで直様白状して仕舞ふもので御座いますよ。其男は憐愍を願ふことは有りませんまい、又何人に對しても恨怨を抱くやうなことも有りませんまい。其男も自分を罰するものは判官其人ではない、法律で有ると云ふことを明白に認めるでせうからね。』

公爵は其時深い考へに沈んだ。が、直に數多の人聲が接見室に近い大きな事務室から聞えて來た。公爵は腰の遺書に對してアレキサンドラ・イワノフナの代りに署名したと云ふので起訴せられて居る女を心待ちに待つて居た。で、其物音を聞くと待兼ね



たやうに苛々しながら、立上つて合の扉を開いた。事務室の中には、數多の書記どもに取捲かれながら、一々其間に答へて、何やら啞りながら饒舌つて居る一人の男が彼の眼に着いた。其傍に例の起訴された女が三人の兵隊に護衛されながら立つて居た。男が啞りながら手眞似で何やら言つて居ると、女は兩手を絞りながら泣き叫喚いた。又其處迄隨いて來た町の人々は、それを見て、閣下に事情を陳情したいと頻に歎願した。其混雜は一通りでない、一揆でも起つたのぢやないかとさへ思はれた。公爵は狼狽しながら、ムラゾフに胸せした。ムラゾフは了承して、町の人民の中から五六人の年寄を撰んで總督の私室へ連れて來るやうに取計つた。それに依つてあの啞つて居る男はあの女の所天で、其女は又今朝不意に捕縛された、而もアレキサンドラ・イワノフナの署名どころか、自分の名さへ碌々書けない女だから、そんな仕事の仲間入が出来る譯がない、何んな遺書にもせよ遺書なぞとは全然關係がないのだと云ふことが知れた。公爵も最初は間違つた女が捕縛されたのだと知つて、少からず面喰つて居たが、

(何と成れば、彼はサモスヴィストフがチ、コフのために計つた策畧に就いては、全然知るところがなかつたからである。)最後に飛んだ目に遭つた夫婦を自分の馬車の一つに乗せて送り返すやうに命令を傳へた。そして、斯んな間違ひが起つたことに關して、自分の過失を二人の前に謝した。

其瞬間、一人の若い役人が其私室へ這入つて來て、手に折靴を持つたまゝ、恭々しげな態度で立つて待つて居た。彼は野心に依つて刺戟されたのでもなく、又利慾から出たのでもなく、熱心に事務を執掌する少數者の一人であつた。實際、彼は自分の一生が其目的のために彼に與へられたのだと云ふ確信の下に公の事務に當つた。彼の事務は或事件を篩に懸けたり、一つ／＼それを拾ひ上げたり、又は自分が有らゆる纏れた糸を掴んだ時、それを説明したりすることから成立つて居た。彼は其事件が到頭自分にも明瞭に成つて、如何なる人にも明白に理解の出來るやうに、はつきりした少數の言葉で報告することが出來さへすりや、自分の勞働も、努力も、數夜の不眠も盡く



報いられたやうに感じて居た。

公爵は若い助手が這入つて来たのを見て親切にそれに挨拶した。それからムラゾフが將に出發しようとして居た旅行を利用して、州の各所に於てさまざまの訓令を實行させたと思ふ處から、彼は其問題に就いて相手に語り出した。ムラゾフは喜んで公爵の要求を引請けた。で、後者は再び言葉を續けた、「あの酒ばかり飲んで貪慾に耽つた結果、飢饉に悩まれて居る地方の騷擾を惹起した下僚どもが、今度此處へ歸つて來ましたがね、私は相當の罰を彼奴等に加へる積りですよ。恰度今私は其奴等の一人が此町に住んで居る或辯護士に送つた、極めて嫌疑の深い手紙を見たところですがね。え、其辯護士と云ふのは、徹頭徹尾策士で、遠からず此町から追出さうと思つて居るのです。又今度はいよゝゝ離心を生じた地方へ軍隊を派遣しなければ成らないことになりましてよ、特にラスコリニキ派の信徒が騷擾を起して居る地方へですね。尤も、これは何ですよ、貴方が被往して見ても貴方の分別だけではあの不幸な人民どもを思

ひ返させることが出來ないとお考へに成つた場合にと云ふことですよ。」

「はい、公爵、私も左様考へますよ。で、成功を一層確實にするために、私は自分でも飢饉に苦しんで居る地方へ大麥とライ麥とを送つて見ませう。左様云ふ仕事は貴方のお役人方よりも、私の方が好く存じて居ますよ。何が缺乏して居るか、私は一つ自分で觀察して見ませう。で、閣下のお許しが出たら、一度あのラスコリニキ派の信徒とも話をして見たいと思つて居ます。あの連中も私のやうな一平民とは一層自由に話をするのでせうからね。そんな工合にして、私は多分其連中と平和に事件を解決することが出來ようかと思ひますよ。お役人方には、そりやア此處置は出來ない。此問題に關する通信はなほ續くでせうが、それは只紙の上で事件を複雑にするばかりで、此事件は今有るよりも一層亂雜に成つて仕舞ふでせうよ。私は閣下から金子を一文も受取りたくない。斯んな場合に、人民が餓死をしようとして居る際に、自分の財布のとなぞ考へるのは大きな恥辱ですからね。私は幾棟となく穀倉を有つて居ます。既に



西伯利亞へも幾分かは輸出しました、來年の夏は二層澤山に送ることとせうよ。』

『左様云ふお骨折に對しては、神様一人貴方に酬いることが出来るのですよ、アフアナシイ・ヴシリエ非ッチさん。私は最早何にも貴方に言ひますまい、貴方は御自分で其狀況をお調べに成るが可い、言葉は無用にして且不適當ですよ。が、私が此町の八十二人の役人どもから受取つた、詐欺と胡魔化しの罪に問はれた十一人の同僚のためにする請願書に關しては、斯んな事件を知らん顔して打捨て、置く權利が私に有らうとは思はれませんね。請願者が何を言はうとも、惡漢を宥すのは、私として正義でもなければ名譽でも有りませんからね。』

『あゝ閣下、あの人達を左様言つて仕舞ふことは出来ませんよ、特にあの人達の多くが極めて立派な人物であると云ふ點から見ても左様ですよ。人間が時として陥る境遇は苦しいものです——極めて、極めて苦しいものです。或人が疑ひもなく罪を犯したと見える場合にも、好く〜事件を調べて見た時には、責むべきは全然其人でなか

つたと云ふやうなことも間々有りますからね。』

『ですが、若し私が彼奴等を宥して遣つた時、彼奴等は自分で何と云ふでせう？

確に彼奴等の中には、此事有つて後は前よりも一層鼻を高くして、俺達は總督を威嚇して遣つたなどと逆言ふ奴が有りますよ。彼奴等は私に敬意を失する第一人者と成つて、今後私の權威は地に墜ちて仕舞ふこととせうよ。』

『失禮ですが、閣下、何卒此事件に對する私の助言を聽いて頂きたい。先づ總ての役人どもを一緒に集めて、貴方が何も彼も知つて被坐しやることを言つて聞かせながら、恰度今貴方が私に話して下さいましたのと同じ言葉で以て、貴方御自身の地位を彼等にお話しなさいまし。そして、彼等の一人が貴方の地位に立つたら如何するかとお訊ねに成つたら好からうと存じますよ。』

『成程、貴方は彼奴等があゝの惡企圖や金子儲けに關係した連累者どもよりも、一層高尚な情操を有つて居るものと考へて居るんですね！ ぶう！ 彼奴等は只私を笑ふ



ばかりですよ。』

『私は左様は思ひませんよ、閣下。普通一通りの人間よりも悪いと言はれる人間の中にも、幾分か正義の感覺は残つて居るもので御座います。猶太人ならそんな風に振舞ふかも知れませんが、露西亞人には有りませんよ。いや、閣下、貴方が御自分の心持をお隠しに成る必要は少しもない。彼等にも只今私に話して下さいました通りに話して遣つて下さい。彼等は貴方のことを何一つ人の言葉に耳を傾けない、自分一人を信用して居る尊大な野心家として悪く言つて居ます。ですから、何も彼も實際あるがまゝに彼等に見せて下さい。それが貴方に何障りがありませう？ 貴方は正しくて被坐しやるのだ。彼等の前へ出て仰有るのでなく、神様お一人の前で懺悔でもして被坐しやるやうに、彼等に話して遣つて下さい。』

『アフアナシイ・ヴシリエギツチさん』と、公爵は考へに沈みながら言つた。『私は一度好く此事を考へて見ませう。で、それ迄は、先づ心から貴方の助言を謝して置き

ましよう。』

『で、閣下はチ、コフの放釋を命じて下さいませうか。』

『うむ、宜しい、それは命じますよ。チ、コフに言つて下さい、あの男は出来るだけ速く、二十四時間の間に出發しなければ成らない。そして、遠方へ行けば行くだけ可いんだと。若しあの男が再び私の手に落ちるやうなことがあつたら、其時は斷じて宥さない積りですからね。』

ムラゾフは公爵の許を辭して、眞直にチ、コフの許へ遣つて來た。我々の主人公は既に晴々した氣分に成つて、最上等の料理屋から取寄せた極上の御馳走を心靜かに平らげて居た、其處へ出會したのである。會話の最初の一句からして、老人はチ、コフが如何にかして狡猾な役人の或者を手に入れるやうに計つたのだなと見て取つた。彼はなほ例の巧慧な辯護士の眼に見えぬ勢力が、此事件にも根を張つて居ることを看取した。



「私の言ふことをお聴きなさい、バヅエル・イツノギッチさん」と、彼は言つた。「私は貴方が即刻此町を去ると云ふ條件の下に、貴方の釋放を得て来たのですよ。貴方の所有物を収集なさい、神様が貴方をお護り下さるでせう！一分間たりとも出發を猶豫しては成りませんよ、事件は一層悪く成るでせうからね。私には或人が今の様な風に貴方を煽動して居るんだと云ふこともちやんと解つて居る。ですが、私はそれが知れたら地上の方では逆も其人を救ふことの出来ないやうな性質の或事件が今將に爆發しようとして居ることを安んじて貴方にお知らせすることが出来ますよ。勿論、其人は自己の墜落と共に他人をも陥入れようと計るでせう。ですが、それにも拘らず、勘定の日は目の前に近づいて居ますよ。私が今し方貴方と別れた時、貴方は愛らしい、今よりはすつと愛らしい心の状態に居られた。私の貴方に與へた助言は決して輕々に與へられた譯ではありませんよ。金子故には、人間は互に喧嘩をしたり、相手の咽喉を斬り合つたりする。そんな富を求めるのに、左様やきもきなさらぬが可い。私の言

葉を信じなさい、バヅエル・イツノギッチさん、それがために人間が此地上で互に相反するやうな、有らゆるものを打捨つて仕舞はない間は、そして、彼等が精神上の富を獲ることに全注意を向けて來ない間は、決して眞の富者と秩序とは地上に打建てられませんよ。飢饉の日は今や國民全體に對して、又各個人に對して近きつゝある。それは明白ですよ。貴方が何と言はうとも、肉體は精神に附屬して居る。若し貴方に正當な道を踏んで行きたいと云ふ心が有つたら、最うそんな死んだ魂(農奴)のことなぞ考へないで、貴方御自身の生きた魂のために考へなさい。そして、神様のお助けで違つた人生の道をお執りに成るが宜しいよ。私も明日は出發することに成つて居ます。私の留守の間に、又災難が貴方の身に振懸つて來ると不可ませんからね、急いで此處を立つやうになさいよ。」

左様言ひながら、老人は其部屋を去つて仕舞つた。チ、コフは再び考へに沈んだ。そして、彼の心を人生の意義と云ふことに集中した。「ムラゾフの言ふことは正しい」



と、彼は言つた。「最うそろ／＼違つた道へ這入る時期だね！」

左様言ひながら、彼は牢屋を出て行つた。護衛兵の一人が衣装函其他を門の外迄持つて来て呉れた。セリファンとベトルシカとは主人の解放を見て何の位喜んだか解らない。

「うむ、奴ども」と、チ、コフは愛想好く二人に向ひながら言つた。「お前達は馬車に馬を附けて出立の用意をして呉れるんだよ。」

「畏まりました、バヴェル・イワノギツチさま」と、セリファンは言つた。「今頃は最う道は埋まつて仕舞つて居ますよ、大分雪が降りましたからね。で、櫓を遣るには恰度好い鹽梅ですよ。實際、斯んな可厭な町は早く去つて仕舞ひたいものです。俺どもも最う斯んな町には一日も留つて居たくないと思ふ程飽きて仕舞つて居るんですよ。」

「馬車製造人の許へ行つて、あの幌馬車に滑りを取附けて呉れるやうに頼んで来い」と、チ、コフは言つた。彼は誰にも別れの訪問をしようなどとは思はなかつた。あれ

だけの事が起つた後では、彼も流石に極りの悪いやうな気がしたのだ——殊に彼の一身に關して、さまざまの不愉快極まる誹謗や陰言が町中に行はれて居ると知つては、餘り好い氣持はしなかつたに相違ない。彼は有らゆる人に出會ふことを避けた。そして、前にナプリノ製の煙と焰の色をした布地を買つたことのある商賈の許へこつそり出懸けて行つた。彼は其處で同じ布片を更に四アルシンだけ上衣と洋袴にするとして買ひ求めた。それから前と同じ裁縫師の店へ足を向けた。二倍仕立賃を拂ふと言はれたので、裁縫師は大急ぎで仕上げることを承知した。で、其裁縫師の店では職人が一晩中針や、大熨斗や、齒と一緒に起きて仕事をして居た。其結果少し遅れたけれど、明るる日の朝上衣は出来上つた。最初の上衣と同じやうに立派な物であつた。が、憐れなるかな！チ、コフは今や自分の頭臚に滑かな白い斑點があるのを見附けた。そして、悲しげに呻いた。「あゝ、俺も又何だつてあんなに烈しく悲哀に耽つたものかな。何れにしても髪の毛なぞ撈り取るにや及ばなかつたのだ。」



裁縫師に代を拂つた後で、彼は到頭此町を去つた。彼は最早以前のチ、コフではな  
い。彼は只舊いチ、コフの残骸に過ぎないのだ。彼の魂は、これを内部的状態から見  
れば、新しい家を建て直すために引倒された古家にも比すべきものであつた。而も新  
しい家は未だ建築師の手許から最後の設計が到着しないので建て始まらない、それが  
ために大工どもも手を束ねて遊んで居ると云ふ有様だ。

死せる魂 下巻 終

附 録

戯 曲 検 察 官

第一幕

知事邸の一室。

第一場

知事。病院監督。 校長。 地方判事。 警察署長。 二名の巡査。 醫師。

知事 今日皆さんに御足勞を願つたのは、何うも餘り香ばしくないお報知をするため  
でしてね。實は近い間に檢察官が遣つて来るんですよ。



地方判事 檢察官が！

濟生病院管掌者 なに、檢察官が！

知事 え、彼得斯堡から密々に遣つて來るんですよ。而も秘密の訓令を帯びて――

地方判事 何ですつて？

病院監督 いやはや、それでなくとも随分困つた事が有るんだのに……又そんな事が降つて湧いたのですかい。

學校長 何の事だい！ 加之、秘密の訓令なぞ帯びて！

知事 何うも昨夜の夢見が悪う御座んしたよ。徹宵大きな鼠の一番に惱まされましてね。あんな鼠は私も是迄見たことがない。眞黒で……又馬鹿に大かいですからね。それが室の中へ這入つて來て、其邊を嗅ぎ廻つて居るかと思ふと――又何處かへ行つて仕舞つたのですよ……では、此處にアンドレイ・イワノヴィツチ・チュミーコフから來た手紙が有りますからね、これを一つ讀んで皆さんにお聞かせしませう。貴方はあの

男を御存じでせう、アルチェーミ・フィリツボヴィチさん。(病院監督に向つて。)で、手紙の文面は斯うなんですよ。「親愛なる友よ、命名親にして恩人なる……」うむ！ 始めの二三行を急いで目を通しながら、(口の中でぐづぐづと呟く。)……「で、此事を貴下に御知らせするために……」あゝ！ これですよ。「全州、就中貴下の地方を精密に檢察するために、既に一官吏が任命されて特派せられたることを取急ぎ御知らせ申候。(意味ありげに一本の指を高く擧げる。)小生は確かなる筋より此事を聞き出したるものに候。彼人は個人の微行として來る由に候。處で、貴下は物の道理の解つたお方であり、且つ貴下の網に懸つた物をむざむざ遁すやうな方でもあるまじと存じ候へば……」(一寸中止しながら)うむ、こりやア成程旨い言ひ廻しだね……「豫め相當の警戒を加へられむことを勸告いたす次第に御座候」と申すのは、彼人は何時其地へ參るやも計り難く――或は又既に到着して、人知れず貴下の町に滞在いたし居るやも知れざればに御座候……昨日……」あゝ、これからは私用に移るのです。「妹のアン



ナ・キリロヅナが良人と共に小生を訪問いたし候。イワーン・キリロヅナも近頃は  
 大層肥つて来て、絶えず提琴を弄び居候……」なぞと云ふやうなことだね。で、皆  
 さん、事情と云ふのは斯んな次第ですよ。」

地方判事 何しろ大變ですね、眞個驚きましたよ。これには何か理由の有ることでは  
 うな？

學校長 ですが、何故です——皆さんに伺ひますが、何故私どもは檢察官などを勞し  
 なくちや成らんでせうね？

知事 (溜息を吐きながら) 何故つて、そりやア天命ですよ。(再び溜息を吐く) 是迄  
 は幸ひに他の町ばかり檢べて居たのですからね、今度は私どもの番が廻つて來たので  
 すよ。

地方判事 アントン・アントノヴィツチさん、私やア思ふんですがね、これには何か政事  
 上の意味が有るやうですよ。畢竟——斯うぢやア有りませんか——露西亞は……え、

左様ですよ……露西亞は戦争を始めようとして居る。で、何處かに敵方の間諜が這入  
 り込んで居はせぬかと、それを探るために政府が役人を派遣したと云ふやうな譯ぢや  
 ありませんかね。」

知事 何を言ふんです！ 貴方はそれを眞面目で仰有つて居るんですかい。斯んな内地  
 へ間諜が這入り込むなんて！ 此處は國境ぢやありませんよ。外國へ行くには、何方  
 へ向いても二三年は駆け通さなくちや成りませぬせ。

地方判事 いや、失禮ですが、貴方は何にもお解りに成つて居ない……政府はあれで却  
 却精密に注意して居ますよ……知りたいたいは何でも知つて……始終聴き耳を立て  
 て居るんですからね。

知事 そりやアまア何方でも宜しい——兎に角、私は貴方方に警戒を加へて置きます  
 よ。私としては既に二三應急の手段を取りました。で、貴方方も同様の手段を取られ  
 ることを勸告します。特に貴方にですね、アルチエーミ・フィリツボヴィツチさん！ (病



院監督に向つて。確に檢察官は何を措いても先づ貴方の管理して被坐しやる病院を臨  
 検するでせうからね。ですから、萬事整頓して置く方が可う御座んすぞ。寢帽は清潔  
 に成つて居るか、患者は鍛冶屋のやうな顔をして其邊を歩き廻つて居はせぬか——平  
 常が左様ですからね。

病院監督 あゝ宜しう御座います。左様いふ事なら、清潔な寢帽を被せて置くことに  
 しませうよ。

知事 それから各寢臺の上に、羅旬語其他の言語で記入して置いて頂きたいものです  
 ね——そりやア貴方の役ですよ、ヒュッブネルさん（と、醫師に向つて）——患者の名  
 前と、病名と、それから患者が何月の何曜日から病み着いたと云ふことですね……何  
 うも患者どもにあんな強い烟草を喫ませては不可ませぬね。病室へ這入つて行くと、  
 息が塞りさうですよ。あゝ、それから患者は餘り澤山に居ない方が好う御座んすね。  
 澤山居やうものなら、如何してもそれは管理の不行届か、醫者の不慣れに歸せられ易

いものですからね。

病院監督 え、醫療のことは私とヨハン・イワノヴィツチ君と二人ですつかり極めた  
 のですよ。畢竟、自然に近づけば近づく程好いんですね。私どもちや高價な藥なぞ決  
 して用ひない。なに、人間なぞと云ふものは單純なものですよ——死ぬものは死ぬ、  
 快く成るものは、そりやア又快く成るんですね。加之、ヒュッブネル君も患者の言ふ  
 ことを理解するには大分骨が折れるやうですよ——何しろ此人は露西亞語が皆目解ら  
 ないのですからね。

醫師 Joh……Joh……（註曰、此醫者は獨逸人である）

知事 それからアムモス・フーードロヴィツチさん、貴方にもお勧めしたいのですがね  
 ——（地方判事に向つて）——何卒一つ裁判所の建物に注意して下さいませんか。彼處  
 に訴訟關係者どもの待つことに成つて居る控室が有りますね。貴方は彼處で給仕ども  
 に鷄を飼はせて、鷄の仔が嘴で人民の脛を突つて廻ると云ふぢやありませんか。成



程、鷲を飼ふと云ふ目的は宜しい。又給仕どもが左様して不可ないと云ふ理窟は一つも御座いませんがね、只それが地方裁判所の中ちや何うも似合しくないと思ふんですよ、え、う？……此事は何日ぞやから貴方に申上げようと思つて居たのですがね、つい失念して居たのですよ。

地方判事 では、今日にも早速あの鷲を厨房へ持つて行かせることに致しませう。貴方は晝餐に被入して下さいますか。

知事（それは耳に入れないで。）それから法廷がいろんな塵芥で一杯に成つて居るのも何んなものですかねえ。貴方の卓子の上の書類に混つて遊獵の鞭が轉つてるぢや有りませんか。私も貴方が獵好きだと云ふことは存じて居ますがね、當分の間はあれを片附けて置いた方が好う御座いますよ。檢察官が歸つて行きさへすれば、又彼處へ出して置いても可いのですからね。それから貴方の助役ですよ……あの人はそりやア間に合ふでせうがね、併し何うも始終ぶん／＼臭はせて居て、大概の者は今居酒屋から

出て来たもんだと思ひますよ——あれも困つたものですね。此事はすつと前から御注意しようと思つて居たのですが、つい、他の事に取紛れて忘れて仕舞つたのですよ。なに、あの臭ひが當人の言ふやうに生れながらのものだとしても、それに對する療法は幾許も有りますよ。葱か大蒜と云つたやうな物を喰べるやうに貴方からお勧めなさい。兎に角、何か療法は有る筈ですよ——ねえ、ヒュッブネル君？

醫師 Jeh……Jeh……Jeh……

地方判事 いえ、あの療法は逆も有りますまいよ。あの男に聞くと、子供の時分乳母に落された打身が原因だと云ふんですからね。それ以來始終火酒の臭ひがするんだと云ふのですよ。

知事 いや、私は只御注意さへして置けば可いのですよ。で、目下此地方に布かれて居る政道と、アンドレイ・イワノヴィチ君が手紙で言つて来た、所謂「網の中へ落ちたもの」云々に關しては、私は只あの君の意味が解らないと言ふ外ない。そりやア成



程何んな人間でも數へ立てすりやア多少の罪過を具へて居ない者は有りますまい。天帝から左様いふ風に造られて居るんですからね——幾許無神論者が反對した處で、そりやア駄目ですよ。

地方判事 多少の罪過とは何の事ですか、アントン・アントノヴィツチさん？ 一口に罪過と云つても、其間に區別が有りますよ。私は決して自分が賄賂を取ること隠さうとは思はない——又賄賂と云つた處で、精々獵犬位なものですからね。眞個そりやア言ふに足りませんよ。

知事 うむ、そりやア獵犬にもせよ、又は他の物にもせよ、兎に角賄賂は賄賂ですよ。

地方判事 いや、左様は参りませんよ、アントン・アントノヴィツチさん！……例へば、或人が五百留布もするやうな毛皮の外套を貰つたとか、又は其細君が立派な肩掛でも貰つたと云へば、そりやア何ですが……

知事 (腹を立てて) 左様——ですが、貴方は又何故獵犬の仔なぞを賄賂に取つたの

です、え？ それが解つてますか。そりやア貴方が不信者だからですよ。貴方は些とも教會へお出掛けなさらない。それに反して、私は少くとも信仰を有つて居る——日曜日には缺かさず教會へ参ります。だが、貴方は……あ、私は貴方を知つて居る。貴方が天地の創造に就いて話し出すのを聞くと、私はぞつとして思はず髪の毛が竦立ちますよ。

地方判事 それが如何したと言ふんです！ 人間てえものは各自觀る所を異にするものですよ。

知事 兎に角、餘りに多くを知ると云ふことは、何にも知らないよりも一層好くないものです。加之、私は只地方裁判所の話をして居るんだ。明らさまに云へば、誰もあの中へ鼻を突込まうと思ふ者は有りませんよ。それが普通の役所でない、神の保護の下に置かれた、神聖な場所だから耐りませんや。其處で又ルカ・ルキチさん、貴方は學校長としての職責上、最少し教師どもを監督して下さらなきや困りますね。私



もそりやアあの方々が立派な學校を卒業した、賢明な人々だと云ふことは存じて居ますよ。だが、あの人々は如何いふものかあの人達の高尚な職業とは全然似つかはしくない特殊な癖を有つて居るんですね。例へば、あの肥つた顔の先生ですよ——名前は今一寸忘れましたがね——あの人は講壇に登るや否や、妙な蹙め面をして、一巡教室の中を見廻さずには居られないやうだ——斯んな鹽梅式にですよ。(蹙め面をして見せる)それから頸帶の下へ手を入れて顎を掻き始めるんですね。あの人が見生徒に對して蹙め面をするんなら、勿論そりやア大したことぢやない——時にはそれが必要かも知れませんが——左様いふことは、私にや好く解りませんがね。だが、あの人若し參觀人に對しても彼様いふ顔をして見せたら、結果が宜しくないと云ふことは、貴方も御承引に成りませうね。檢察官閣下にもしろ、又は他の人にもしろ、自分に左様いふ顔をされたと取りましますよ——そしたら、後は如何いふ事に成るか解りますまい。學校長 ですが、私は如何したら可いんでせうね。それに就いちや、是迄もたび／＼

あの男に注意してゐるんですよ。二三日前でしたがね、視學官が此處へ遣つて来た時、あの男は私でさへついぞ見たことのないやうな蹙め面をして見せましたよ。あの男は決して悪い積りでしたんぢやアない、それは私にも解つて居る。だが、人は私の許へ不足を持込んで來ますよ——子供にあんな過激な思想を吹き込んで呉れては困るなぞと言ひましてね。

知事それから歴史の教師に御注意なさらなきや不可ませんよ。あの方は學者だ——それは解つて居ますよ。随分科學の研究も積んで居るらしい。だが、講義の際、熱心の餘り時々我を忘れることの有るのは困つたものですね。私も一度あの方の講義を聞いたことがありますがね。アツシリヤ人及びバビロニヤ人の話をして居る間は、未だ何事も有りませんでしたかね、語一度マセドンのアレキサンダー大王に及ぶや、いや最う何と言つて可いか、一寸形容の辭に苦しみましますね。宛然足許から火事でも起つたやうな鹽梅でしたよ。いきなり講壇から立ち上つて、力任せに椅子を床へ敲き着けまし



たね。成程、マセドンのアレキサンダー大王は勇者でした。併しそれだからと言つて学校の器具を毀す理窟はないでせう。政府が其損害を償はなくちや成らんですからね。

校長 え、あの男は眞個熱烈ですよ。私もそれに就いちやア何度も注意したんですがね。あの男は只斯う言ふんですよ、『何となりと仰有い、私は科學のために生命を捧げて居るんだ！』と。

知事 そりやアまあ勝手に捧げなさいだがね。だが、相手が遁げ出す程盛め面をしに見せるやうな人間は、こりやア正氣の人として取扱つて可いか、それとも酔漢の部に入れべきか、一體如何區別したら可いでせうね？

校長 あ、神様も照覽あれ！ 貴方が最う少し教育の如何なるものかを知つて居て下すつたらねえ。各自自分の考へに従つて遣るが可い。各自自分が精神的人物であることを示して差支へないですよ。

知事 そんな事を言つた處で何にも成りませんよ——だが、呪はしいのは密々に遣つて來ると云ふ檢察官だ！ 爆裂彈のやうに、不意に私どもの真中へ落ちて來るんですものね……『あ、貴方は此處に被坐しやいましたね。で、判事さんは何方ですか？』てなことを言ひますよ。『リヤブキン』チャブキンで御座います。『では、リヤブキン』チャブキンさん、前へお出なさい……で、病院監督は何方ですか。『セミリヤニカで御座います。』ではセミリヤニカさん、前へお出なさい……眞個氣でも狂ひ相ですな！

### 第二場

前と同じ連中。郵便局長入る。

郵便局長ですが、皆さん、誰が來るんです？ 何んな檢察官が遣つて來るんですよ？ 知事 貴方は何かお聞き込みに成りませんか。



郵便局長 ボブチンスキ君がそんなやうな話をしましたよ。あの人は今私と一緒に郵便局に居たのですがね。

知事 で、貴方は此事件を如何お考へですか。

郵便局長 私が如何考へるつて——そりやアいよく、土耳其と戦争が始まるんですよ。地方判事 成程、全然私と考へが一致して居ますね。

知事 いや、何うもお二人ながら賢明で被在しやるよ。

郵便局長 え、土耳其人には生死の問題ですよ。何しろ佛蘭西人が本當に怒り出したのですからね。

知事 あ、戦争が何ですな。生死の問題は土耳其人ちやアない、我々に在るんですよ。それだけは確實ですね。私は或手紙を受取つたから左様言ふんですよ。

郵便局長 ちやア最う土耳其人と戦争どころちやアない。

知事 で、貴方は何んな鹽梅ですね、イワン・クヅミツチさん？

郵便局長 私が何んな鹽梅かつて——貴方は如何です、アントン・アントノヴィツチさん？

知事 私ですか。私は決して苦勞性と云ふ譯ではないが、何うも少し氣に懸ることがありますね。商人と町の人間が一番氣に懸りますよ。私が彼奴等アの物を横領でもしたやうなことを言ひ觸らしますからね。で、縦しんば私が多少横領したことが有るとしても——そりやア惡氣が有つて遣つた譯ちやア有りませんよ。(と、郵便局長の腕を執つて、傍へ連れて行く。)……私は左様思ふんですがね、何うも私を政府へ告訴した者が有るらしいんですよ。それでなけりや、斯う急に檢察官などを差向けられる譯が有りませんからね。でねえ、イワン・クヅミツチさん、一つ我々一般社會の安寧のためだと思つて、君の局から出入する手紙を……ほんの少うしづゝで可いから開いて見て下さる譯に行きませんかね——畢竟其の私を告訴したり、又は其他の危険な手紙が這入つて居りはせぬか知りたいのですがね。で、若し別條なかつたら、再び封をして



送つて下さつても可いし、又面倒なら開けたまゝ送つて遣つても可いんですよ。別に大したことぢやありませんからね。

郵便局長 解つてます、く……そんな事ア教へて頂くに及びませんよ。自宅ぢやア始終遣つてるんですからね。尤も、別に目的が有つて遣る譯ぢやアない、只好奇心からですよ。私ア世の中に何んな新しい事が起つて居るかと思ひ程知りたいたい性質ですからね。いや、眞個の話が、是程面白いこたア他に有りませんね。時々男女の艶文なども出會しますしね……文章が綺麗で、立派で……『莫斯科新聞』なぞよりやア、すつと面白う御座いますね。

知事で、如何でせう、彼得斯堡から来た役人に就いて何か思ひ當るやうなことは有りませんでしたかね。

郵便局長 いや、彼得斯堡から来た役人のことなどは一つも有りませんでしたね、コストロマやサラトフから(二つともゾオルガ河畔の町)来た人間のこととは随分書いて有り

ましたかね。いや、其手紙を貴方に見せたかつたですよ。中には随分綺麗な文句が有りますね。一例を挙げると、つい先達てのことでしたかね、或中尉が友人に舞踊會の様子を知らせて遣る手紙が有りましたよ……いや、眞個美しい文章でした。『愛する君よ』と書き出しましてね、『予は今エリジウムに在り。美しき娘子束に成りて来る。樂の音の高く響いて、予は灯の中に躍り入れり』……眞個、此青年の文章は感情が燃えるやうですね。私はわざ／＼それを藏つて持つて居ますよ。一つ此處で讀み上げませうかね。

知事 いや、有難う。今そんな事をして居る時間が有りませんかからね。ですが、これだけの事は一つ頼まれて下さいませんか、イワン・クツミツチさん、貴方が若し告訴とか彈劾とか云ふものを御覽に成つたら、猶豫なくそれを取除けて置いて下さいませんか。

郵便局長 そりやア喜んで御要求に應じますよ。



地方判事（何か漏れ聞いたらしく。）貴方方お氣を附けなさるが好う御座んすよ。後で又飛んだ御迷惑な事に成りますからね。

郵便局長 えゝ？ 何ですつて？

知事 いや、大丈夫、何でも有りませんよ。これが大ッ平に遣るんなら何ですが、四方壁の中で、祕密に行はれるんですからね。

地方判事 何うも好くない事だ、好くない……時にアントン・アントノヴィッチさん、私は貴方に仔犬を一疋差上げたいと思つて居ますがね、貴方も御存じの、私の許に居る獵犬の親身の姉妹ですよ……シエプトヴィッチとワルコヴィンスキの二人が訴訟を始めたことは、貴方も最うお聞きでせうね。私は仲裁に立つてるんですよ。ですから、或時は前者の山で、又或時は後者の野で兎を獵して居ますよ。

知事 貴方の兎なざア今構つて居られませんよ。私は最う密々に旅行して居る檢察官のことが氣に成つて、何うしても頭腦から脱けませんからね。斯うして居る間にも、

不意に扉を開けて這入つて來られるやうな氣がして居るんですよ……

### 第三場

前と同じ連中。ホプチンスキとドプチンスキの兩人息を切つて入り來る。

ホプチンスキ 大變だ！

ドプチンスキ 思ひも寄らない事件ですよ。

皆々 一體如何したんです？

ドプチンスキ 眞個思ひも寄らない事件ですよ。私達があゝの旅館へ這入つて行きますね……

ホプチンスキ（それを遮りながら。）私がドプチンスキ君と一緒に旅館へ這入つて行きますね……

ドプチンスキ（言葉を挾んで。）いや、お待ちなさい、ホプチンスキ君。私が皆さんに



お話を致しますよ……

ホブチンスキ いや、お待ちなさい、お待ちなさいつてば……貴方は此事件の聯絡を能く御存じぢやないのですよ。

ドブチンスキ ですが、貴方は始終私の邪魔ばかりしますね……貴方は委しい事を少しも知らないのでせう……

ホブチンスキ いや、何を仰有るんだ。そんなにして、私の言ふことを交せつ返さぬやうにして下さい。私が何も彼もお話しますよ……何卒皆さんもドブチンスキ君に左様言つて、私の邪魔をしないやうに御注意下さいまし……

知事 ぢや、まア貴方からお話し下さい。一體如何したんですか。私はそれを聞かない間は此通り動悸が鎮まらないのですよ。さア皆さんも何卒椅子に懸けて下さい。ホブチンスキさん、此處に椅子が有りますよ。(一同ホブチンスキを周つて席に着く。)さアお話し下さい——一體何が起つたのですか。

ホブチンスキ まアお待ち下さい……だんくお話し致しますよ。私は貴方があの手紙のために大層心配して被坐しやるのを見て、此處を去つてから……左様だ、彼處だ……彼處へ駈けて行きましたよ……ですが、ドブチンスキ君、何卒話の腰を折らないで下さい。私は何も彼も知つて居る、何も彼もお話し申しますよ、何も彼も、何も彼も……で、前申した通り、私はカローブキンに會ひに駈けて行きました。處が、カローブキンは自宅に居ませんでした。で、私はラストコーフスキの許へ取つて返した。處が、ラストコーフスキも矢張在宅しませんでしたから、郵便局長の宅へ立寄つて、貴方から聞いた話を其儘傳へました。それから局長の許を出て、途中でドブチンスキ君に遭ひました……

ドブチンスキ (相手の言葉を遮りながら。) タート饅頭を賣つてる露店の傍でしたよ。ホブチンスキ 左様だ、タート饅頭を賣つてる露店の傍でした……で、私はドブチンスキ君に遭つて、直に「貴方は知事が或信用すべき方面から受取られた手紙の中に何ん



な事が書いてあつたか知つてるか」と訊きました。が、ドブチンスキ君は既にお宅の家事取締のアブドーチャさんから其話を聞いて居ました。アブドーチャさんは如何いふ用事が存じませんが、貴方のお使でフィリツポ・アントノヴィチ・ボチエチニエフの許へ参つたのだ相ですよ。

ドブチンスキ (相手を遮りながら) コニヤツクの瓶を持つて行つたんですよ。

ボブチンスキ (手を舉げて相手を沈黙させようとしながら) あゝ左様だ、コニヤツクの罐を持つて行く處でした……それからドブチンスキと私とはボチエチニエフの許へ参りました……ドブチンチキ君、好い加減に止められないかね、君は随分僕の邪魔をしたよ……で、私どもはボチエチニエフの許へ参りましたが、途中でドブチンスキ君が言ひ出したんですよ。『先づ料理屋へ這入つて飯でも喰はうぢやないか。今朝から何にも喰はないから腹の蟲がぎゆうぐう鳴つてるよ……それに此家の主人は新しい鮭を貯へてると云ふことだからね、一つ試して遣るのも可いぢやないか』つてね。で、

私どもが其の旅館へ這入つてから一分間とも経たない間に、不意に一人の若い男が

……

ドブチンスキ 一寸綺麗な男でしたよ、立派な着物を着た……

ボブチンスキ 一寸綺麗な男でしたよ、立派な着物を着た……其男が凜然とした顔附をして……人相をして……表情をして、(食指で額を指しながら) 私どもの食堂へ這入つて來ました。いや、眞個立派な風采でしたよ。私は何うも一種の豫感が有つたからドブチンスキ君に言ひました。『ねえ君、あの男は空目的で此處へ來てるんぢやアないよ』と。いや、眞個空目的ぢやアない……で、ドブチンスキ君は手招ぎして主人を喚び寄せました。主人のヴァラス——あの男の細君は三週間前に強壯な男の兒を生みましたよ。何れ親父の跡を繼いで旅館の主人に成るでせうかね。で、ドブチンスキ君は主人を傍へ喚んで、低聲で『あの若い男は何者だい?』と訊きましたよ。主人は『ああ、あの方で御座いますか』と答へた……おい君、ドブチンスキ君、邪魔をしちやア



不可ないよ。君の様に舌ッ足らずの物言ひぢや、此話は出来ないよ……何しろ口の中に齒が一本しきやないのだからね……『あの方で御座いますか』と、主人が答へた。

『あのお方は彼得斯堡からお出に成つたお役人様で御座いますよ。お名前はイワン・アレキサンドロヴィッチ・クレスタコフ様と仰有いまして、サラトフ州の方へ御旅行に成る相で御座います。まア何と云ふ變な方でせうねえ』と、主人が言ふんですよ。『最う二週間も手前許にお坐に成りますが、一度も戶外へお出に成つたことがなく、何も彼も勘定書にして取つて、現金は一文も下げて頂けないので御座いますよ。』——此話を聞いた時、私は天井から明りが射して來たやうな氣がした。そして、ドブチンスキ君に向つて『へえ！』と言ひましたよ。

ドブチンスキなに、『へえ！』と言つたのは僕だよ、ポブチンスキ君……

ポブチンスキ 勿論、先に『へえ！』と言つたのは君だよ。が、僕も矢張『へえ！』と言つたよ……それから私はドブチンスキ君に言ひました。『へえ！ サラトフへ行かうと云

ふのに、何故此處に滞在してゐるんだ？』……いや、左様ですよ。彼得斯堡の役人と云ふのはあの男ですよ。

知事 なに、何の役人だつて？

ポブチンスキ 斯得斯堡から遣つて來ると云ふことを、或人が貴方の許へ知らせ寄越したあの役人ですよ——檢察官ですよ。

知事 (狼狽して。) なに、何を言つてゐるんだ！ そんな筈は有りませんよ。

ドブチンスキ そんな筈が有るから不思議ですよ。そりやア最う私が請合つても可い。御覽なさい、其男は何も彼も勘定書で取つて、一文も拂はないと云ふんですよ——それがあの方でなくて、如何します？ 加之、サラトフ行の驛遞馬車を約束したと云ふんでせう！

ポブチンスキ あの方ですよ、斷じてあの方ですよ……あの方は有らゆるものに眼を着けて、有らゆるものを觀察して、有らゆるものに心を配つて居るんですからね。何物



と雖もあの方の鋭い眼を免れない——あの方は私とドブチンスキ君とが鮭を喰つてるところを見て居ましたよ……殊に甚しいのは、ドブチンスキの腹加減が悪いからだといふこと迄見て取つたんですからね……實際、あの方は私どもの皿を斯んな鹽梅に（眞似して見せて。）ちろ／＼と眺めて居ましたよ……眞個私は心配に成りますよ。

知事 神様、何卒私ども罪人をお寛下さい。して、其人は何處に居るんですか。  
 ドブチンスキ 一階の右側五番の室に。

ゴアチンスキ 去年此町へ来た旅行中の士官が喧嘩したあの室ですよ。

知事 最う何の位此處に居るんですか。

ドブチンスキ 最う二週間だと云ふことですよ。

知事 二週間！（傍白。）お、神父様、聖者様、何卒私をお助け下さい！ 此の二週間の中には、下士官の寡婦が鞭打ちの刑に處せられたし、囚人には少しも食物が與へられなかつた。それから近頃飲酒屋の多いことは如何だい！ そして、町の掃除は些

とも實行されない！……あ、神様、私は最うお仕舞ひだ——お仕舞ひだ！（兩手で頭の髪を掴んで悶える。）

病院監督 で、アントン・アントノヴィツチさん、一つ我々が揃つて大禮服用で旅館へ出向いた方が好かありませんかねえ。

地方判事 いや〜！ 先づ警察署長と僧侶と商人とを差向けた方が好う御座いますね……

知事 いや！——いや！ それはまア私にお任せ下さい！ 今度は誰しも一生に一度と云ふやうな難儀な場合ですがね……神様のお恵みで如何にか無事に切抜けることが出来るでせうよ——只神様が私どもをお見捨てさへなければね！（ゴブチンスキに向つて。）若い人だと貴方は言ひましたね。

ゴブチンスキ え、見たところ二十三か四位ですよ。

知事 そりやア恰度好い——若い者は如何しても扱ひ易いよ。が、年を老つた悪魔を



向うへ廻した日には、眞個敵はないからね。若い者は始終表面ばかり泳いで居るものだ……皆さん、貴方も何卒御銘々で準備をして下さい。私は今一人で参りますよ——或はポップチンスキ君と一緒に知れませんがね——兎に角、何にも知らないで散歩でもしてるやうな振をして、旅客が好く待遇されて居るか如何か見分に参りますよ。おい、スヴィスツノフ！（巡査の一人に向つて。）

スヴィスツノフ 何御用で御座いますか？

知事 直に警察署長の許へ行つて下さい。あゝいや、お待ち！ お前は用が有るから此處に居ろ……誰かに左様言つて、出来るだけ早く警察署長を喚んで来させて呉い！そして、直に又戻つて来るやうに言ふんだよ。（スヴィスツノフ急いで去る。）

病院監督 さア参りませう、く、アムモス・フワードロヴィチさん。（地方判事に向つて。）實際、こりやア困つた事に成りましたね。

地方判事 何もそんなにびくびくすることはないぢや有りませんか。貴方は患者に清

潔な寝帽を被せてさへ置けば、それで済むんですよ。

病院監督 成程寝帽ですわね！ 法規に據ると、患者には碾割燕麥の肉汁を宛てがふことに成つて居る——それなのに病院の廊下は、何處へ行つても鼻を摘まなくちや歩けない程キヤベツの臭ひがして居る……

地方判事 其處へ行くと、私なんざ氣樂なものですな。誰も田舎の裁判所なぞ訪問しようと思ふやうな氣を起すものは有りませんからね。偶に何かの書類でも一見したいと言ひ出すものが有つたら——其時や如何して可いか、ちやんと心得たものですよ。私やア最う十五年も裁判長の椅子に腰掛けて居ますがね、縦しんばそんな書類に目を通さうとしても——いや、ソロモンだつて、それが眞物か贋物か容易に見分けられたもんぢやア有りませんよ。（地方判事、病院監督、學校長、郵便局長なぞ、一同退出せんとして、戸口で戻つて来た巡査と出會ふ。）



第四場

知事。ホアチンスキ。ドアチンスキ。巡查。

知事で、馬車の用意は出来たかね。

スヴィスツノフ はい、出来て居ります。

知事 街へ行つて居れ……いや待て、待つて呉れ……一體他の者は如何したんだ？

君一人しきや居ないのかね。プロコロフにも此處へ来て待つてるやうに吩咐けたちや

アないか。プロコロフは何處に居るんだ？

スヴィスツノフ プロコロフは署の方に居ります……ですが、何うも只今の御用は勤め兼

ねますよ。

知事 如何したと云ふのだ？

スヴスツノフ 今朝程あの男はべろくに酔つて連れて來られたので、私どもは手桶に

二三杯頭から水をぶつ注げて遣りましたが、未だ正氣が附かないので御座います。

知事 (兩手で頭を掻き撈りながら) あ、如何すれば可いんだ、如何すれば！ 早く

街へ駈けて行け……あゝいや、此處に居るんだ……先づ僕の部屋へ行つて來て呉れ

……こら聞いているか……僕の劔と新しい帽子とを持つて來るんだよ……では、ドブチ

ンスキ君、さア參りませう。

ホアチンスキ 私も何卒……何卒私も御一緒にお伴れ下さい。

知事 いかん、ホアチンスキ君、そりやア駄目だよ。三人も一緒に行けば人目に

立つ。加之、あの馬車は三人も乗る餘地がないよ。

ホアチンスキ いゝえ、そんな事は構ひません。私は馬車の後から駈けて行きますよ、

歩いて……一寸戸の隙間から覗かせてさへ下されば、何んな鹽梅だか大概様子は

解りますよ。

知事 (巡查の持つて來た劔を執りながら) 直ぐ駈けて行つて、下役人の非常召集を



するんだ。そして、私の許へ……何だ、此劍は錆びて居る！ あのアブゾーリンといふ商人は仕様のない奴だな。彼奴は知事の劍が古く成つてると知りながら、新しい劍の一口すら送つて寄越さない！ あゝ、あの悪漢ども！ 用心するが可いぞ、泥棒奴……それで居ながら、彼奴等アは最う皆告訴状や陳状書を用意してるに違ひない、そりやア最う請合つても可い——屹度雨後の菌のやうに出て来るだらうよ……で、衆皆往來を持つて呉れ——往來は皆ひどのだからね——衆皆往來を持つて呉れ——うんにや、往來ぢやない、箒だ。箒を持つて、旅館へ行く通りを掃除して呉れ——清潔にだよ、く——解つたかい、塵一本残らないやうにだよ。それからお前にも注意して置くがね。僕は君のすること位知つてるよ、ちやんと知つてるよ。お前は正直さうな間拔面をして居ながら、こつそり銀の匙を長靴へ入れて持つて行くよ。おい、耳をほつ立てて聽いて居らんか……お前は商人のチエルナエフの店でちよろまかしたことが有るだらう——えゝ？ 先方ぢや制服一着の布地として四ヤールだけお前に渡したの

に、お前は全部一反持つて来て仕舞つた。眞個氣を附けるが可いよ。お前位の地位に居て泥棒するのは未だ早いよ。さア行け！

### 第五場

知事。ホアチンスキ。ドアチンスキ。警察署長。

知事だが、ステバン・イリーチ君、一體君は何處に隠れて居たのだ。左様いふ始末な事をして可いものかね。

警察署長。なに、一寸其處まで用足しに出掛けたのですよ。

知事。まあ、そりや可い！ 聴き玉へ、ステバン・イリーチ君、彼得斯堡から檢察官が遣つて来たよ。最うすつかり準備は出来てるかね。

警察署長。すつかり御命令通りに致しました。往來の掃除には、集められるだけの人足を附けて、巡査のブーゴヴィチンを出して遣りましたよ。



知事で、デルジエモールダは如何した？

警察署長 暖爐から火が出たと云ふので、其方へ参りました。

知事 プロコロフは酔拂つて居ると聞いたが、左様かね。

警察署長 はい——酔拂つて居ります。

知事 如何して君はそれを許して置くんだい？

警察署長 ちや、如何したら可いんです？ 昨日町外れに喧嘩が有りましてね——あの男はそれを取鎮めに参りましたが、如何いふものか酔拂つて連れ歸られたのです。

知事 では、君の仕事を吩咐けるから聴き玉へ。先づあの巡査部長を——あの男は並

外れて身丈が高いからね——秩序を保つために、橋の上に立たせるんだ……それから靴屋の傍の空地だがね、あれを掃除させて呉れ玉へ……そして、彼處に柱を何本も立て、置くんだ、建築でも始まつてると見えるやうな工合にだね。實際、材木だの地形だの云ふものは、ねえ君——爲政者が精勵してると云ふ證據には、それに越したものは

はないからね……だが、あゝ仕舞つた——すつかり忘れて居たが、彼處には四十車にも積み切れぬ程の塵芥の山が打捨つてあつたんだね！ 何てえ汚ない町だらう！

此町にや少くとも何かの記念碑が一つと豫備の空地が有つて可い筈だよ——なのに、何處から持つて来るか知らないが、いろんな塵芥を持つて来て、彼處へ積んで行くんだからな。……で、何だよ、若しあの役人が君等の一人に向つて、此町の者は皆満足して居るかと思つたら——衆皆斯う答へて呉れなくちや不可ないよ、「閣下、此町の者は皆満足して居ります」と……で、若し敢て不満足だと答へるものが有つたら、僕は後で其男に不満足を以て酬いて遣るよ……（深い溜息を吐きながら。）あゝ、私は憐れな罪人ぢや！（帽子だと思つて帽子の箱を取りながら。）あゝ、神様、貴方のお恵みを以て、何卒早く此苦境を免れしめ給へ。御禮には今迄に例のないやうな大蠟燭を捧げますよ。それが爲には、あの商人の悪漢どもから一人當り三百封度の蠟を取立て、遣りますよ。あゝ神様、神様！ さアドブチンスキ君、行かうぢやないか。（氣を取亂した



結果、帽子の代りにボール箱を頭へ載せようとする。

警察署長 閣下、それはボール箱で御座います——帽子は此處に有りますよ。

知事（ボール箱を抛り出して。）なに、ボール箱だと！ え、斯んな物は皆犬にでも喰はれるが可い！……それから衆皆に言つて置くが、五年も前に建築費を割當て、置きながら、何故病院の禮拜堂が出来て居ないのだと検察官から訊かれたらね、衆皆心得て居て、あれは最う建築に懸りましたが、出来上らない間に焼けて仕舞ひましたと言ふんだぞ。尤も、其報告は私も出して置いた……が、間拔けな奴が有つて、あの工事は全然手が附けて有りませんなどと云はないものでもないからね……それからデルジエモールダに餘まり拳骨を振廻さぬやうに言つて呉れ給へ……あの男は身分のある人となない人とに論なく一々角燈を鼻の下へ突き着けるんだからね——成程、左様すりやア誰もあの男が懈らず張番して居ることを承知するだらうがね。ドブチンスキ君、さア行きませう、——！（立去らうとして、再び戻つて來ながら。）それからだね

……あの襦袢を着た兵隊どもを決して街へ出さぬやうにするんだよ。あの守備兵どもは襯衣の上にいきなり外套しか着て居やアがらない——下の制服は何處へ行つたんだか行方が知れないんだよ。（一同出て行く。）

## 第六場

アンナ・アンドレエヅナとマヨヤアントノヅナの兩人奥より駆け出す。

アンナ 衆皆何處へ行つたんだらう？ 何處へ行たんだらう？ あゝ如何しようねえ……（戸を開けて。）所天！ 所天！ 何處に居るんですよ？（娘に向つて、口早に。）これも皆お前さんが悪いのだよ。やれ留針がないの、小カラアが見附からないのと、ぐづくしてるもんだからですよ。（窓の側へ走り寄つて呼ぶ。）所天、何處へ行つたんですよ、何處へ？ あの検察官とやらは最う着いたのですか。口髯のある方？——何んな、大きい方なんですか。



知事の聲あゝ、直きだよ、く、直きに歸つて来るよ。

アンナ 直きだつて……まあ斯んな珍しい話なのに、直きだなんて言つてるんだもの！ 直きぢやア何にも解りませんよ。只一言で可いからさ。其人は一等上役なんですか、えゝ？（憎さげに。）あゝ行つて仕舞つた。本當に仕様がなないよ。これもお前さんのお蔭だから、左様思ひなさい。又お前が『阿母さま、最う直きなのよ。此の小カラアを捲き附けさへすれば、最う可いのよ』なぞと、何時迄も懸つて居るんだものね……本當に『直きだ』つて言はれる位忌々しいものはないよ。可いかい、何にも聞かれなかつたのはお前の所爲だよ。それも皆お前さんのお洒落が長いからさ。郵便局長が来て居ると聞いたものだから、お嬢様姿見の前に立つたまゝ、右から見たり左から見たり、前から見たり後ろから見たり、大騒ぎなんだよ——其間にあの人達はさつさと行つて仕舞つたぢやアないか。お前さんはあの人がお前に取入る氣だと想つてお坐のやうだがね、そりやア間違ひだよ——あの方はお前が脊中を向けたら、直に舌を出し

て笑つてるんだからね。

マリヤ だつて阿母さま、仕様がなないぢや有りませんか……でも、左様こぼすことはないわ、何うせ一二時間の中には何も彼も知れるんですものね。

アンナ 一二時間だつて！ 何うもお世話様！ 成程、そりやア仰有る通りだわね。

何故お前さん一二箇月の間にはと言はないのだい？ 其方が一層好く知れる筈だよ。

（窓に凭つて。）あゝオイドキシヤや、お前他所の方が被入したと云ふ話を聞いたかい。

……なに、何にも聞かないと？……何にも知らないなんて、お前も餘程馬鹿だねえ？

おい、そんな面膨らせるのはお止しよ——お止しつてばさ！ だが、何故他人に訊いて見ないのだい？ 左様だ、此奴は男に言はれた口説で頭が一杯に成つて居て、それだけの事を訊く暇がなかつたんだよ……何だつて、衆皆大急ぎで往つて仕舞つたんだよ……それぢやアお前も馬車の後から駆けて行つたら可いぢやアないか。さア大急ぎで駆けてお出よ——あの人達が何處へ行つたか、好く聞いて来るんだよ……それか